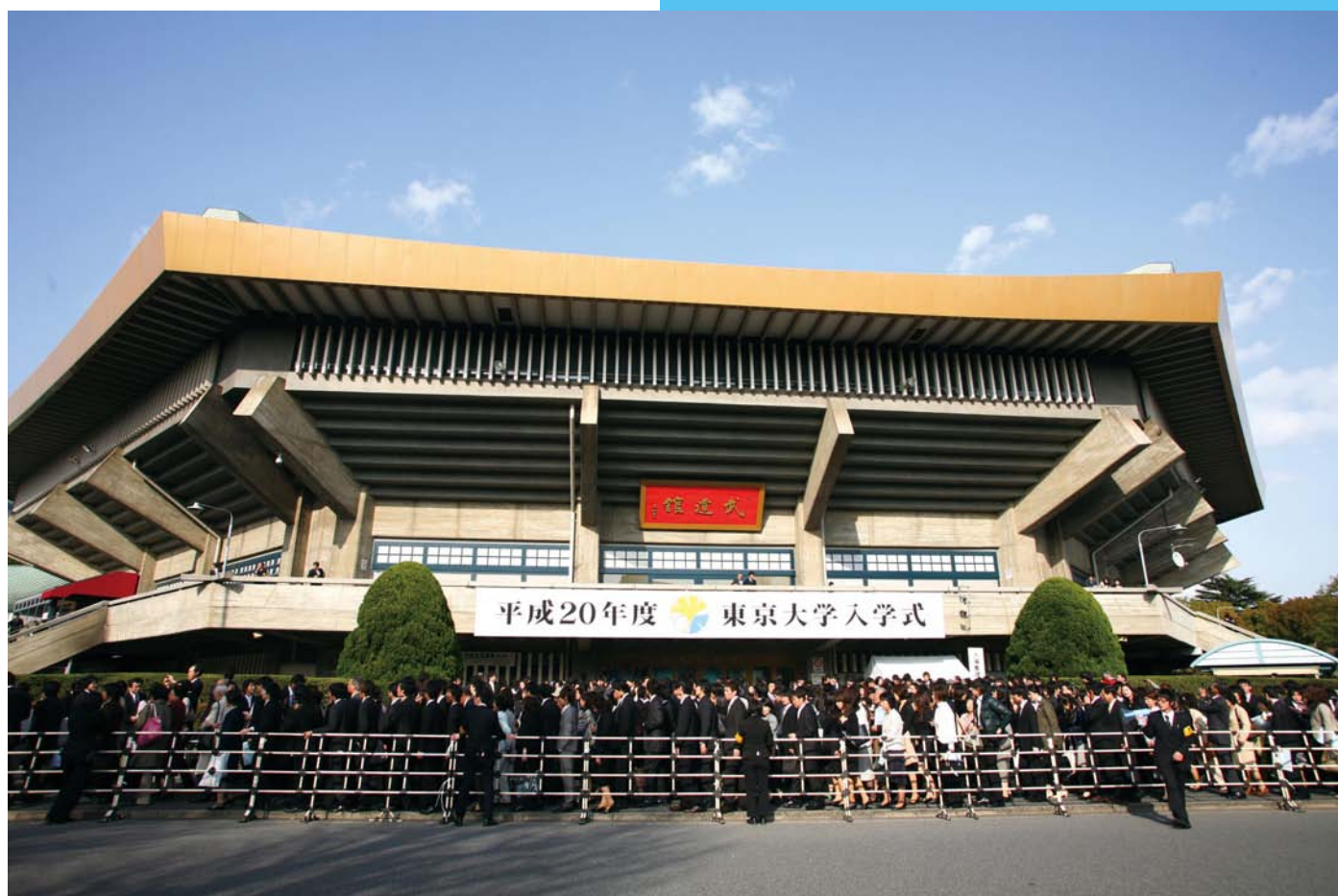


# 学内広報

for communication across the UT



特集：平成 20 年度役員等の紹介  
平成 19 年度卒業式・学位記授与式  
平成 20 年度入学式・大学院入学式  
平成 19 年度第 2 回「東京大学総長賞」

平成20年度役員を以下のとおり、紹介します。

総長

**小宮山 宏**

<任期>平成17年4月1日～平成21年3月31日

理事（副学長）

**岡村 定矩**

【担当】教育 情報 環境安全

総長室総括委員会 研究環境

【任期】平成20年4月1日～平成21年3月31日

理事（副学長）

**西尾 茂文**

【担当】財務 施設

キャンパス サステイナブル・キャンパス

【任期】平成20年4月1日～平成21年3月31日

理事（副学長）

**濱田 純一**

【担当】総務 広報

アクションプラン統括 教員人事

【任期】平成20年4月1日～平成21年3月31日

理事（副学長）

**浅島 誠**

【担当】国際 学生

留学生 理想の教養教育

【任期】平成20年4月1日～平成21年3月31日

理事（副学長）

**高橋 宏志**

【担当】企画 評価

中期目標・計画 教員規律 入試

【任期】平成20年4月1日～平成21年3月31日

理事

**山田 興一**

【担当】産学連携 渉外

監査 EMP（エグゼクティブ・マネジメント・プログラム）

【任期】平成20年4月1日～平成21年3月31日

理事

**辰野 裕一**

【担当】人事労務 事務組織

業務改善 男女共同参画

【任期】平成20年4月1日～平成21年3月31日

副学長

**平尾 公彦**

【担当】研究 病院

卒業生（室） バリアフリー

【任期】平成20年4月1日～平成21年3月31日

監事

**石黒 光**

【任期】平成20年4月1日～平成22年3月31日

監事

**漆館 日出明**

【任期】平成20年4月1日～平成22年3月31日

平成20年度総長特任補佐、副理事、総長室顧問を以下のとおり、紹介します。

総長特任補佐（副学長）

**前田 正史**

【担当】 国立大学協会  
EMP（エグゼクティブ・マネジメント・プログラム）

【任期】 平成20年4月1日～平成21年3月31日

副理事

**杉山 健一**

【担当】 渉外

【任期】 平成20年4月1日～平成21年3月31日

総長特任補佐（副学長）

**磯部 雅彦**

【担当】 柏キャンパス

【任期】 平成20年4月1日～平成21年3月31日

副理事

**三浦 充**

【担当】 調達

【任期】 平成20年4月1日～平成21年3月31日

総長特任補佐（副学長）

**松本 洋一郎**

【担当】 アクションプランの構造化、知の構造化

【任期】 平成20年4月1日～平成21年3月31日

総長特任補佐

**吉川 洋**

【任期】 平成20年4月1日～平成21年3月31日

総長特任補佐

**森田 朗**

【任期】 平成20年4月1日～平成21年3月31日

総長特任補佐（副学長）

**小森田 秋夫**

【担当】 高等研究所、アクションプランの構造化

【任期】 平成20年4月1日～平成21年3月31日

総長室顧問

**古田 元夫**

【任期】 平成20年4月1日～平成21年3月31日

総長特任補佐（副学長）

**武内 和彦**

【担当】 国際関係

【任期】 平成20年4月1日～平成20年6月30日

平成19年度卒業式が、3月25日（火）に、大講堂（安田講堂）において挙行された。

式は、第一部（9時開式）文系・教養学部、第二部（11時開式）理系学部の2回に分けて行われ、約3,000名の卒業生（卒業生数3,228名）が出席した。

開式に先立ち、総長をはじめ、理事・副学長、各学部の学部長及び代表教員、並びにご来賓（経営協議会学外委員、校友会役員、各学部の同窓会等代表者）の方々がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となった。

はじめに、音楽部管弦楽団による「管弦楽組曲第一番」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、第一部は濱田理事・副学長から、第二部は浅島理事・副学長から学事報告が行われ、小宮山総長から、各学部卒業生代表に、順次、学位記が授与された。続いて、小宮山総長から卒業生に告辞が述べられた後、卒業生総代（第一部 法学部 柴橋資郎さん、第二部 医学部 島村純一さん）から答辞が述べられた。その後、音楽部コールアカデミーによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終了した。

なお、本学の卒業式では、壇上において手話通訳を行い、卒業生の父母会場（法文2号館31番教室、3番大教室及び1番大教室）では、スクリーンに大講堂での式典の様相（手話通訳の映像と筆記のテロップも表示）を放映し、父母など約3,300名が出席した。

また、2回の式ともインターネットによるライブ中継を行った。2回目の式終了後13時から14時まで、卒業生及び父母などに、大講堂（安田講堂）の一般開放を行い、約800名の方が来場し、自由にご覧いただいた。

## 平成19年度東京大学卒業式総長告辞



東京大学総長  
小宮山 宏

ご卒業おめでとうございます。いま、この卒業式という厳粛な場で、皆さんが東京大学に入学したときの初心を、改めて思い起こしていただきたいと思います。この大学で学びたいと考えていたこと、やり遂げたいと思っていたことは、実現できたでしょうか。精一杯に、充実した時間を過ごせたでしょうか。大学での日々の一コマ一コマをもう一度振り返りながら、これから新しい旅立ちに向かうことへの決意を確かなものとして下さい。

昨年4月、東京大学は創立130周年を迎えました。そして、11月の記念式典をはじめ、この1年にわたって、数多くの記念事業を実施してきました。皆さんも、この間、「未来的で、知的な生命体」をイメージした、130周年のシンボル・マークを、あちこちで目にされたことでしょうか。あるいは、研究シンポジウムや国際交流スポーツ大会など、さまざまな事業企画に積極的に参加した皆さんも、多いことと思います。

そこで東京大学が目指したのは、「時代の先頭に立つ」ということです。国立大学法人化後初めての周年行事という節目を迎えて、大学の過去の実績を振り返るだけではなく、むしろ、これまでの豊かな教育研究の蓄積をさらに未来へと生かしていく、その覚悟を固めることが130周年を祝う精神でした。皆さんはまさしく、その130年にわたる知の歴史の申し子であり、であればこそ、東京大学は自信をもって、皆さんを未来に向けて、送り出していくことができるのです。

「時代の先頭に立つ」というのは、どういうことでしょうか。「時代」を表象するものは、政治であり、経済であり、技術であり、あるいは文化でもあります。しかし、それだけではありません。何よりも、「時代」というのは人々の日々の生活です。



今日卒業していく皆さんには、社会の華やかな場面だけではなく、人々の生活の場一つ一つを大切に、それぞれの場で先頭に立って活躍をしてもらいたいと願っています。

また、「先頭に立つ」というのは、言うまでもなく、人より良い成績をとるということではありません。これまでの時代が作ってきたものを、ただ利口に学ぶだけでは、「先頭に立つ」ことはできません。「時代の先頭に立つ」ということは「時代を創っていく」ということです。つまり、社会のあらゆる場面で、率先して、先見的な創造力を発揮していくということです。

そのように「時代の先頭に立つ」ためには、時代のあるべき方向を鋭く感知する能力が求められます。そうした能力は、どのようにして培われるのでしょうか。

日本は、明治維新以来、積極的に欧米先進国の文化や学問を取り入れてきました。20世紀後半に至る100年間は、欧米に学ぶべきモデルが存在し、それに追いつこうとひたすら拍車をかけた時代でした。その意味で、日本は、長い間、「時代の先頭に立つ」ことが難しい状態が続いてきたのです。

しかし、21世紀に入った現在、地球環境問題に代表されるような人類危急の課題に、どの国も次々と遭遇し、解決の道を模索している状況、つまり、真似ようにもモデルのない状況が生まれています。その中で、今日の日本は、こうした地球規模の課題に対して、世界に先駆けて取り組むことができる科学技術や社会的な仕組みを有するようになっていきます。

私が専門とするエネルギー工学の分野でも、日本は省エネで効率の高い技術を、世界に先駆けて実現しています。たとえば、発電技術を見ると、日本では1kwhを発電するのに発生する硫酸化合物は0.2グラムほどであり、他の先進国、たとえばアメリカと比べると20分の1、ドイツと比較しても3分の1から4分の1にもなっています。つまり、圧倒的にクリーンな火力発電を行っているのです。トップランナーとして世界にモデルを提供できる科学技術を、私たちは持っています。

生活廃棄物への対策でも成果を挙げています。日本には、国土が広いアメリカや、比較的小さな都市が広大な平野に分散しているヨーロッパとは異なった、厳しい制約条件があります。たとえば、都市の規模が大きく、市民の生活レベルが高いため、生活廃棄物の発生密度が高く、埋める場所も少ないという事情です。また、高温多湿のために廃棄物の腐敗速度が速いという問題もあります。このように、日本では廃棄物に関する課題が山積みであったために、課題に対して必死で答えを出そうとしたのです。そして、さまざまな分別回収方式や高温焼却技術などの開発がなされました。そうした努力の結晶の一つが、愛知県の藤前干潟の保護です。世界最高レベルの廃棄物処理システムを確立したことが、この日本有数の渡り鳥の飛来地である干潟を、埋立地とされることから救いました。

課題がたくさんある日本だからこそ、それを克服する知恵や科学技術も生まれるのです。これは、すでに存在するモデルの真似をしようとするキャッチ・アップの発想からは生まれません、いわば逆転の発想です。すなわち、21世紀には、「課題先進国」である日本が、地球規模のさまざまな問題に対し率先して先頭に立ち、「課題解決先進国」となりうる機会が生まれているのです。

このように、科学技術の発展は、時代の先頭に立っていることので分かりやすい表れ方の一つです。しかし、そもそも、課題を課題として感知し、それに取り組んでいこうとする意識は、どのようにして育つのでしょうか。その基本にあるのが「他者を感じる力」であると、私は信じています。ここでいう「他者」とは、あるいは友人であり、あるいは周囲の人々であり、さらには社会そのものでもあります。「他者」というのは、物理的に別の存在という意味合いもありますが、意識の面からみれば、「異質なるもの」です。つまり、自分もつ知識や考え方、感覚などとは異なるものの存在を感じ取り、その異質性を理解しようとする力、そして、その異質性を自己の課題として受け止めようとする力が、「他者を感じる力」です。こういって、いかにも仰々しいようですが、私たちのごく身近なところで、その力の発揮を求められる場面がたくさんあります。そのいくつかを取り上げておきましょう。

「異質なるもの」と出会う一つの大きな機会が国際交流の場であることに、おそらく異論はないと思います。

皆さんは、学部で過ごした間に、何人の外国の人たちと友人になったのでしょうか。現在、東京大学では2,400人を越える留学生が学んでいますし、外国人教員は300人近くがいます。そうした留学生や教員と友人になることができたのでしょうか。私は、世界の代表的な大学の一つである東京大学としては、もっとも多くの留学生や外国人教員を受け入れるべきであると考えています。留学生や外国人教員が増えることで、私たちのキャンパスが、多様な習慣や多様な文化・歴史をもった人々の集う場になる姿を思い浮かべることは、心踊るものがあります。それは、こうした環境の中で、異質なるものとの出会いが日常化することが、大学という場の本質である知の創造のための、素晴らしい栄養素になると確信しているからです。

先ほど創立130周年を記念して、未来に向けたさまざまな事業が行われてきたことに触れましたが、その一環で、大学改革への学生の主体的な参画のモデル・ケースとして、「学生企画コンテスト」という事業を実施しました。学生の皆さんから応募があった数多くの企画の中で、留学生が病気になったときの受診支援システムを考えた企画が、優秀賞をとりました。

また、佳作を授与されたのは、留学生と日本人学生との自然体験合宿を通じて、交流促進と国際交流活動のリーダーを養成しようという企画でした。このように、学生の皆さんが、周りにいる留学生のことを日々考えていることに、私は大きな感動を覚えました。

皆さんが、国際交流の場に自らを開いて「異質なもの」と出会うために、もちろん語学は必要です。しかし、それ以上に大切なのは、自分自身の言動や発想を客観化する視点を持つ、ということです。これは、別の言い方をすると、「他者の視点で自分を振り返る」ということです。親友を作ること、とくに、外国の人たちと友人になることは、自分と他者との間にあるギャップを理解することから始まります。そして、そのギャップをどのようにして埋めるか、埋めたいか、という思いを起点にして、自分自身の言動、それを取り巻く日本の社会、その文化や習慣、歴史も含めて、もう一度考え直す姿勢が生まれるのです。それがまさしく、「他者を感じる力」です。

言うまでもなく、「他者を感じる力」というのは、「場の空気を読む」ということでも、「相手に合わせる」ということでもありません。そうではなく、「差異の認識を梃子として創造を生み出す力」、と言ってよいかも知れません。

私が心惹かれた哲学者に、リチャード・ローティという、20世紀アメリカのネオプラグマティストがいます。昨年、残念ながら世を去りましたが、彼は、「真理」が時間や歴史、つまり「時代」を越えて存在するという観念を否定しています。その考え方に会うまで、私は、哲学者というのは当然、「真理」とは永遠不変の存在であると捉えているものと、素朴に思い込んでいました。それだけに、彼の議論は私にとって新鮮な驚きであり、また、探求とは収束を目指すものではないという彼の主張に、共感を覚えました。だからこそ、私は、「時代の先頭に立つ」という言葉を用いる時にも、先頭に立つ場面での、「発見的」ではなく「創造的」な役割の重要性を強調したいと思うのです。

ローティは、また、異質なもののどうしの触れ合いを、ポジティブに捉えていました。哲学の役割を「刺激的で実りある不一致」の増進に求め、また「会話」の機能を一致ではなく、むしろ、異質な他者との邂逅に求めて、異質なものと共生を論じたのです。皆さんはすでにお気づきかもしれませんが、そもそもこうした「会話」や「共生」を可能にするものこそ、私が申し上げてきた「他者を感じる力」に他なりません。

今日の細分化した学問の世界のあり方を考える上でも、異質なものととの出会いを楽しもうとする「他者を感じる力」は、とても大切です。20世紀の間における学問の専門分野の著しい

細分化は、かつての自己の一部が分裂して他者になっていくという現象でした。この細分化は、研究の集中的な深化を進めるという大きな意義はあったものの、他方で、学問の全体像が見えにくくなり、また学問の総合力が発揮しにくくなるという問題を引き起こしました。そこで、細分化した多様な専門分野にお互いに「他者を感じる力」が求められるようになってきているのが、現代の状況です。私が「知の構造化」ということを繰り返して主張していること、また、この3年の間に、教養学部において「学術俯瞰講義」を実施することに力を注いだのも、このことに関係しています。皆さんの中にも受講された人がおられると思いますが、「学術俯瞰講義」は教養教育の最先端をいく試みです。教養教育を今後どう充実させていくかは、世界中で議論されている課題ですが、私は、困難の本質は「知の細分化」にあると考え、また、教養教育を先端の学術と乖離させないことに意を用いながら、リベラルアーツの再構築という点でも「時代の先頭に立つ」ことを目指してきました。

「知の構造化」の実践的な手法という点では、細かいことに拘るのではなく、大局的に、大掴みに切ってみせることも必要です。そして、「一緒にやりましょう」と旗印を立てて、分野を問わず共通のテーマに興味をもつ人たちが集ってネットワークを組織し、連携していく仕組みを作ることが大切です。

私の経験を少しお話しすると、1980年頃、ある学術雑誌で半導体の特集を組むことになり、何人かの大学や企業の人たちと時には泊りがけで議論を重ねました。ちょうど、身近な機器がどんどん小型になり、その心臓部ともなる半導体の製造方法に注目が集まった頃です。このような意見交換の中から、全体の大きな構造の中で自分の専門分野として追究すべきことが見えてきました。それが、「半導体の薄膜を作る化学プロセス」という私の研究につながったのです。その後、地球温暖化や化石資源の枯渇をテーマに、環境工学の最前線へと出て行くことが出来たのも、このような、さまざまな分野の研究者との議論があったからです。そこでは、異質性をぶつけ合う中での「他者を感じる力」が、友人や仲間を作っていく力となり、同時に、総合的な知の分野を開拓していく力になったと思います。

「異質の仲間を作れ」、「議論を惜しむな」と、私はあちこちで話しています。これは、大学院で研究者を目指す皆さんだけに送るメッセージではありません。民間会社や官庁などに入っていき皆さんにも共通して大切な事柄です。今の時代、インターネットで手軽に膨大な情報を得ることができます。ちょっとした手間で列挙できるカタログ的な情報、これがグーグルの発想であり、あるいはウィキペディアの発想です。しかし、それらを処理する人間の脳は、おびただしい細かな情報を集積するのは苦手なのです。むしろ、人間の脳は大局的に俯瞰

する能力に長けています。その知識に裏づけられた知性を武器に、異った知識や考え方の人たちと議論することから、お互いの連帯や協調も生まれるのです。こうした連帯や協調は、どこかからお仕着せで与えられるものではありません。むしろ、それらを、自らの「他者を感じる力」を通じて形成していくプロセスこそが、人間を鍛え、大きな成果を生み出す原動力になると、私は信じています。

皆さんの多くは、学部で学んでいる間、比較的限られた交友範囲の内で過ごしてきたのではないかと思います。しかし、今日卒業した後は、大学院に進むにせよ社会に出て行くにせよ、突然に、多くの「他者」の中に置かれることになります。そうした場で、皆さんには、新しい世界を前にして他者を恐れるのではなく、他者を感じてもらいたいと思います。異質なものの存在を楽しみ、それを自らの力を高める糧としてもらいたいと思います。その中から、社会のさまざまな場で、時代の先頭に立って創造力を発揮していく皆さんの姿を、心から期待しています。

今日の卒業式は、学士課程を皆さんが無事に修了されたことを証する式であって、大学との別れの日ではありません。私たちは、これからも皆さんの活躍を見守り続けますし、また、皆さんにも東京大学の発展をしっかり見守って頂きたいと思えます。

いまここにいる皆さんの、自信と意欲に満ちた眼差しに、日本のどこかで、あるいは世界のどこかで、再び出会えることを楽しみに、告辞を終えることといたします。

<平成二十(2008)年三月二十五日>



## 第一部 答辞

卒業生総代 法学部 柴橋 資郎

本日は、私たち卒業生のためにこのような盛大な式典をご用意くださり、誠にありがとうございます。ご臨席を賜りました小宮山総長をはじめ、ご多忙にもかかわらずご出席くださった皆様に、卒業生一同心より御礼申し上げます。

振り返れば、私が東京大学に入学したのは今から4年前。これから始まる大学生活に大きな期待を寄せて駒場キャンパスの正門に立ったことを、つい昨日のことに覚えております。決まった教室に自分の机があるわけでもなく、一緒に講義を聴く友人の顔ぶれもいろいろ——高校までの生活とは違うそんな生活に慣れるまでには、ほんの少しだけ時間がかかりました。しかし、卒業の時を迎えた今では、大学生活のそんな側面は非常に魅力的であるように思われます。自分の居場所を自分で見つけようとするうちに、どれほどたくさんの人たちにめぐり逢うことができたか、そしてその人たちとの出逢いが自分自身にとってどれほどの糧になったか。素晴らしい出逢いの数々に思いを馳せると、東京大学で過ごした時間は自分自身の人生にとって欠くことのできない1ページであったということに、疑いの余地はありません。

私は、法学部のゼミでたくさんの本と出会い、先生のご指摘や先輩方のご発言からさまざまなことを学ぶことができました。私が所属したゼミでは、昨年卒業なさった先輩方との交流が絶え間なく続くほど学生同士の仲が良く、自信を持って一生涯にわたる財産を得たと言うことが出来ます。また、私は数あるサークル活動の中から「東京大学ピアノの会」に所属しました。4年間の活動の集大成として先日行った卒業演奏会では、4年間苦楽を共にしたメンバーと笑い合ったり、先輩方や後輩たちから盛大に卒業を祝福してもらったりして、学生生活最後にとびきりの思い出を作ることができました。このように東京大学での4年間は、私たちにたくさんの実り豊かな出逢いを授けてくれました。そんな一つ一つの素晴らしい出逢いを、どうやって今後の人生に活かしていくのか——それを模索していくことが、私たち卒業生に与えられる大きな使命となるでしょう。また、この東京大学で学んだことを誇りに思い、ここで受けた恵みを、自分たちの人生にだけでなく、より広く社会へと還元していく責任を強く自覚しなければなりません。そして日本のために、ひいては世界のために大きく貢献できる人間になることを目指して、卒業生一同今後とも精進してまいります。

最後になりますが、未熟な私たちにもいつも適切な助言を与えて下さった諸先生方、また様々な場面で私たちを支えて下さった職員の皆様に、改めて御礼申し上げるとともに、大学卒業を迎えた今日まで私たちの成長を見守り続けてくれた家族に感謝します。そして東京大学の一層の発展を願い、答辞とさせていただきます。

## 第二部 答辞

卒業生総代 医学部 島村 淳一

本日は、ここに卒業の日を迎えることができ、卒業生一同大変嬉しく思っております。私たちのためにこのような素晴らしい式典を挙げていただき、心から御礼申し上げます。

入学からの年月を振り返りますと、私たちは様々なかけがいのない体験をして参りました。日々の勉強や課外活動、学校行事はもちろんのこと、在学中に先生方から教えていただいたこと、そして友人と過ごす中で得たことは計り知れず、私たちの今後の人生における貴重な財産です。素晴らしい先生方や友人たちとこのような時間を共有できましたことは、在学中は当たり前のように感じておりましたが、今振り返りますと懐かしい思い出です。

そして、いざ卒業となりますと、将来への第一歩を踏み出す希望を抱くと共に、一抹の寂しさも感じます。また、在学中には折りに触れ東京大学の歴史を感じて参りました。

私たちは先輩方の築かれた伝統の下に今日学べていることを自覚し、その伝統を引き継ぐと共に、これからも東京大学がさらなる発展を遂げることができるよう、それぞれの科学技術の分野で精進していきます。私たちの在学中にも、世界規模では地球温暖化を代表とする環境問題、日本においては少子高齢化問題や産業の国際競争の問題など、科学技術や医療を取り巻く問題が次々と提起されて来ました。このような解決困難な諸問題に対して、私たち東京大学理系学生が科学技術を通して果たすべき役割はますます大きくなると思います。私たちは在学中に学んだことを最大限に活かし、これらの課題に取り組んで行く決意です。

最後になりましたが、今日までご指導下さった先生方、共に学生生活を過ごした友人、家族、そして私自身医学生として実習でお世話になった患者様他、お世話になった全ての方に深く御礼申し上げ答辞とさせていただきます。



(特集写真撮影：尾関裕士)



平成19年度学位記授与式が、3月24日(月)に、大講堂(安田講堂)において举行された。

式は、第一部(9時開式)理学系研究科、工学系研究科、農学生命科学研究科、医学系研究科、薬学系研究科、数理科学研究科及び情報理工学系研究科、第二部(11時開式)人文社会系研究科、教育学研究科、法学政治学研究科、経済学研究科、総合文化研究科、新領域創成科学研究科、学際情報学府及び公共政策学教育部の2回に分けて行われた。式には、約2,700名の修了生(修了者数4,404名(修士課程2,884名、博士課程1,121名、専門職学位課程399名))が出席した。開式に先立ち、総長をはじめ、理事・副学長、各研究科長及び各研究所長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となった。

はじめに、音楽部管弦楽団による「ヘンデル作曲『王宮の花火の音楽』より『序曲』」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、第一部は岡村理事・副学長から、第二部は高橋理事・副学長から学事報告が行われ、小宮山総長から各研究科・課程の修了生代表に、順次、学位記が授与された。

続いて、小宮山総長から修了生に告辞が述べられた後、修了生総代(第一部 理学系研究科博士課程 岡村圭祐さん、第二部 人文社会系研究科博士課程 李永晶さん)から答辞が述べられた。その後、音楽部コーラルアカデミーによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終了した。なお、本学の学位記授与式では、壇上において手話通訳を行い、修了生の父母会場(法文2号館31番教室、3番大教室及び1番大教室)では、スクリーンに大講堂での式典の様相(手話通訳の映像と筆記のテロップも表示)を放映し、父母など約2,400名が出席した。

## 平成19年度学位記授与式総長 告辞

東京大学総長  
小宮山 宏

本日ここに、博士、修士、専門職学位の称号を授与された皆さんを迎え、授与式を執り行うことが出来ることを嬉しく思います。本年度、本学において博士号を取得された方々は1,121名、修士号を取得された方々は2,884名、専門職学位を取得された方々は399名にのぼり、東京大学の教職員を代表して心よりお祝いを申し上げます。また、この日に至るまで皆さんを支えて下さった多くの方たち、とりわけご家族の方々に対しても、お祝いを申し上げたいと思います。

東京大学は、世界の知の頂点を目指した幅広い学術活動の中で、高度な水準の教育を提供していることを誇りとしてきました。そうした恵まれた環境の中で、皆さんは、日々勉学に邁進し、その成果の象徴として、今日めでたく学位を授与されることになったのです。これまで個々の専門分野を深く掘り下げて学んできた皆さんが、これからさらに力強い歩みを始めようとする節目にあたって、私からのアドバイスとして、「全体像をつかむ」という言葉を贈りたいと思います。

ごく卑近な例からお話ししましょう。皆さんの中には、いわゆるカー・ナビを使用している人も多いと思います。縮尺を大きくすると詳細な街路の形が読み取れ、目的とする場所に到着間近の時にはとても便利です。カー・ナビは、ほぼ機器まかせで、皆さんを目的地に案内してくれます。ただ、不案内の土地では、その目的とする場所が、たとえば大きな都市の中でどの

あたりにあるのか、縮尺が大きいと分かりません。そこで、おそらく皆さんは、小さい縮尺に切り替えて、俯瞰的な地図の上で、目的とする場所のあたりをつけるでしょう。そうすると、その目的の場所が、周辺の地域とどういう位置関係にあるのか、周辺に何があるのかも理解することができます。見知らぬ土地にカー・ナビを使って出かけるときには、皆さんは、縮尺の倍率を大きくしたり小さくしたりして、目的地を読み取ろうとすることが多いはずで、知的な活動に携わる場合にも、そのように、詳細に部分を見ることと、俯瞰的に全体を見ることとの、往復を行ってもらいたいのです。

カー・ナビの場合は、あらかじめ定められたプログラムに従って、効率的に目的地にいたる経路を示し、音声で導いてくれます。その点では、大きい縮尺だけでも、決定的な不都合はありません。しかし、これから未来に向けて歩もうとする皆さんの世界は、学問の場にしても、広く社会の場にしても、あらかじめ定められたプログラムがあるわけではありません。また、だからこそ、そこに新たな発見や出会い、また、創造や工夫のチャンスというものが存在するのです。そこでは、むしろ皆さん自身がナビゲーターとなって、縮尺を大きくしたり小さくしたりしながら、自分が歩もうとする方向を見定めていかなければなりません。皆さんは、これまで大学院において、多くの場合は、対象を絞り込んだ研究、つまり、どちらかと言えば、縮尺の大きな研究を行ってきたことと思います。そこで一定の成果を取めた皆さんには、今度は小さな縮尺で、つまり「全体像をつかむ」視点での歩みも試みてもらいたいのです。

では、「全体像をつかむ」というのは、どういうことでしょうか。その核心となる概念は「知の構造化」であり、また、それ

を実践する教育の試みが、教養学部で開始した「学術俯瞰講義」であることを、私はいろいろな機会に語ってきました。

「知の構造化」とは、とりわけ20世紀において爆発的に増え、また無数の専門分野に細分化された知識を、階層的に整理して使いやすい形にすること、知識を互に関連づけて学問の全体像を浮き彫りにすること、さらに、最先端の学問と社会における価値とを結びつけること、です。

今日は、この「全体像をつかむ」ということについて、概念の定義よりも、その本質を感覚として理解してもらえような話をしておきたいと思います。

皆さんは、「パスツールの瓶」というものをご存知でしょうか。フランスで生まれたルイ・パスツールは、19世紀を生きた人で、ロベルト・コッホとともに「近代細菌学の祖」と呼ばれています。かつて、生物は自然発生するものだと考えられていました。たとえば、コバエは、物が腐るとともにどこからともなく発生するように見えます。また、物が腐るのも、細菌など微生物によって有機物が分解される現象であるのに、栄養さえあれば何となく起こるように見えます。パスツールの実験では、フラスコの首の部分の部分を細長く伸ばしてS字状に折り曲げた、「パスツールの瓶」というものを用いました。この瓶を用いると、空気は出入りするのですが、チリや微生物は入りません。煮沸して殺菌した肉汁を、このフラスコ内に放置しても、コバエの発生はもちろん、腐敗もしなかったのです。この実験によって、コバエや微生物が空気中から飛んできたものであることがわかりました。

もし皆さんが、微生物の存在を明らかにしようという当時の状況に置かれたら、どうするでしょうか。肉眼では見えない小さな生き物がいるのなら、顕微鏡の解像度を上げていけば必ず見えるはずですから、改良を重ね、自分の目で見えるように努力するでしょうか。それまで目に見えなかったものを可視化することが出来れば、それは素晴らしいことです。

しかし、そこには難しい問題が存在します。拡大して見えたものが探している微生物なのかどうか、どのように判断するのでしょうか。電子顕微鏡を使って百万倍の倍率で観察したとすれば、わけの分からないタンパク質と膜の固まりが見えるでしょう。このやり方は、部分像を徹底的に追究する、ある種の「力技」です。ただ、見えたものが一体何なのか、どういう意味をもつのか、その判断は、全体像と部分像とのしなやかな組合せを通じ本質を抽出することによって、初めてなされるのです。パスツール型の実験は、いわば全体像を描くためのものと言ってよいでしょう。パスツール自身は、微生物を取りだして見せたわけでもないのです。彼はむしろ、「パスツールの瓶」という素朴な器具と絶妙な論理を用いて全体像を描いたのです。

これは、空間軸ないしスケール軸からの観察ですが、同様の

認識は、時間軸からの観察を通じても得られます。

たとえば、昨年ノーベル平和賞が授与されて話題となったIPCC（気候変動に関する政府間パネル）による地球温暖化問題への評価に対しては、否定的な見解も存在します。それは、地球は常に変化してきたのであって、温暖化などはそのささいな部分現象に過ぎない、などといった反論です。たしかに、130数億年の宇宙の歴史、40数億年の地球の歴史、さらには地球誕生から数億年経った頃に始まった生命の歴史、といった時間軸からみると、地球は常に変化してきました。しかし、その変化を理由に地球温暖化問題を軽んじる議論は誤りである、私はそう思います。地球温暖化問題は、100年か、せいぜい千年の問題です。100年先に気温が3度上昇したとしたら、いったい人類文明は持続できるのだろうか、という問題です。

皆さん、100年と1億年の長さの差を実感できるでしょうか。100年が百回繰り返されてようやく1万年です。それが人類の歴史の長さです。現人類共通の祖先がアフリカを出たといわれるのが、その約10倍、10万年前のことです。10万年が千回繰り返されて、ようやく1億年になります。2億年前のジュラ紀には気温は数度高かったという地球の歴史と、地球温暖化問題とを混同してはいけません。私たちは、空間と時間からなる時空間を縦横に、また冷静に駆けめぐり、全体像と多くの部分像とを相互に位置づけ、関連づけて、問題の本質を正しく把握する必要があります。

人類の知は、言うまでもなく、いまお話したような時空間のみならず、文化や技術、哲学、宗教などといった、多くの視点から形成されています。とても知の全貌など把握できない、私たちは知識を持ち過ぎてしまったのかもしれない、そんな風を感じてしまうほどです。しかし、多くの知を持ったことは、もちろん人類の発展そのものであって、持ち過ぎなどということはありません。必要なのは、こうした膨大な知識の多次元空間をダイナミックに飛翔し、本質を把握する、しなやかな知性なのです。白鳥の首筋のように優美な曲線をもった「パスツールの瓶」の話は、ある意味で、こうした本質を把握する知性を象徴しているのかもしれない。

「全体像をつかむ」しなやかな知性は、狭い意味の学問の枠の中だけでなく、学問と社会とのかかわりという点からも大切なものです。

一般に「学問が社会性を持つ」というのは、社会科学や人文科学などの領域では当然のことと考えられているだろうと思います。また、自然科学でも、工学などは、社会とのかかわりが見えやすい分野です。ただ、思いがけないところに、学問と社会とのかかわりが存在することもあります。

しばしば世の中でバブル経済ということが話題になりますが世界初の経済バブルは1635年、オランダで起こりました。

チューリップの球根に異常な高値がつき、その売買に狂喜乱舞した時代ということで、「チューリップ狂時代」とも呼ばれています。美しい斑入りの花を咲かせるエキゾチックなチューリップの球根が投機の対象になって、それに天文学的な金額が支払われたのです。その2年後、1637年に至って、チューリップ・バブルは、やはり世界初のバブル崩壊を引き起こし、破綻します。ただ、見落としてはならないのは、そこでウイルス操作のテクニックが、それと知らずに使われていたことです。実は、こうした美しいチューリップは、ウイルス病にかかった結果だったのです。当時の斑入りのチューリップの作り方は、ウイルスに感染してきれいな斑入りの花を咲かせる球根の一部を切り取って、別の球根に植え込むというものでした。その科学的な仕組みが分からずとも、とにかく値打ちのある品種を作り出す技術が確立していたのです。実はこの技術こそ、現代のウイルスをワクチンとして接種する方法そのものです。結果として、この経験知が新たなサイエンス上の発見につながったわけですが、それには時間が必要でした。ウイルスの実態が明らかになったのは、こうしたバブルからおおよそ300年後のことです。

いつの時代にも、経済社会を動かすような画期的な技術でありながら、当初は摩訶不思議な方法として仕組みが分からないことがあるものです。同様のことは、バイオテクノロジーや超伝導、新薬などでも見られます。社会的なイノベーションにつながる科学技術には、そういうことがつきまとうのです。であるからこそ、皆さんには、学問の世界だけでなく、学問と社会とのかかわりも含めて、「全体像をつかむ」しなやかな知性をもってもらいたいと思うのです。

このような学問と社会との深いかかわりは、「全体像をつかむ」という言葉を贈ることで、私が皆さんに何を期待しているか、ということにつながってきます。それを、最後にお話しておきましょう。

それは、東京大学の豊かな知の財産に育まれた皆さんに、ぜひ「21世紀の社会モデル」を作ってもらいたい、ということ

です。とくに、これからの「活気ある持続可能な高齢化社会」をどのように作っていくか、そのモデルを考えてもらいたいということです。20世紀の100年間だけで、地球が小さくなるくらいに人間社会が膨張し、環境や資源をめぐる深刻な問題が地球規模で発生しています。また、多くの国で高齢化社会への動きが急速にすすみつつあります。これまで人類が経験したことのない、こうした課題への取組みは、ただ一片の政策を作ればすぐ対応できるという性格のものではありません。ここにこそ、大学の知、しかも「構造化された知」の出番があるのです。サステナビリティ学やジェロントロジー（加齢学）などの新しい学問領域は、その象徴的な事例です。

こうした「21世紀の社会モデル」を作っていくにあたって、同時に大切なことは、大学と社会との「連帯」です。私は実は、しばしば用いられる「大学の知の社会的還元」という言葉は、あまり好きではありません。それは、大学はたしかに知の重要な孵化器であり巨大な蓄積場所ではあるのですが、知は本質的に絶えず生成発展していくものであり、そうした生成発展は、大学の知と社会の知との交流によって促進されることが少なくないからです。先ほど触れたサステナビリティ学やジェロントロジーなどの学問も、企業や自治体、市民などとの連携を通じて発展してきていますし、また、いま、東京大学が千葉県柏の地で試みようとしている国際学術都市の構想も、地域社会と大学との連帯による「知の冒険」と呼ぶべきものです。

つまり、大学にしようと社会にしようと、「知の冒険」に参加する機会に変わりはありません。参加する資格として必要なのは、「全体像をつかむ」ことのできる、しなやかな知性だけです。今日学位を授与される皆さんは、引き続き大学で研究を続ける人もいれば、社会の新しい活動の場に出ていく人もいるでしょう。そうした活躍の場こそ違え、皆さんには互いに連帯し合って「知の冒険」を続けていっていただきたいと思います。

皆さんのこれからの人生が希望に満ち、充実したものとなりますことを心より祈念して、告辞を終えることといたします。

<平成二十（2008）年三月二十四日>



## 第一部 答辞

修了生総代  
理学系研究科  
博士課程  
岡村圭祐

本日は、諸先生方、教職員の皆様をはじめ、多数の皆様のご臨席の下、このように盛大な学位記授与式を催していただき、修了生一同、心より厚く御礼申し上げます。また、只今は小宮山総長より、ご懇篤なる告辞と激励のお言葉を賜りましたこと、重ねて御礼申し上げます。

本年度は東京大学が設置されてから130年目の節目にあたります。大学創立時と比べ、科学技術は飛躍的に進歩し、生活空間は高度に情報化され、社会の様相は大きな変貌を遂げてきました。これに伴い、学問を取り巻く環境も一変しました。以前では考えられなかった新たな学問領域が次々と開拓され、さらに分野の細分化も進み、学問の全体像は遙かにつかみづらくなっています。

そのような混沌とした中であって、東京大学は常に時代の先頭に立ち、世界有数の研究・教育機関として、第一線で知の創造と継承を担ってきました。21世紀COEプログラム、及びグローバルCOEプログラムに、多数採択されていることにも顕著に現れている通り、時代を通して国際的に卓越した研究・教育拠点であり続けています。「知の時代」と呼ばれるこの21世紀、今後も世界をリードしていく優れた人材を養成・輩出し続けていく中で、東京大学に寄せられる期待や関心は益々高まっていくことでしょう。

このことは裏を返せば、東京大学に向けられる世間の目が、今後益々厳しさを増していくことでもあります。高度な知識社会にあって社会の構造は複雑化し、学問は、その目的や行き着く先が、非常にわかりづらくなっています。従って我々は、この東京大学で培った学術を次世代へと引き継いでいく使命を果たすと同時に、科学探究の本質に関して、社会の理解と信頼が得られるよう、常に謙虚な態度で自己を見つめ、これまで以上に説明責任を果たしていくことに真摯な努力を傾注していかねばなりません。

近年、日本の教育・研究機関は、若者の学力低下や理科離れをはじめとした教育問題、また博士号取得者の就職に関するポスト問題といった、数々の深刻な問題に直面しています。

このことは何も教育・研究機関に身を置く者に限った問題ではありません。学問の世界で研究の道を邁進する者、産業界で日本の明日を造っていく者、そうした学術や産業の発展、また産学連携を支えるべく、行政に携わる者、その他実社会で様々な活躍する者皆が、共通の問題意識を持って連携し合うと同時に、各人の立場から社会に対し積極的に働きかけることで、これらの問題の解決に、多角的なアプローチで取り組んでいかねばなりません。

加えて、視野を世界全体へと拡げてみれば、我々はこの21世紀、一人一人が無関心では済まされない数多くの重大な困難に直面していることがわかります。我々は東京大学で学んだことに誇りを持ち、ここで蓄えた見識・技術を国際社会へと広く還元していくことで、人類の真の発展のために努力していかねばなりません。その先駆的役割を期待されている今日、この春の日に、このような盛大な式典に送られ、荣誉ある東京大学修了生として、それぞれの活躍の場へと旅立つことは、至上的な喜びであると同時に、各人に与えられた課題と責務、課せられた使命の重大さに奮い立つ思いです。

東京大学創立130周年記念式典における江崎玲於奈氏の講演において、次のような趣旨の御言葉がありました。「将来は、現在の延長線上にあるのではなく、若い世代の新たな発想により、創られていくものである」。本日、理学・工学・農学・医学・薬学・数理学そして情報科学の各分野を修め、東京大学を巣立っていく我々修了生一同は、その分野の垣根を越えて連携し合い、若い発想力をもってイノベーションを創出していくことで、緊迫した国際情勢の中、環境問題、エネルギー資源問題、貧困問題をはじめとした、21世紀の世界的困難に、果敢に立ち向かっていく決意を、今新たにしています。

最後に、これまで御指導下さいました小宮山総長をはじめとする諸先生方、教職員の皆様、そして温かく見守って下さった御父母の皆様に、重ねて心より御礼申し上げます。その御健康と東京大学のより一層の創造的革新・発展を祈念し、答辞と致します。

## 第二部 答辞

修了生総代  
人文社会系研究科  
博士課程  
李 永晶

本日は、小宮山総長をはじめ多くの先生方のご臨席を賜り、このように盛大な修了式を催して戴きましたことを感謝し、修了生を代表して心よりお礼を申し上げます。

新しい春はまた、別れと出会いのときでもあります。私は、数学と物理学を学んで吉林大学を卒業し、日本に行こうと考えたのも10年前の春でした。日本語の専門学校に通った後、東京大学の学士入学試験に合格して、文学部の3年生として社会学を学び始めたのも、人文社会系研究科の大学院生として中国の社会理論の研究に取り組み始めたのも、同じような桜の春でした。理系から文系へと領域を横断して迷いこんできた私を、東京大学という総合大学は暖かく迎え入れ、厳しく指導し、本日の式典へと送り出してくれました。ここに集った修了生がこの大学で過ごした期間は、2年と短かったり10年と長かったり、じつにさまざまだと思います。しかし、錚々たる先生方との出会いや、優れた院生同士が競い合う環境は、まことに得難いものであったと誰もが感じていることでありましょう。

もちろん私たちは、ここで過去の努力への感傷にひたり、無我夢中だった研究生活の思い出を楽しむばかりでは、贅沢すぎると思います。わたしたちが行ってきた研究の先にはなお、沢山の重い課題が課されているからであります。人間

の共生に関わる地球レベルでの環境問題や資源問題、貧富の格差問題など、さまざまな難問が、科学のディシプリンの壁をあざ笑うかのごとく、深刻化しています。今、ここにおいて、現れつつある課題に真剣に対応しない限り、私たちのよりよい明日は保証されないでしょう。

けれども、私は決して未来を悲観していません。私が母国を離れ、この東京大学での研究生活で学んだことは、学位や学歴を得ることを目的だけに勉強することの「空しさ」と「脆（もろ）さ」でした。そして手にしたのは、知の探求そのものが与えてくれる「自由」と「愉しみ」であり、専門職として社会的な責任を果たす知識人の大切さであります。理科系であるか文科系であるかにかかわらず、また日本人であるか外国人であるかにかかわらず、この大学で学んだ、知の探求と応用とに責任をもつ姿勢は、私たちの未来と意味のある人生を切り開いてくれるものだ確信しています。そうした姿勢を貫くことが、私たちを導いてくださった先生方への恩返しにもなると考えています。

最後に、東京大学の更なる発展を願い、ここにお集まりのすべての皆様方に改めて感謝申し上げます、答辞とさせていただきます。ありがとうございます。



(特集写真撮影：尾関裕士)

平成20年度学部入学式及び大学院入学式が4月11日（金）に、日本武道館において举行された。午前の学部入学式には約3,100名の新入生と、その父母など約5,300名、合わせて約8,400名が、午後の大学院入学式には、約2,800名の新入生と、その父母など約3,200名、合わせて約6,000名が出席した。

午前9時50分、運動会応援部による演舞及び東京大学の歌「ただ一つ」のデモンストレーションがあり、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュールンベルグのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、小宮山宏総長はじめ理事・副学長、各学部長、各研究科長、各研究所長並びに来賓の安藤忠雄特別栄誉教授及び経営協議会学外委員の榎田淳二委員がアカデミックガウンを着用のうえ登壇し、10時43分開式となった。

式はまず、音楽部管弦楽団、音楽部コーラルアカデミーにより、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、小島憲道教養学部長が式辞を述べた。式辞の後、安藤忠雄特別栄誉教授から祝辞が述べられた後、入学生総代鈴谷賢史さん（文科Ⅰ類）による宣誓が行われた。最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、11時50分に式を終えた。

大学院入学式においては、学部入学式と同様に、13時25分から運動会応援部による演舞及び東京大学の歌「ただ一つ」のデモンストレーション、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュールンベルグのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、小宮山宏総長はじめ理事・副学長、各研究科長、各研究所長並びに来賓の村山斉数物連携宇宙研究機構長及び経営協議会学外委員の桐野高明委員がアカデミックガウンを着用のうえ登壇し、14時16分開式となった。式は音楽部管弦楽団、音楽部コーラルアカデミーによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、金子元久教育学研究科長が式辞を述べた。式辞の後、本学の数物連携宇宙研究機構長村山斉教授から祝辞が述べられた後、入学生総代北岡雅則さん（工学系研究科）による宣誓が行われた。最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、15時18分に式を終えた。

なお、本年の入学式では、壇上において手話通訳を行い、壇上のメインスクリーンには、手話通訳の映像と筆記のテロップ表示が行われた。

## 平成20年度東京大学入学式 総長 式辞



東京大学総長  
小宮山 宏

東京大学に入学された皆さんに、東京大学の教職員を代表して、心からお祝いを申し上げます。皆さんが、今日から東京大学で、実り豊かな学生生活を送られることを心より願っております。

本日、皆さんに、東京大学憲章と東京大学アクションプランをお渡ししています。東京大学憲章は、長期的視野に立って、大学の在り方と学術経営の根本を定めたもので、いわば大学の憲法に当たる文書です。その前文を見ていただくと、東京大学にとって、「構成員の多様性」が本質的に重要な意味をもつことに触れられています。

本日この入学式に集う新入生は、合計3,163名ですが、このうち女性の比率は18.8%、外国人は99名で比率は3.1%となっています。まだまだ少ないとはいえ、女性や外国人の割合の面でも、東京大学の学生はますます多様性を増してきています。のみならず、東京大学には、その思考や知識においても、また行動においても、多彩な才能をもった多くの皆さんが入学してきています。こうした多様性のなかからこそ、豊かな教養と新しい知が生み出されるものと信じています。

東京大学の多様な成員が一堂に会する機会は、そう多くはありません。卒業式は、文系と理系を分けて行っていますので、同一年度の入学者が一つの場所に集まるのは、この入学式が最初にして最後です。この唯一の特別の機会に、私は、この大学で皆さんが過ごすにあたって、もっていただきたい心構え、また、そのために東京大学という場がもつ意味について、お話ししておきたいと思います。

皆さんに憲章とともにお渡しした東京大学アクションプランは、私の総長任期中、つまり、2005年度から2008年度の間に

ぜひ実現したいと考えている計画をまとめたものです。

アクションプランの副題には、「時代の先頭に立つ大学 世界の知の頂点を目指して」と記されています。アクションプランで述べていることは、私がどんなに大きな掛け声をかけても、また、私一人だけで走っても、実現できるものではありません。東京大学に所属する教職員と、そして学生とが手を携えて、この大学をよりよい教育と研究の場にしようと決意し、行動してはじめて実現できるものです。私は今日、皆さんを、アクションプランをともに実現していく「仲間」として、東京大学に迎え入れたいと思います。

そのような「仲間」である皆さんへの最初のメッセージとして、これからの学生生活を通してぜひ心に留めておいていただきたいことを、お話しておきます。

現代は不確実な時代であり、過去の成功例や常識が必ずしも通用しない時代です。社会的には、情報環境の変化などとともに急速に進んでいるグローバル化の波の中で、これまでの制度が大きく変わりつつあります。また、今私たちが置かれている変化の先に、どのような社会がありうるのかを構想するために、過去の状況を単純に参考にし、そこから学ぶだけではますます不十分になっています。自然環境も大きく変化する可能性があり、それは社会的な側面にも影響を与えています。

この21世紀を、私たちは、過去の権威に頼ったり、明治時代のように欧米諸国に頼ったりするのではなく、自ら先導していく必要があります。日本には、時代の先頭に立ち、21世紀をリードしていくに適した条件が存在します。それは、日本が多くの問題を抱えてきた国、いわば「課題先進国」だからこそ、このように言えるのです。すなわち、日本の社会で山積みになった問題を解決しようとして、社会的な仕組みが整備され、技術が発達し、人々の意識が変わり、地球環境問題などへの取り組みがすすんでいるということです。言い換えれば、過去の成功例や常識からではなく、過去の問題と失敗から学ぶということです。

時代の先頭に立つにあたっては、いくつもの行き方があるでしょう。私はここで、地球環境問題をテーマに、二つの事例を取りあげたいと思います。第一は、巨視的な行き方、大きな物語の構想、鳥の目で俯瞰的にものをみること、です。第二は、微視的な行き方、小さな物語、草木の声に耳を澄ませること、です。

皆さんもご存知のように、今日、地球環境問題は世界的に大きな話題となっています。人類が化石燃料を使って工業文明を急速に発達させはじめたのは19世紀後半からのことです。これ

までも石炭を燃やすことで生じる大気汚染や、石油資源の枯渇についてはたびたび論じられてきましたが、豊かな文明が排出する二酸化炭素が地球温暖化を招くことがはっきりした今日、地球環境問題は、国際政治・企業活動から私たちの日常生活に至るまで、幅広い領域で現実の課題として重大性を増してきました。

こうした背景もあり、私自身、ハイブリッドカーを使っているのですが、この領域で日本の自動車メーカーは世界の先端を走っています。今や、ハイブリッドカー、ディーゼルの改善、プラグイン・ハイブリッドカー、電気自動車など、世界的にエコ・カーの開発が進んでおり、こうした中で、これまでのところ、日本は一步先を進んできたのです。もちろん、車の排気ガスを削減するだけで地球温暖化が収まるわけではありません。世界に先駆け優れた技術群を生み出している象徴的な事例であるということができるでしょう。

私の専門は、もともと化学システム工学で、半導体の薄膜をつくる化学プロセスの研究をしていました。その後、研究を通じた様々な出会いのおかげもあり、地球環境問題に対して、おもにエネルギーに焦点を当てて取り組み、今では地球環境工学が専門となっています。そうした私からみても、環境にやさしい技術の領域で、日本が進めてきた技術開発には目を見張らせるものがあります。

なぜ、これが可能になったのでしょうか。もちろん、狭い国土、狭い道に合った小さな車を生産する必要があったこと、人口密度の高い土地で公害対策などの必要があったこと、国際的な自動車販売競争の中で独自のカラーを出す必要があったこと、などの要因もあります。しかしそれ以上に、化石資源をほとんどもたない国土で、今後も自動車産業の豊かな発展と環境の調和を考えなければ、日本の経済社会に未来はないという危機感、それを鳥瞰するマクロな視点があったからこそ、そうした技術開発が可能であったのだと言えます。

巨大な産業から、目を身近な生活に移してみましょう。生物多様性を守り、豊かな生態系づくりを目指した里山保全運動、学校ビオトープ運動など、身近な自然環境を守ろうとして、市民参加型、草の根的な活動が、日本をはじめ世界各地に普及定着しつつあります。

とくに国土が狭い日本では、列島に稲作を中心とした農耕文明がゆっくりと浸透してきて以来、人が適度に管理をしながら多様な生態系を生み出してきた歴史があります。その象徴が里山と呼ばれる自然です。里山のような身近で、規模の小さい自然環境を保全したり復興したりする動きがあちこちで立ち上がり、ネットワーク化されてきていることは、日本の環境保護運動の一つの特色だといえます。

東京大学でもこうした草の根の環境改善はあちこちで進められています。例えば、この一年の間、創立130周年記念事業の一つとしてすすめられてきた「知のプロムナード」プロジェクトでは、東京大学にある本郷、駒場、柏などのキャンパスの豊かな自然環境を活かしつつ、学生や教職員がくつろげる、比較的小さなパブリック空間を130カ所整備しようとしています。また、皆さんの先輩である学生たちが主体となって、本郷キャンパスにある三四郎池のランドスケープをデザインするなど、大学の環境改善運動に取組む自発的な動きが高まっているのも最近の特徴です。

近年、サステナブルという言葉が人口に膾炙してきています。これは、日本語で「持続可能性」と訳され、私たちの文明社会が地球環境と調和しつつ、長期的に発展していくためのスタイルを指しています。サステナブルという言葉は、たいていの場合、国家とか地球といったマクロなレベルで論じられることが多いのですが、しかし、同時に、地に足のついた、目で見て、手で触れられるようなミクロなレベルでの実践も重要であると考えています。

私自身はエネルギー工学の専門家として、マクロな視点から地球環境問題を研究してきましたが、現在は東京大学の総長として、どちらかというとミクロな視点からも、大学を拠点にしたサステナブルな地域社会の実現を目指しています。一つは、柏キャンパスで、住みやすい未来都市「柏の葉国際キャンパスタウン」を作り出すための実験を進めています。それは、大学と市民、自治体、企業がともに手を携えた、大きな社会実験です。もう一つ、実は東京大学は、東京都の中で一事業体としては最大のCO<sub>2</sub>の排出源です。そこで、先鞭をつけるべく、大学の主なキャンパス全体で、2012年までにCO<sub>2</sub>排出量を15%減らし、その間に2030年までには50%減らすためのアジェンダを作ることを、この機会に約束しておきたいと思います。

これまでお話したことから、私たちにとって重要な、三つのことを学ぶことができるはずです。一言で言えば、「草木の声を聞き、鳥の眼で見て、未来人の志を持って！」ということです。

第一の、「草木の声を聞き」というのは、他者を感じる力 (sympathy) です。

過去に公害で苦しんだ人や地域を振り返って、その苦しみを理解しようとし、課題が何かを明らかにすること。今を生きる人々にも、これから生まれ来る人々に対しても望ましい社会のあり方を構想していくこと。身近な自然のあり方に目を向け、日常生活をよくしていこうという感受性。こうしたことは、詰め込まれた知識で、頭だけで考えるのではなく、身体を動かし、

経験のなかで深く学ぶことから培われます。実践を通すことで、他者や世界を感じる力が、身につくのです。

第二の、「鳥の眼で見て」は、本質を捉える知 (insight) に通ずるものです。

マクロに、かつ深くものを見て、地球環境の行方を見通した場合に何が重要か。そのために何をすべきか。これから私たちは、一国の論理に閉じこもったり、限られた時代の生活スタイルを前提にした、近視眼的で独りよがりな立場を取るのではなく、鳥瞰的に、広く世界を見渡し、何が大切で本質かを見きわめる鑑識眼を培わなければなりません。

第三の、「未来人の志を持って」は、先頭に立つ勇氣 (ambition) を意味します。

草木の声に耳を澄まし、広くものを見る目を養ったうえで、先頭に立って意思決定をおこなう、いざとなれば責任を取る、という勇氣を持つことです。国や地域を越え、来るべき時代に向けた「未来人」として、人類的、地球的なビジョンを掲げ、グローバルに発信していくことが求められます。これまでの常識や過去の成功例にとらわれすぎないで下さい。フランスの詩人ポール・ヴァレリーは、「青春とは、約束事がよくわからぬ時期、よくわかつてはならぬ時期である」と、高らかに宣言していますが、青春のその属性を、大いに活用して下さい。

ここで述べてきた、他者を感じる力、本質を捉える知、先頭に立つ勇氣を涵養するために、東京大学が皆さんに提供するものは何でしょうか。それは何よりも、総合大学、すなわちユニバーシティとしての多様性と総合性です。ユニバーシティという言葉は、全人類、世界、宇宙を表す、ユニバースという言葉に通じています。多様な部分が有機的に統合した全体としてのユニバーシティ。東京大学は、世界に誇りうるユニバーシティとして、すぐれた環境を皆さんに提供します。世界的に有名な大学の中にも、あるいは自然科学系の学問編成に偏ったり、あるいは工学系の学部がなかったり、というものもあります。これらと比べて、東京大学は、自然科学から人文科学、社会科学に至るまで、幅広い学問分野に対応した学部組織を、ユニバースのように持っています。

そこでは、本郷、駒場、柏という三つの主要キャンパスが、最先端の研究、先端の研究と有機的に結びついた教養教育、未踏の領域に対する実験的研究、を進めています。総合大学としての強みを全面的に発揮するために、新しい教養教育の展開をしており、その一環として、学術俯瞰講義という分野横断的な講義も行っています。

また、全国に研究施設を持ち、世界に130を越える研究拠点を有しています。さらに本格的な総合研究博物館があり、大規模な図書館や演習林も大学の施設です。



東京大学は、このような組織の厚みと広がり、教職員の活動、さらに大学が社会と連携してすすめる諸活動を通して、皆さんに世界トップレベルの、本当の意味での知のサロンと知の実験室を提供することを約束します。東京大学が皆さんに提供するものは、答えのある問題を他人より早く小奇麗に解く力ではありません。他の誰かに評価してもらえるような、確立し、答えのわかった知識でもありません。不確定な時代の先頭を進む勇氣と、その勇氣がひとりよがりにならないために必要な、本当の意味で滋養になる知、そしてそれに伴う倫理です。皆さんには、こうした恵まれた環境を最大限に活かし、自立した個人として、豊かに学び、愉快地に友だちと交流し、新しい21世紀の地球規模の視野を持った未来人として育てていってほしいと願っています。

最後に、本日おいでいただいているご家族の皆様にも、一言ご挨拶を申し上げます。

皆様のお子さんは、本日東京大学に入学いたしました。幼い頃からの思い出やつらい受験の日々を思い返して、感慨もひとしおではないかと思えます。心からお祝いを申し上げます。入学式は皆様のお子さんにとって、親離れをして独立し、自らの道を切り開いていく新たな旅立ちの日です。それは、高校生までとは大きくちがひ、厳しくも楽しい仲間や教職員に支えられ、多様で豊かな知の森や海原を越えていく旅となるはずですが、どうかこれからは、お子さんをそうした自立した個人として、暖かく見守り、励ましてくださるようお願いいたします。式辞の結びとさせていただきます。

<平成二十年（2008年）四月十一日>



## 教養学部長 式辞



東京大学教養学部長  
小島 憲道

新入生の皆様、東京大学へのご入学おめでとうございます。また、新入生の皆様を支えてこられた方々にも心からお慶びを申し上げます。

私は、新入生の皆様が東京大学で最初の2年間を過ごされる教養学部を代表して、歓迎の意を表したいと思っております。

東京大学のキャンパスには本郷キャンパス、駒場キャンパス、そして柏キャンパスがあります。この三つのキャンパスの一つである駒場キャンパスで皆様はこれから少なくとも2年間学ばれるわけです。私は、ここでまず駒場キャンパスの教養学部について紹介し、それから皆様の大学生活の始まりに際してお願いしておきたいことを述べたいと思っております。

今、少なくとも2年間といいましたが、それは皆さんの中には駒場キャンパスで3・4年生の課程に進学し、さらに大学院に進まれる方もおられるからです。皆さんがこれから所属することになる1・2年生の課程は教養学部前期課程と申します。教養学部は、約7,000人の1・2年生が学ぶ前期課程と約400人の3・4年生が学ぶ後期課程とから成っています。また、駒場キャンパスには、約1,400人の文系および理系の大学院生が研究する総合文化研究科があります。従いまして、約9,000人の学生が学ぶ駒場キャンパスで、これから皆様は大学生活を送られるわけです。

皆様もよく承知されていることと思いますが、日本の多くの大学では、大学入学時に学部・学科が決まっているのに対して、東京大学では、前期課程教育を終了した後、学部・学科を選ぶシステムをとっています。これは、高校までに獲得した知識と興味で将来の進路を決定するのではなく、大学に入学してから様々な分野の最前線の情報に出会い、また幅広い教養を身につける中で、自己の適性を知り、進路を選ぶことが重要であるという理念に基づくものであります。教養学部前期課程の重要な目的の一つは、広い観点から学問の多様性と奥深さを理解し、特定の専門分野に偏らない総合的な視点や柔軟な理解力を獲得することです。教養学部のこの精神は「リベラルアーツ」という言葉で表現されてきました。「リベラルアーツ」の起源は、古代ギリシャ・ローマまでさかのぼれる概念で、「人を自由にする学問」という意味を持っており、教育の対象として文法、

修辞学、弁証法、算術、幾何、天文、音楽という自由七学科を意味しておりました。ここで重要なのは、自由七学科を繋ぐ中心に哲学があったことです。近代ヨーロッパにおいては、実利性、職業性といったものから開放された自由な学問という意味で、教養のあり方を表す概念として使われて来ました。様々な知識を統合し、新しい価値観を生み出していく能力を涵養するための教育がリベラルアーツ教育であります。ギリシャの哲学者エピクロスが弟子に宛てた手紙の中に「未来を恐れないために若き日に哲学を覚えよ」と書いていますが、将来を予測することが困難な現代社会にあつて、哲学を中心に据えたリベラルアーツ教育が若い世代に必要なのはここにあります。

教養学部では、リベラルアーツ教育を実践するため、基礎学力を身につけるための基礎講義の他に、文系から理系にわたる様々な総合科目を選択必修科目として開講しています。また、主題科目として全学部の数多くの教員が少人数クラスで多彩な授業を開講しています。また、教養学部の特色として充実した外国語の教育があげられます。教養学部では、国際的に通用する人材育成のために、文系の学生に対しては、総合科目「国際コミュニケーション」による様々な外国語の授業があり、理系の全ての学生に対しては、科学英語のライティング能力を養うため、外国人教員による高度英語習得プログラムを用意しています。グローバル化が進む今日、世界で真の知的なリーダーとして活躍する人材を育てるためには、総合的判断力、社会的責任感、地球的な視野という三つの資質が不可欠であると同時に、世界の共通言語である英語による表現能力を身につけることが重要です。

私は、ここで東京大学教養学部の前身である旧制第一高等学校の教師であった内村鑑三と新渡戸稲造について紹介したいと思います。内村鑑三と新渡戸稲造は明治の初めに札幌農学校の2期生としてクラーク博士の精神的な薫陶を受けて育った方ですが、日本の精神を欧米諸国に伝えるため、それぞれ「代表的日本人」、「武士道」を英文で執筆し、欧米諸国の多くの知識人に読まれました。アメリカが最も栄えた1960年代の大統領であるジョン・ケネディーが大統領に就任したとき、日本人記者団から「尊敬する日本人がいたら教えて下さい」という質問に対して「最も尊敬する日本人は上杉鷹山です」と答えましたが、その時上杉鷹山を知っている記者は殆どいませんでした。上杉鷹山は九州日向の高鍋藩の秋月という小大名の息子でしたが、17歳の時、多重債務を抱えて瀕死の状態にあつた東北米沢藩の藩主として迎えられ、米沢藩を有数の豊かな藩に蘇らせたことで知られていますが、内村鑑三は「代表的日本人」の中で上杉鷹山を紹介しています。ジョン・ケネディーは若い頃から大変な読書家として知られていましたが、若き日に、内村鑑三が英文で書いた「代表的日本人」に出会ったものと思われま

このように、世界の共通言語である英語で発信することが如何に重要であるかお分かり頂けたかと思います。

皆様は、文科一類から理科三類まで六つある科類のいずれかに所属されています。それぞれの科類は将来皆様が進学する学部と凡その対応関係は持っていますが、各科類に最も密接に対応する専門課程以外のところにも進学することができるよう、進学振り分け制度の中に、全科類枠を設けています。所属する科類の所定単位を取得し、進学する学部が要望する授業科目を習得すれば、文系の科類に所属する学生が理系の学部に、また理系の科類に所属する学生が文系の学部に進学することも可能です。

このような教養学部で学ばれる皆様に、入学式にあたり、お願いしたいことを述べたいと思います。それは、知的好奇心と能動的な学びの姿勢を持って欲しいことです。皆様が高等学校までに学んでこられた内容は、既に確立し定説となった事柄を覚え理解するという受動的な学びでありました。しかし、大学では各自が学習して得た知識を基礎として、その上に一人一人の独創性を獲得していくことが要求されます。知らないこと、まだ学んでいないことについて、知的好奇心をもって自ら探求することが必要なのです。これは、大学を卒業して社会で活躍するとき、もっとも重要で必要不可欠な資質となります。

皆さんがこれから学生生活をおくる駒場キャンパスには、緑豊かな自然、パイプオルガンや駒場博物館など教養と文化の香りのする施設が沢山あります。また、駒場コミュニケーション・プラザは、創造的な教育研究を生活基盤の側面から支える場として外国人留学生を含めた学生および教職員の交流が行なえる場として活用されています。

駒場キャンパスのこのような豊かな環境が新入生の皆さんに最大限活用され、専門性と豊かな教養を身につけて行かれることを願い、教養学部長の式辞とさせていただきます。

<平成二十（2008）年四月十一日>



## 安藤忠雄特別榮譽教授 祝辞



建築家・東京大学特別榮譽教授 安藤 忠雄

入学おめでとうございます。会場で先ほど、「ほっとした」「これからゆっくりできるね」と、新入生と親御さんが話されているのを耳にしました。「ほっとした」というのは率直な気持ちとしていいけれども、「ゆっくりできる」という考えは困る。これからは死にものぐるいで、病気になってもいいぐらい勉強してもらわなければいけないと私は思います。というのも、皆さんに掛かっている期待の大きさを考えるとそういわざるをえないからです。日本の国は、ご存じのように迷走状態です。これは各分野にリーダーがいないからだとは思っていますが、そのためにも猛烈に勉強していただきたい。猛烈に勉強し走っていると、必ずその前にいい先生が現れるものです。また、長い人生において一番重要なのは友人だと思いますが、この友人も徹底的に対話のできる、そして本当に心おきなく未来を語り合える人をこれからの学生生活で見つけてほしいです。メール上の対話ではなくて、身をもった友人関係をつくらねばならない。私は、メールは肝心なときに何の役にも立たないと思いません。

みなさんには、ここはゴールではなく、スタートラインであるということをしっかり認識してほしい。人生90年という時代です。先は長い。そして、社会に出れば、多くの困難な現実が待ち構えています。それに立ち向かっていけるだけの基盤を、この大学時代に、あなたたちは築かねばなりません。

日本社会は迷走状態、本当にどこへ行くのか目標が定かではありません。同時に地球環境も大変な状態です。先日も、南極のペンギンが白い雪と氷の上ではなく、土の上を歩いているのを見て、私はビックリしました。また、人口も増加し、67億人いますが、2050年には90億になるそうです。21世紀に入り、地球温暖化、人口増加、食糧、資源エネルギー問題など、人間の存在そして多くの地球に生きる仲間たちの存亡にかかわる問題に人類は直面しています。世界中の人々が、それぞれの専門領域を超えて、知恵を出しあって解決の道を探らねばなりません。未知の可能性をもつ若いあなたたちは未来の担い手としておおいに期待されています。

昨年、小宮山先生は入学式で、“常識を疑う確かな力をもて”ということをお話されました。国際化が進み、情報が錯綜する現代社会を生き抜いていくには、常識にとらわれない、根源的かつ自由な思考が必要です。ものすごいスピードで変わる国際社会の中で、今までの常識はどうて役に立たないという時に、「常識を疑い、本物を見抜く力をつけなくてはならない」と思いますが、それには自由な心を持たねばならない。その自由な心から生まれるものが《独創力》です。これからの時代を生きるあなたたちには、進む分野を問わず《独創力》が求められているのです。

あなたたちの大先輩であるノーベル賞受賞者江崎玲於奈さんは《独創力》について次のように語られました。《独創力》を高めるには、知識の総量を増やすというよりも、まず、審美眼・鑑識眼をもつことが必要である。本物を見抜く力、これは理性というよりも感性に根ざしている、と。東大に入学するためには理性を駆使するだけでもよかったかもしれませんが、これからは感性を磨くことも大切だということです。

それでは、常識にとらわれない思考を心がけ、感性を磨けば、それだけで《独創力》をもつことができるのでしょうか？ いや、それだけでは十分ではありません。《独創力》とは、孤立することを恐れない個人に根ざすものだからです。あなたたちは、なによりまず個人を確立しなければなりません。私は、自己主張だけが強い独りよがり人間になれといっているのではありません。まず、社会を構成するひとつの基点となりうる、他に依存しない自我を築いてほしいのです。

個人を確立するときによりどころになるのが、将来の夢であり、具体的にいえばこんな仕事を通して社会に関わりたいという意志です。もし、あなたたちの中で夢をまだ見つけていない人がいれば一日も早く見つけてほしいと思います。

私は皆さん方のように幸福にすばらしい学校に入れたわけではありません。私は大阪の下町で生まれ育ちました。祖母と2人で暮らしていて、経済的には厳しい状態でした。「何とかして生きていかななくてはならない」と思っている時、建築に出会いました。ちょうど、私の家が長屋の平屋だったものを、2階だてにする工事を隣の大工さんがやっていて、それを手伝ったということなのですが、屋根を取ると大きな空が見え、増築すると部屋が広がっていくのを見て単純に感動しました。この感動が私を建築に目覚めさせたと思います。中学卒業時に、大工の棟梁はいいなと思いました。しかし、周囲の人たちがせめて高等学校だけは行ったほうがいいという。経済状態から言うと難しいと思いましたが、職人になることなどを考えて工業高校の機械科に入学しました。そして、自分の生活をしっかり立て、祖母を養うにはどうすればいいかを毎日のように考えていました。そんな日々を送っていたところ、近所のボクシングジムを

覗く機会がありました。4回戦ボーイが練習しているのを見て「たいしたことない」と思いました。これなら俺でもいけるかも、と。1回試合をすると4千円くれるという。当時の4千円は大きく、今でいうと10万円ぐらいの大金です。これはいいと思って入門して、1か月でプロのライセンスを取り、その後、7回ほど試合をしました。4回戦は思いと勢いとエネルギーさえあれば戦えます、けんかみたいなもんです。しかし、後に世界チャンピオンになるファイティング原田さんが大阪に来たとき、その練習風景を見て、まったく自分とは才能が違うことがわかり、これで生計は立てられないと思い、すぐに引退しました。自分が真剣に闘うと少しは見えてくるんですね、その違いが。そこで引退したわけです。

その後、私の住んでいた大阪からは気軽に足を運べる京都や奈良の古建築を見に行くようになりました。やがて古本屋で近代建築の巨匠といわれるル・コルビュジエの作品集を偶然見つけ、建築家という職業があることを知ったのです。建築家になるためには、普通、大学の建築学科に行くものですが、私は行けなかった。だから独りで建築を学びました。

次はやはり大学に行きたいと思いましたが、まず経済的に無理だということと、建築学科というと関西では京都大学や大阪大学があるのですが、自分の学力では歯が立たないと思い、進学を断念しました。それでもあきらめきれずに、建築をやりたいと思いました。そこで私は自分の方法を見いだすために、高等学校を卒業してから1年間、自分ひとりで勉強しようと思いました。そこで大学から建築の教科書を買ってきて、朝の9時から次の日の3時までひたすら本を読みました。1年をかけて。周囲は、「安藤さんのとこの子は、かわいそうなことに頭がおかしくなった」と言ったそうです。その勉強法は1年で卒業しましたが、もちろんその間、誰も相手をしてくれません。

そのような道を選ばざるをえなかった私は、自らの師と呼べる人を持つことができませんでした。設計事務所でもアルバイトはしましたが、ひとつの事務所で長期間働くことはなかったので、いまでも師と呼べる人はいないのです。しかし、手探りで建築を学びながら出会った人々から学び取ったことは今も私の力となっています。

もうひとつ、私を自立した個人として成長させてくれた大切なものがあります。それは旅です。

私は、大学にいったら卒業するくらいの年に、一人だけの卒業旅行のつもりで日本一周の旅をしました。関西から四国、中部、東北、北海道までを旅したのです。美しい野山、棚田、民家を見て、日本に生まれたことに心から感謝しました。それが私の心の原風景です。旅を通して私は、書物の世界とは違い、目の前に圧倒的に迫ってくる現実の世界を知りました。旅は、私にとって、常識を疑いながらものごとを自分の力で考える

態度を身につける基礎となりました。

それから数年後の1965年に、日本が外国旅行を解禁します。それまでは外交官や商社の人しか行けませんでした。学生でも簡単に海外に行ける今は大違いで、東西冷戦のさなか、英語の能力も乏しい私が一人で世界旅行に出るというのは命がけで、二度と日本の地は踏めないのではないかとというくらいの気持ちでした。それでも世界のありのままの姿を自分の目で見たかった。近所の人たちとは水杯を交わし《勇氣》を奮い立たせて出発しました。

横浜からナホトカ、ハバロフスクからシベリア鉄道で1週間をかけフィンランドに到着し、4か月ほどヨーロッパを周り、マルセイユで、「ここまで来たんだからアフリカを1周しよう」と思い、1人ですから危険でしたが、どっちのころんでも自分の命だから良いだろうと思い、モロッコからケープタウンに行き、マダガスカル島からインド洋を渡りました。その船から空を見て、星空に本当に感動しました。

幼い頃から慣れ親しんだ環境から切り離されて、旅をしたことは、私を人間的に大きく成長させました。言葉や顔の色が違って、世界中のどこでも、人々は、こちらが心を開けば、なんでも教えてくれるのだということを知りました。《勇氣》をもって前に進むことで人は成長するのです。旅は私の建築家になりたいという夢をより一層強くしてくれました。

その後、大阪に設計事務所を開きましたが、最初は仕事がまったくなく、厳しい現実を噛みしめながら、毎日、本を読みながら天井ばかり眺めて不安な日々を過ごしていました。頼まれてもいないのに、勝手に空き地を見つけて設計して、土地の持ち主に「こんな建物を建てませんか？」と、説得に行ったりもしました。そうしているうちに小さな住宅の仕事の依頼が少しずつ来るようになりましたが、常に仕事がなくなるのではないかと不安と戦いながらここまでやってきました。

私はあなたたちとは違い、常に不安と隣り合わせの人生を歩んできました。その不安が、逆にものごとに真剣に打ち込む姿勢と、失敗を恐れずに挑戦する《勇氣》を与えてくれたと思います。あなたたちがこれから、私と同じような状況を選ぶことはできないにしても、安易な道を選ばずに、より難しい道を選んで選ぶことはできるのではないのでしょうか。

まずは、自立した一個の個人となるためには、一日も早く独り立ちしてほしいと思います。ここにいる3千人強の学生たちは、今日、幸福な形で入学したのですが、この式に立ち会われている6千人を超える家族の方々、この日は巣立ちの日だと思って、親子関係をしっかり考えてもらうほうがいいと思います。“親は子を切り離し、子は親を切り離せ。” 極端なようですが、子供が大学生にもなったら、子は親を離れ、親は子離れすることが必要です。自立した個人を作るためには親は

子を切っしてほしい、本当の親子関係をつくるなかで、個人の自立があると考えます。個人の自立なくして、「独創力」や常識を疑う力はなかなか生まれないのではないのでしょうか。

東京大学が設立されて以来130年。東大は、近代国家日本をつくり、支える人材を養成する場として期待されてきました。当初は西洋の模倣から始まり、驚くべきスピードで西洋の水準に追いつき、やがて世界でもっとも高度な近代国家をつくることに日本は成功しました。しかしこれからの時代、近代主義、経済合理主義一辺倒では立ち行かないことが、近年、地球環境の変化という目に見える形で現れてきました。それにもかかわらず、日本の大学はいまだに欧米の模倣と追従に終始しているように思われます。未来を担うあなたたちにはこの壁を打ち破ってもらいたいと私は思います。そのときに必要なのが《独創力》です。

小宮山先生は、東大を日本の知の頂点だけではなく、世界の知の頂点にといわれましたが、世界の知の頂点に立つためにも、《独創力》は不可欠です。しかし、《独創力》という前に忘れてはならないものがあります。それは人間力です。人間力は《独創力》を生む母体です。人間力とは、生命あるものへの慈愛や分け隔てなくものごとを扱う平等の精神、他者の気持ちを汲み取る思いやりの心、時には自分を投げ打ってでも公のために立ち向かおうとする自己犠牲の精神など、人間としての基礎があってはじめて発揮される総合力のことです。これは机に向かっていただけでは身につかないものです。大学に入ったからには学問に打ち込むことも必要ですが、人間として成長するためには、学問だけでは十分ではありません。人々と交流し、社会や自然、地球のことを肌で感じる機会を持ってください。

私が東京大学から教授として招聘されたとき、私自身がまず誰よりびっくりしましたし、家族を含め周囲の人は反対でした。しかし私は、どうしても優秀な人と一度一緒に勉強したいと思いました。共に東京大学で学びたかった。その中で、高卒の人間を教授に招く、東京大学の《勇氣》ってすごいな、さすがだと思いました。私は東京大学の《勇氣》に感謝します。私にできることがあるとすれば、東大が私に託した、その《勇氣》というものの大切さを、私なりの形で、あなたたち学生に伝えることだと思って今こうして話をさせていただいています。

私は自身の講義録として『連戦連敗』という本を書きました。世界中の建築コンペで闘ってきて、私はいつも勝っているように思っている人もいますが、実は1勝9敗くらいの戦績なのです。私の人生は本当に、負けても負けても戦い続けてきたといってもいいくらい、失敗の連続なのです。

私が10年ほど前から東大生に接して感じてきたのは、みな知識も豊富で優秀だが、周囲を気にしすぎ、失敗することを恥ずかしがって前に踏み出さないということです。新しいことに

挑戦するためには失敗はつきものなのです。失敗を恐れない気持ち、失敗を許す寛容さのない環境からは、未来を開く新しい発想は生まれません。

前進したら問題が起きますが、問題を回避しては人間は成長しません。そのために皆さん方、夢という大きな野心をもって、これから日本の国というだけではなく、世界中をひっぱるんだという大きな野心をもってがんばっていただきたい。そのためには死にもものぐるいで勉強してください。それだけの期待を皆さんは担っているのです。そのことを忘れないでください。ありがとうございました。

<平成二十(2008)年四月十一日>



## 平成20年度大学院入学式 総長式辞



東京大学総長  
小宮山 宏

東京大学大学院に入学された皆さん、並びにご家族の方々に、東京大学の教職員を代表して、心からお祝いを申し上げます。

今日ここにおいでの方は、何かそれぞれの胸に期するところがおありのことと思います。大学院に進学するということは、大学に進学するのとは、また違った格別の重みがあります。皆さんは、学部時代に学んだ学問を基礎として、これから自分の研究をさらに掘り下げたり、新たに突破口を開くなりしたいと、意気込んでいらっしゃることでしょう。

私たちの大学院は、世界最高水準の教育研究活動を行っている「知の創造拠点」であり、これから皆さんが大学院で過ごすことになる数年間、知的活動を希求する者にとっては、大いなる苦しみと同時に、大いなる幸せを感じる時期になるはず、と私は確信しています。

これから大学院で研究を始めるにあたって、皆さんに私がお願いしたいこと、それは、「追いつき型の思考」中心の研究スタイルから、「先導型（クリエイト型）の思考」への転換を、ぜひ試みてもらいたいということです。

ここで言う「追いつき型の思考」とは、過去の例や、誰か先人の知恵を学んでそれを活用していくというものです。これに対して、「先導型の思考」とは、人類が未だ経験したことのないような問題に対して既存の方法では対処しきれないということを見極め、自ら新しいモデルをつくるというものです。

皆さんは、今年7月に北海道で主要国首脳会議、いわゆる「洞爺湖サミット」が開催されることはご存知だろうと思います。そこでは、地球環境問題が中心議題となる予定です。

私たちは過去において、公害によって、人の面でも環境の面でも手痛いダメージを負いました。また、今日、かつての日本と同じように急速な経済発展を目指している発展途上の国々では、大気汚染、水質や土壌の汚染などが深刻となっているケースが少なくありません。公害という課題に対して、私たちは、公害防止のための技術開発や法制度など社会的な仕組みの考案

に全力で取り組むことによって、それらをかなりの程度まで克服してきた貴重な経験をもっています。また、1997年に温室効果ガス削減のために採択された、「京都議定書」のとりまとめにあたって、大きな役割を果たしました。そして、それ以降ずっと、環境問題において「課題先進国」であり、だからこそ「課題解決先進国」たるべきであるという使命を自覚して、技術にせよ社会的な仕組みにせよ、先導的な試みに取り組んできたのです。

「課題先進国」であるがゆえに「課題解決先進国」となることができるという構図は、公害問題だけに限りません。日本は、まだどの国も解決したことのない課題を山ほど抱えています。エネルギーや資源の欠乏、ヒートアイランド現象、廃棄物処理、高齢化と少子化、都市の過密と地方の過疎、教育、公財政、農業の将来など、枚挙に暇がありません。そして、これらが日本だけの課題であると考えるのは間違いであって、遅かれ早かれ世界の多くが、このような問題を抱えることになるだろうと予測されることです。その意味では、「課題先進国」であることによって「課題解決先進国」となりうる可能性は、どの国も持っているのです。

これまで、社会的な課題を抱え、それをいち早く察知した国が、その課題を解決する答えを出してその後の世界のモデルとなってきた歴史の流れを、皆さんはよくご存知でしょう。皆さんは、本郷キャンパスのあちこちに点在している、本学ゆかりの碩学たちの銅像に目を留めることがあると思います。いずれも明治から大正時代にかけて活躍した教授の人たちですが、多くは欧米人です。その当時から比較的最近にいたるまで、日本の学問の少なからざる部分が、他の課題先進国で蓄積された知識や技術に期待し、なんとかそれを吸収し、それに追いつくことに力を割いてきました。そこでは、「追いつき型の思考」が大切であったのです。

しかし、翻って考えると、今日の日本が置かれている立場は、これから人類の地平を多くの場面で切り開くところにきています。つまり、先ほど触れた「先導型の思考」が生きてくるのです。新しい課題に対してゼロから自分でモデルをつくり、答えを出していくべく、皆さんにフロントランナーの気概を持っていただきたいと、私は願っています。

このような「先導型の思考」に依って研究をすすめていこうとする時に、皆さんにぜひ意識しておいてもらいたいのが、「知識の構造化」という視点です。この言葉を私は繰り返しているいろいろな場で語っていますが、そこで言わんとしていることは、とりわけ20世紀において爆発的に増え、また無数の専門分野に細分化された知識を、相互参照的に整理して使いやすい

形にすること、知識を互いに関連づけて学問の全体像を浮き彫りにすること、さらに、最先端の学問と社会における価値とを結びつけること、です。

さまざまに溢れかえる膨大な知識を「構造化」することの大切さについては、自分の研究者としてのキャリアの中で、何度も感じる機会がありました。その一つとして、私の研究分野の先人である人物の話をしておきましょう。

私の専門分野は化学システム工学です。化学物質の作り方は昔から、苛性ソーダ、せっけん、塩酸といったように物質ごとに整理されてきました。しかし20世紀が近づく頃にはその数が増えて、收拾がつかなくなってしまう状況が生まれました。

そのとき、「あらゆる物質は、物質に共通の操作をつなぎ合わせたプラントで作ることができる」という画期的なアイデアを思いついたのが、ジョージ・デイビス（George E. Davis）という19世紀後半に活躍したイギリス人です。水でも油でも液体輸送という操作は同じであるし、発酵液でも石油でも蒸留という操作は共通です。だから、あらゆる物質は単位となる操作の組み合わせで作れる。それならば知識は単位操作の数だけでよい。こうして化学工学が誕生したのです。彼の、”*Handbook of Chemical Engineering*”という著作は、その集大成です。

私は卒業研究で反応操作の実験を行いました。直径5ミリの触媒を粉碎し小さくして用いると、サイズに逆比例して触媒性能が向上する、それが数学モデルによって記述され定量的に再現できる、このことに驚き圧倒され研究者への道を歩み始めることになりました。巨大な反応装置に供給された原料分子は、触媒粒子の間隙を流れ、触媒内部にあるナノメートル径の細孔内に拡散します。そして、細孔内壁で生成物分子に変換され、流体に戻って反応装置を流れ出ます。分子が細孔内壁に衝突する頻度は毎秒千億回。同じような現象が蒸留装置や加熱装置でも生じ、装置をつないだプラントによって原料が目的の物質へ変換される。化学プラントというこの壮大な舞台に、私は魅了されました。

その後、化学工学の研究対象は、化学プラントからコンピュータへ、さらに化学産業以外へと拡大を続け、私自身の研究分野も、環境やエネルギー、さらには半導体製造や地球環境までへと展開してきました。これらは一見すると異なった領域のように聞こえるかもしれませんが、化学工学者である私には、半導体製造もサンゴ礁も、地球ですらも、分子が反応し移動する見慣れた風景のように映るのです。

さきに触れた環境問題に象徴されるように、人類は今、文明持続の問題に答えを出すことを迫られています。時間は切迫し

状況は複雑になり、知識は膨大で見通しはたちません。しかしそうした現状は、実は、デイビスがかつて化学産業に関して認識したものと本質的に酷似している、私にはそのように感じられます。「化学工学の父」と呼ばれるこの人物が行ったことこそ、「知識の構造化」にほかなりません。今、私たちは、これをより大きな舞台において展開する、つまり、「人類全体の知識の構造化」を行おうとする段階に至っているのです。

「知識の構造化」を行おうとするときに大切なことは何でしょうか。もちろん、そもそも自分の専門分野の知識に対する深い理解がなければ、これを他の知識と相互に関係づけることはできません。そうした、いわば当然の学問的能力とともに、「知識の構造化」を行うために必要なのは、学問に接する姿勢としての「異質なものに対する好奇心」です。そして、「異質なもの」にも目を向けようとするときに一番手っ取り早く、また有効なのは、さまざまな分野の友人をたくさん作ることです。私は、半導体の研究をすすめている頃、いくつかの大学や企業などの若手の人たちと、時には泊りがけで議論を重ねて、新しい研究を展開したことがあります。また、その後、私が、地球温暖化や化石資源の枯渇などをテーマに、環境工学の最前線へと出て行くことが出来たのも、同じような、さまざまな分野の研究者との議論があったからです。そこでは、お互いにもっている「異質なもの」をぶつけ合うことが、友人や仲間を作っていく力となり、同時に、総合的な知の分野を開拓していく力となりました。

さきほど化学工学の体系化を行ったデイビスの業績に触れた時に、いまや私たちは、「人類全体の知識の構造化」を目指す段階に入っているとお話ししました。環境問題や高齢化問題など、世界の多くが共通の課題に直面している状況では、国境を越え、人類全体を視野に置いて課題解決に取り組んでいこうとする覚悟が必要です。皆さんには、大学院で過ごす間に、さまざまな機会を捉えて、国際的な場での知識の交流を広げ、世界の人々と肩を組んで課題解決への歩みをすすめてもらいたいと思います。

東京大学には、昨年度の統計でみると、中国からの722名、韓国からの534名をはじめ、合計99の国と地域から来た2,372名の留学生が在籍しています。この入学式の間にも、たくさんの留学生の皆さんが出席しています。また、海外の大学などとの交流協定も300件近くにのぼります。皆さんが学ぶことになる私たちの大学院は、ただ知識を学ぶというだけではなく、異質の共同体や文化との交流あるいは衝突を日常的に経験する場であり、発想や思考の体系の再編成と改訂作業に日々さらされる場でもあります。それは、日本人である学生の皆さんにとっても、また世界各地からの留学生の皆さんにとっても、貴重な



経験の機会になることと思います。

私たちの大学の、いわば憲法というべき「東京大学憲章」は、その前文で、東京大学にとって構成員の多様性が本質的に重要な意味をもつことに触れています。異質な他者との出会いを求め、その異質性を感じ取る中で、大学の新しい知的伝統が日々生み出されていくはずで、そのような刺激的な環境の中で、皆さんが、国境を越えて友人となり、互いに切磋琢磨し合うことを期待しています。

最後に、「先導型の思考」に依って研究をすすめていく上での大切な視点を、もう一つお話しておきたいと思います。それは、知識のもつ「公共性」を考える機会をもってもらいたいということです。

知識や研究が「公共性」を持つ、これは、かつては私たち大学人にとって当たり前のことでした。皆さんの多くも、そのように思っているかもしれません。そうであればこそ、大学における教育や研究に多くの投資が行われる一方で、大学に自治が広く認められてきたのです。ただ、私は、「知識の公共性」が自明であるという感覚が、最近揺らいでいるような危惧も覚えます。

もともと学問研究は、出発点においては、公共的な関心というよりは個人的な好奇心によって動機づけられる部分が多いものです。また、研究テーマを掘り下げていくにつれ、そのテーマ自体の面白さにのめり込むことは、ごく自然なことであり、研究者に必要なことでもあります。ただ、一つには、さきほども触れた、知識の細分化という現代的状況が、また、いま一つには、研究成果をめぐる激しい競争環境が、「知識の公共性」という社会的期待に対する大学人の意識を弱めている場面があるのではないかと恐れるのです。

しかも、厄介なことに、現代では、「公共性」という大きな物語は、その像がぼやけてきているように見えます。たとえば、国家の公共性は市場原理によって突き動かされていますし、新聞や放送の公共性は、読者や視聴者の不信とインターネットの発展によって揺さぶられています。こうした中で、大学の公共性、そこで生み出される知識の公共性の姿を思い描くことが、しばしば難しくなっているようにも感じられます。

これは、現代が、人類が未だ経験したことのない多くの課題に取り囲まれている、といった状況と関係しているのかもしれませんが。「追いつき型の思考」が全盛の時代は、知識と公共性との関係がはっきりしていた時代でした。何が公共性が明確であり、そのために必要とされる知識も明確でした。そこには、すでにモデルが存在していました。しかし、現代は異なります。そのために、「先導型の思考」に依る時には、「知識の公共性」ということについて、改めて意識を研ぎ澄ましておく必要

が生まれるのです。

興味深いことは、現代において、社会のさまざまな場面で、公共性が指し示す内容があいまいになっている一方、そのあるべき内容をめぐって多くの人々が議論して考えていくプロセスが大切にされる傾向が見られることです。つまり、「参加型」になってきているのです。したがって、「知識の公共性」という課題を考える場合にも、他の学問分野とのかかわりや社会とのかかわりの中で、多くの人々との議論を通じて取組んでいくプロセスが重要になります。

たとえば、いま、東京大学が、市民、自治体、企業と手を携えて、柏の地で試みている「国際キャンパスタウン構想」という社会実験は、そうしたプロセスの実験の場ともなるでしょう。そのコンセプトは、「世界の知が、社会の参加を得て、キャンパスと街で実験を行いつつ、21世紀の社会モデルを創造する空間」です。また、いま地球温暖化の一因としてCO<sub>2</sub>の排出規制が社会的に大きな課題となる中で、東京大学は、大学の持つ知恵と知識を活用して、キャンパス全体で、2012年までにCO<sub>2</sub>排出量を15%削減します。そして、その間に2030年までには50%減らすためのアジェンダを作ろうとしています。このことも、「公共性」に対する、大学の新しいかかわり方の一端を象徴するものになると考えています。

今日、たしかに私たちを取巻く課題は多く、また複雑になっています。それだけに、課題に取り組む研究もやりがいがあるということです。私がお話した、「知識の構造化」や「知識の公共性」といった視点を折に触れ意識しながら、ぜひ、知の新たな創造に挑戦して下さい。学問の先輩として、また学問の仲間として、この厳しくも魅惑に満ちた世界を自らの力で切り開こうとしている皆さんに、心からのエールを送りつつ、式辞を終えることといたします。

<平成二十年（2008年）四月十一日>



## 教育学研究科長 式辞



東京大学  
大学院教育学研究科長  
金子 元久

東京大学大学院に入学されたみなさん、この東京大学の学問のコミュニティに皆さんを受け入れることを、心からうれしくおもいます。私だけでなく、ここに参列している、総長をはじめ大学の役員、部局長のすべてが心のそこに深い喜びを感じているのではないのでしょうか。それは、ここにいる皆さんの中から、すぐ近い将来に、日本の、あるいは世界の知識を進歩させ、作り変える人が、ほぼ確実に出てくることを確信しているからです。

知識を媒介として、教師と学生とが、深いコミュニケーションを保ち、そしてやがては学生が教師をのりこえて新しい地平を切り開いていく。そしてそれをつき動かすのは、知識の発展そのものと、それを通じて自分自身を実現していくことへの、人間の深い要求です。そうした要求を共有する学問のコミュニティに皆さんは参加されるのです。

それを申し上げたうえで、私はこれから、自分の専門である教育学の立場から、大学院という制度と、大学院生という存在が、歴史的にどのように形成され、そしていまどのような状況におかれているかということについてお話してみたいと思います。

歴史的にみれば現在の大学院ができてくるのには三つの重要な契機がありました。

第一は今から約200年ほど前、正確には1810年のドイツにおける「ベルリン大学」の創設です。これは、いわば理念の革命でした。いわゆる「大学」自体の歴史はそれよりさらに古く13世紀にさかのぼることができますが、中世以来の大学は基本的には広い意味での職業教育の機関でした。それに対して、本来の人間のもつ理性を発展させ、人間や社会の自然真理を探求することこそが、個人と社会の究極の目的であり、それを担うのが大学だというのがベルリン大学創設の理念でした。そこでは研究も教育も、純粹に自分の中から発する知的要求に耳を傾け、俗社会からの要求を厳しく拒む中から生まれるものでなければなりません。そのためには大学には「自由」があたえられなければならない、個々の研究者は本質的に「孤独」な存在でなければならないのです。

また、追求されるべき真理の前には、教師と学生との間に本質的な違いはありません。ベルリン大学の創設者であるフンボルトはこう言っています。「大学の教師は、もはや普通の意味での教師ではない。また学生はもはや受動的に教えを請うものではなく、自ら研究に取り組むのである。」教師と学生とが同時に研究に取り組むことが、大学の本質であるという主張は、その後の近代大学を支える理念の中核となりました。

第二の契機は、今から100年ほど前の19世紀の終わりに、アメリカで起こったことです。アメリカにそれまであったカレッジは、いわば古典諸学の習得の場であり、学術研究の要素はきわめて薄いものでした。しかし19世紀後半の諸科学の興隆の中で、その時点で世界の先端を切っていたドイツの大学モデルをアメリカに導入する動きが始まりました。その際に、青少年を教育する場としての学士課程とは別に、独立した組織として、将来の学術研究のプロと高度の専門職を養成する大学院が作られたのです。これは、いわば組織の革命といえるでしょう。

これが我々のいう大学院 (graduate school) という制度の淵源です。修士課程、博士課程という階梯からなる組織もこの時にできたものです。この大学院の制度は、その後、アメリカの学術研究と教育の発展の基礎となり、世界に影響を与えました。ちなみにちょうどこの時期に形成された日本の大学制度は、ドイツ型のモデルに強く影響されながらも、ドイツにはなかった大学院という組織を初めからそなえていました。

第三の変化はごく最近、ここ20年ほどの間に世界中で起こっている、大学院の量的拡大の革命です。先進諸国のみならず、中進国や途上国においても大学院の拡大が進んできたのです。その背後に急速な科学技術の発展、知識社会化、グローバル化があることは明らかでしょう。ヨーロッパにおいては戦後になっても、大学院という制度自体が未発達でしたが、1990年代以降、大学院の整備と拡大が急速に進んでいます。

日本においては大学院の量的な拡大が特に急速におこりました。1991年には日本の大学院在学者は博士課程、修士課程をあわせて10万人にすぎませんでした。2000年には21万人に、さらに2007年には26万人に達しています。東京大学はそうした大学院の拡大の先駆けとなってきました。

ところでいま申し上げた三つのうち第三の変化はまだその全貌を明らかにしているわけではありません。たしかに量的な変化は起こりました。しかし他方で、社会と大学院教育との関係、大学院における教師と学生の生き方やキャリア、大学院における教え方と学びかた、大学院教育の理念などは、必ずしもそれに応じて変化しているとはいえません。そこから今、様々な目にみえない軋轢と葛藤が生じていると私は感じます。

それがもっとも端的に現れているのが、大学院修了者のキャ

リアの問題です。これまでの大学院の基本的な機能の中心はまず大学教員の養成でした。しかし最近の大学院の量的な拡大に対比して大学教員の拡大は限られています。1990年からこれまでに大学院生が3倍近く増加したのにくらべて、大学教員の数はわずかに3割程度しか増えていません。大学教員になる機会は相対的に大きく減少しています。

もちろん、こうした大学院の拡大の背後には、企業や政府において高度の知識能力をもった人材への需要が拡大するという暗黙の期待がありました。しかしそれが大学院生の実際のキャリアと結びつくには、大学院での教育が、人材需要に応えるだけでなく、人材需要を誘発すること、それによって大学院と社会との間にダイナミックな相互関係が形成されることが必要です。実は大学院制度ができたアメリカにおいても、大学院は、人材需要の変化に応じて巧みにその姿を変え続けてきました。これに対して日本の大学院は大学教員や研究者の養成のための制度という枠から最近まで大きく脱却することのないままに、量的な拡大を迎えてしまいました。いまそこで生じた問題を乗り越えることが求められているのです。

さらに基本的な問題は、学問自体のあり方です。200年前にフンボルトが学問の自由と孤独を標榜したとき、想定されていたのは、知識それ自体の追求が、やがて真理という名の、調和のとれた知識のユニバースに人間を導くということでした。しかし21世紀のいま我々が直面しているのは、知識のユニバースが爆発的に拡大した結果、個々の学問的営為はますます細分化され、分断化されつつある現実です。

同時にそれは、学術研究に多くの人材が割かれ、また多量の資源が投入されることを意味します。社会は学術研究に大きな期待を抱くとともに、学術研究活動が社会にとってどのような意味をもつのか、ますます厳しく問うようになっているのは当然ともいえるかもしれません。少なくともそうした意味で大学はもはや社会の中で孤独な存在であることは許されなくなっているのです。また、そうした社会の圧力が、研究における激しい競争を生み、ひいてはそれが大学院に学ぶ学生にも及んでいることも否定できません。そうした意味で、いま大学院生は好んで孤独な存在であるのではなく、むしろ孤独になることを強いられるともいえるかもしれません。

こうしてみれば、大学院という存在がいま、大きな歴史的な転換点にたっていることがあらためて認識されます。その葛藤と軋轢の中で、皆さんはこれからの大学院での勉学生活に入られるわけです。そこでは皆さんは、知識を身につけ、創造することの深い喜びを感じる一方で、その知識がどのような意味をもつのか、そして自分自身の身につけた知識を社会でどのように活かしていくのかについて、深く悩まれることもあるかもしれません。

しかし私はそうした悩みが避けられるものとは考えません。むしろ悩みをもたないことのほうがはるかにみなさんにとって危険ではないでしょうか。誰にでもあてはまる学問への姿勢や、生き方のモデルはいま求めることができないからです。個々の大学院生が自分のおかれた現実を直視し、より深く考え、模索すること、それ自体が、新しい大学院生のありかたの基本となるのだと思います。

ただしそれは個々の大学院生が孤立しなければならないことを意味するものではありません。皆さんのまわりの大学院生もやはり模索し、そして教員の側も模索しているのです。探求する者のコミュニティとしての大学という200年の伝統は、まだ生きています。ただし探求は専門領域の研究だけでなく、大学院での研究教育と学問のありかた、その中で大学院生の生き方についても、行わなければなりません。そして、それについて大学の中で真摯な対話が可能になることが、やがて新しい大学院のあり方を形成し、ひいては日本の知識社会のありようを決めていくのではないかと考えます。

そうした学問のコミュニティに皆さんが参加されることを改めて歓迎して式辞とします。

<平成二十(2008)年四月十一日>



## 数物連携宇宙研究機構長 祝辞



東京大学  
数物連携宇宙研究機構長  
村山 斉

大学院への新入学生の皆さん、今日はおめでとうございます。ご家族・ご親族・友人の方々もおめでとうございます。

私は東大の学部、大学院を出て2年間東北大学で助手を勤めた後、14年間アメリカで過ごしました。そして新しく出来たばかりの数物連携宇宙研究機構の機構長として、ついこの一月に日本へ戻ってきました。完全な「アメリカぼけ」で日本の暮らしや仕事の仕方が分からず、まだ色々と苦勞しているところです。特に日本語が変になっています。例えば、着任後に各方面へ挨拶に向うときに、「お礼参りに行ってきます」といって周りをぎょっとさせました。戴いたお菓子を機構の事務室へ差し入れに持っていくときに「たらい回しですが」と言ったのも大失敗です。どうも振る舞いが普通でないらしく、警備にまったりもします。

科学の研究に興味を持った理由の一つは国際基督教大学高等学校の先生たちです。しょっちゅう物理や化学の先生の部屋へ出入りしていましたが、あるとき化学の先生の本棚に「化学実験べからず集」というのを見つけました。ある金属を水中に入れると急激な化学反応がおこるので、絶対にやってはいけないとありました。とっさに「どんなにすごい反応なんだろう。やってみよう」と思いました。化学実験室のるつぼと電気分解用の電極を貸してもらい、何とかしてその金属を少量取り出すことに成功しましたが、何せ反応性が強くて、るつぼにことごとく穴をあけました。こんな好き勝手やっていた生徒を許していた寛大な先生方には今考えると驚かされます。事故があったらどうするおつもりだったんでしょうね。そのお一人の滝川洋二先生は後に駒場に理科教育研究の客員教授で移られました。

この武道館は懐かしい場所で、自分の入学式だけでなく、その後3回東大オケのメンバーとしてマイスタージンを演奏しました。コントラバスです。当時は57コントラバスとい

ました。大学時代は授業にろくに出ず一日中楽器を弾いていて、今考えるとよく大学院に入れたものだと思います。当時平均点がダントツに高かった物理学科へ進学できたのは、進学振り分けで物理の底が抜けたお蔭でした。物理へ進学した後は演習の時間というのがあって、一学期に少なくとも2問黒板で問題を解かないと単位が取れないのですが、冬のコンサートが終わるまでは勿論やりません。最後の回になって2問解かないといけませんから、2時間以上前に行って他の人が問題を解き始める前に黒板に書き始めました。時間になって同級生が入って来ると、後ろの方から声が聞こえます。「おい、あいつ誰だ？知ってるか？」そのぐらい授業には出ていませんでした。

真剣に勉強をはじめたのは、大学4年生の夏の演奏旅行が終わってから、秋の大学院入試に備える為です。このときに本当に物理にのめり込みました。いくつかの基本原則から、自然界のいろんな現象を説明できることにわくわくしました。例えば空はどうして青く、夕日は赤いのか、星はなぜ光るのか、どうして金属には電気が流れるのか。こういうことが基本原則で説明できるのがおもしろく思えました。もっと物事の根本に迫りたいと思い、素粒子物理を志望しました。物質を細かく分けると分子、原子、原子核、陽子と中性子、そしてクォークや電子という素粒子に行き着きます。この素粒子の性質を記述し、わずか18の基本定数で身の回りの現象が全て説明できるはずだ、というとんでもない理論が素粒子の標準理論です。これをぜひ分かってやろう、もっと根本的な理論を作りたい、そんな気持ちで大学院へ進みました。

ところが大学院時代ははっきり言ってみじめでした。そもそも自分が悪いのですが、勉強したい内容を研究している先生がいるかどうかきちんと調べもせず、何となく東大から東大の大学院へ進んでしまった為、その分野の研究がほとんど行われていなかったのです。研究にも「はやり」があり、周りの大学院生たちはみな当時のはよりの理論を研究していました。どうしてもなぜそれが面白いのか理解できなかつたので、先輩一人一人捕まえて「なぜこの研究をやっているのですか」と聞いて回りました。相当鬱陶しい後輩だったろうと思います。研究室の中心的存在だった先生にも、うさん臭がられ、もう修士で就職しようと思っていました。

ところが、別の先生が哀れに思ったのか、筑波の高エネルギー研究所(当時)から私のやりたい分野の萩原さんという研究者に紹介して下さい、やっとなりたい勉強ができる可能性が出てきました。それで、一応博士課程まで残ったのですが、萩原さんはすぐさまイギリスへ2年間も出掛けてしまい、結局

置き去りです。しょうがないので全然関係ない分野の高温超伝導などをしばらく勉強していました。

D2の終わりになってやっと萩原さんが日本へ帰って来て、さあ教えてもらおうと思ったところ、「一人じゃ教えてやらない。」結局日本全国行脚して、広島、京都、東京、筑波から何とか7人、興味の近い大学院生をかき集めました。そこでやっと本格的にD論の準備ですが、何せもう1年しか残っていません。最後の最後まで追い込みで、提出締め切り日は早朝の電車の中で製本していたほどです。

こんな事があったので「みじめだった」と言いましたが、東大での一番のメリットは同級生たちです。みんなとてつもなく優秀で、教わるのがたくさんありました。今でもどんな教科書よりも友人から教わったことを良く覚えています。

こんな無茶苦茶な大学院生生活でしたが、運良く東北大学の助手になれました。採用してくれた柳田さんという方に何年も後で「なんで採ってくれたのですか」と聞いたところ、「集中講義に行ったときに、途中で面白い冗談を言ったからだ」と言われました。何が助けになるか分かりません。

結局自分の興味のある分野を求めてアメリカ、バークレイに移りました。興味の合う研究者にも大勢会って、その後、この素粒子と宇宙の境界分野が急速に成長していったものですから、幸運が重なってバークレイで教授になってしまいました。

そうこうしているうちに分かったのは、標準模型では身の回りの物は説明できるけれども、宇宙は説明できないということでした。学校では万物は原子で出来ていると習いますが、大ウソです。宇宙の物質の八割以上は原子ではなく、「暗黒物質」という正体不明のものです。しかも暗黒物質の3倍以上の「暗黒エネルギー」というのもあって、これが宇宙を引き裂いているのです。素粒子物理学が始まって百年後、結局まだ宇宙の5パーセントも理解できていないことがはっきりしました。これを何とかわかってやりたいということで、今度数物連携宇宙研究機構を作ることになった訳です。

私のこんな経験談が皆さんのどういう役に立つかは分かりませんが、いくつか敢えて教訓を挙げてみます。一つには研究は勉強と違って、本当に心から情熱を注げる対象でないとうまく行かないことだと思います。「知りたい」、「分かりたい」という気持ちだけが原動力です。とはいってもどの分野も進歩して少しずつ変わっていくので、一つのことにと凝り固まるのでは

なく、その時々本当に面白いと思うことを追求すれば良いのです。楽しくないと続きません。研究は99%が試行錯誤、暗中模索なので、やることは殆どうまく行きません。ごくたまにうまく行く時があって新しいことがわかります。「そうか!」とすっきりした気持ちと、世界中で自分以外に誰も知らない新しいことを見つけたという感覚は、とても嬉しいものです。

もう一つは出会いです。研究者はたとえ一人で研究していても、他の研究者から物凄く影響を受けます。いつも、どんな驚きがあるのか、オープンでいたいと思います。それで、何か知らないこと、分からないことはどんどん質問する。日本では知らないことは恥ずかしがる風潮がありますが、特に東大生はそうですが、そんな必要はありません。研究ではいろんな細かい専門分野があり、本当の専門家は世界に数少ない訳ですから、ちょっと外れた分野では知らないことがあるのが当たり前です。どんどん質問して自分の世界を広げるように心がけてきました。

そして競争です。私の一番引用されている論文はスイスにいるイタリア人二人、ドイツ系アメリカ人で当時東海岸にいた一人との共著です。ある晩寝る前に出たばかりの論文をチェックしていたところ、殆ど同じ内容の仕事が発表されていました。慌ててイタリア人の仲間にメールして、向こうは朝ですから彼らが原稿を書き続け、次に東海岸に回って、最後に西海岸の私のところへ来て、一日で論文を仕上げました。あそこで頑張らなければ、独立に研究したことを誰も認めてくれなかったでしょう。競争に勝つことが研究の目的ではありませんが、競争はとても刺激になります。

最後に、研究に関して大事だと思うことは、説明が上手になること。どんなに面白い結果が出て、他の人に説明できないと、だれも評価してくれません。面白いと思ってやっている訳ですから、面白く説明しましょう。興奮しましょう。しばらく同じことをやっている自分でもだんだん飽きてきますが、人に説明してみると、実はどんなに面白いことだったのか自分でも再確認できます。

大学院は勉強から研究への転換期です。皆さんのほとんどは、研究というのがどんなことか、まだピンと来ないと思います。勉強はもう分かっていることを身につける訳ですが、研究は世界で誰も分かっていることにチャレンジすることです。とっっても大変ですが、とっっても面白いです。皆さんも早くその面白さに気付いて楽しんで欲しいと思います。これで私の祝辞は終わりです。ありがとうございました。

<平成二十年(2008年)四月十一日>

平成19年度第2回(春)は学業のみを対象として募集を行い、合計29件の推薦をいただき、学生表彰選考委員会の厳正なる審議の結果、以下の11名の方々が総長賞受賞者として選出されました。

授与式では、選考結果報告のほか、総長から表彰状と記念品の贈呈後、各受賞者から今回の受賞内容に関する映像を交えたオリジナリティのあるプレゼンテーションが行われました。



総長大賞を授与される前田和彦さん

実施日時

3月24日(月) 17:00より  
小柴ホール(本郷キャンパス)にて



受賞者全員の  
記念写真



総長大賞を授与される江藤祥平さん

また、平成19年度で実施2回目となった「総長大賞」受賞者の選考がプレゼンテーション終了後、別室にて行われた結果、平成19年度総長賞受賞者15件の中から、第2回受賞者の前田和彦さん、同じく第2回受賞者の江藤祥平さんに「総長大賞」が授与されるとともに、第1回受賞団体の東京大学乗鞍サマースクールに「総長特別賞」が授与されました。

授与式には受賞者関係者のほか、学部卒業生・大学院修了生総代も多数参加し、祝福の場が大いに賑わいました。

総長大賞 受賞者紹介



**前田 和彦**  
工学系研究科博士課程  
(2007年9月修了生)

可視光応答型光触媒を用いた水の分解反応は、再生可能な水素エネルギーを製造する究極の反応として注目されている。前田氏は、博士後期課程においてこのような光触媒の開発に一貫して取り組み、純粋に可視光のみを用いて再現性良く水を分解できる新しい光触媒の開発に世界で初めて成功した。従来の概念・常識に捉われない同氏の研究手法は、英国科学雑誌Natureをはじめとする計23報の国際学術雑誌への掲載など数多くの成果を生み、国内外を問わず幅広く高い評価を受けた。このような業績が認められ、同氏は博士後期課程を半年短縮して修了し、博士号を取得した。以上、同氏は本学学生の範となるものとして高く評価された。

用いて再現性良く水を分解できる新しい光触媒の開発に世界で初めて成功した。従来の概念・常識に捉われない同氏の研究手法は、英国科学雑誌Natureをはじめとする計23報の国際学術雑誌への掲載など数多くの成果を生み、国内外を問わず幅広く高い評価を受けた。このような業績が認められ、同氏は博士後期課程を半年短縮して修了し、博士号を取得した。以上、同氏は本学学生の範となるものとして高く評価された。



**江藤 祥平**  
法学政治学研究科  
(法曹養成専攻)3年

江藤氏は、法学政治学研究科法曹養成専攻(法科大学院)において、法学未修者でありながら、2年次席次1位、3年次席次1位、首席として卒業する快挙を成し遂げ、さらには、取得94単位中、40単位で優上を取得するという優秀な成績を修めた。

同氏の主な研究分野は、刑事訴訟法であり、おとり捜査の違法の根拠と、違法の判断基準の従来の議論の不整合を突いた論文「おとり捜査からみる「相当性」の意義に関する一考察」は、高い評価を受けた。また、国際法にも興味を持ち、留学経験を生かした堪能な語学力を武器に、近時の国際司法裁判所ジェノサイド事件本案判決を題材とした論文「国際司法裁判所のジレンマ〜'07年本案判決と'04年先決的抗弁判決の矛盾」は、既判力概念の本質に迫った内容であり、高い評価を受けた。

## 総長特別賞 受賞団体紹介

### 東京大学乗鞍サマースクール



今年で50周年を迎える東京大学乗鞍サマースクールは、1958年に当時教育学部生であった故古田貞夫氏を中心として、衛生教育の実践と研究の場として長野県の旧安曇村立大野川小中学校(現松本市立大野川小中学校)において始められ、演劇、工作、調理、歴史・地理調査などの課題のもとに、交通網が未発達だった往時には山村の子供たちに都市文化伝達の役割を果たしてきた。

その役割は時代とともに変化したものの、現在でも大学生が小中学生に様々な知識・思想を伝えながら交流するという精神を受け継ぎながら、双方に大きな効果を及ぼしている。この50年間に約200人の学生チューターと900人近い子供たちが交流を重ね、地元の人々に対して本学の意義と存在感を高めた功績は大きい。

## 総長賞 受賞者紹介

### 姜 楠(教養学部4年)



姜氏は、教養学部生命・認知科学科在学中にきわめて優秀な成績を修めるとともに、意欲的に学習、研究に励む姿勢が高く評価された。卒業研究では、家族性自閉症発症の責任遺伝子産物であるシナプス接着タンパク質ニューレキシン、ニューロリギンの結合が、男性ホルモンであるテストステロンによって阻害されることを初めて見出し、男性に自閉症が多い理由の1つを分子レベルで明らかにしたことは特筆に価する。特に、心理学と生物学の融合を目指す同学科の基本理念にも合致する研究成果は、今後の自閉症治療にも一役買うものと期待されている。

### 嶋多 美穂子(医学部4年)

嶋多氏は、医学部健康科学・看護学科において「ヒトナルコレプシー感受性遺伝子の探索」という課題で卒業研究を行い、卒業論文発表会では最高点を獲得して平成19年度同学科の研究奨励賞を受賞した。同氏は、代表的な過眠症であるナルコレプシーについてのヒトゲノム全域にわたる関連解析の結果を基に、各種の生物情報データベース検索を組み合わせて、ナルコレプシー発症に関与し得る候補遺伝子を30種類余り選択し、さらにこれらを実験的に検証することによって新規の有望な遺伝子を見出した。これは睡眠障害の遺伝的背景の解明に貢献し、新たな治療法の開発にもつながる可能性をもつ成果であり、高く評価された。



### 大森 陽日(経済学部4年)



大森氏は、経済学部在学中に26科目全科目「優」の成績を修め、しかも、そのうち4科目は大学院科目である。さらには、卒業論文も特選論文に選出されるなどその優秀さは卓越している。同氏の卒業論文は、近年実務界で話題になっている“Capital Structure Arbitrage”と呼ばれる取引手法を信用リスクの理論モデルと整合的に定式化したうえで、その取引のシミュレーション環境を構築・実施し、その結果の分析を行うことにより当該手法の妥当性を検討したものである。同氏はこの論文にかかる一連の作業を完全に独力で達成しており、その水準は学部学生の標準をはるかに超え、高く評価された。

### 北岡 雅則(工学部4年)

北岡氏は、工学部在籍中の学業成績が飛びぬけて優秀であるばかりでなく、所属学科にとらわれず他学部や他学科の講義を意欲的に履修しており、学業に取り組む意欲には目を見張るものがある。また、卒業論文「2次元イオン結晶における量子ゲートの提案」では、イオントラップ中に2次元状に結晶化されたイオンを用いた新たな量子ゲートの理論的提案に対して、物理的実現のための手法を提案し、様々な要因で引き起こされるエラーの数値的な評価を行った。この結果、提案された量子ゲートが正しく動作することを確認した。このような研究成果および顕著な活躍が高く評価された。



## 総長賞 受賞者紹介

### 吉江 路子(総合文化研究科修士課程2年)

吉江氏は、運動学・神経生理学・心理学を融合した学際的アプローチを用いて、いわゆる「あがり」によって音楽演奏の質が低下する機構の解明に取り組んできた。その研究成果は国際的に高く評価されており、これまで3編の査読付論文が受理されている他、European Society for the Cognitive Sciences of Music の Young Researcher Award など、3つの学会賞を授与されている。さらに実験を兼ねたピアノコンクールを自ら企画し、ステージ上におけるピアノ奏者の心理・生理・行動的变化を世界で初めて詳細に計測するなど、その豊かな発想力と熱心な研究姿勢が高く評価された。



### 仲谷 正史(情報理工学系研究科博士課程3年)



仲谷氏は、人間の触覚メカニズム研究に学部学生の頃から約6年間携わり、神経生理学・心理学・機械／計測工学の面から研究を行った。特に、同氏が取り組んだ触錯覚研究は世界的に知られ、Harvard 大学／ McGill 大学との計4件の共同研究を先導した。在学中に取得した3件の特許を含め、アカデミア研究の産業化にも積極的であり、触覚を通じたコミュニケーション産業の創出を目指した展示会：TECHTILE展をデザイナー・アーティスト・研究者有志とともに企画・遂行した。さらに、最新皮膚科学の書籍・表紙オビへの錯覚パタンの提供、岩波「科学」への寄稿などサイエンスコミュニケーションにも広く貢献した。学術研究、産学連携を視座に入れた社会貢献、アウトリーチ活動のいずれにおいてもオリジナルな活動を先導した点は、高く評価できる。

### 植阪 友理(教育学研究科博士課程3年)

植阪氏は、認知心理学を生かした個別学習支援によって児童・生徒の学習上の問題を見出し、それらを解決する指導法を開発してきた。また、海外の研究者と連携して国際比較調査も行い、第一著者として執筆した論文が国際誌に掲載されている。さらに特筆すべきは、スタンフォード大学で行われた国際学会Diagrams 2006において最優秀論文賞(学生部門)を受賞したことである。アメリカ・イギリスなど多くの国の研究者が参加し、採択率が30%程度と非常に厳しい本学会において、実践性の高さの実証研究としての質の高さが評価された。また競技合気道においても全日本学生選手権準優勝・国際大会団体優勝等数々の戦績を残すなど、国内外における活躍が評価された。



### 齋藤 継之(農学生命科学研究科博士課程3年)



齋藤氏は、TEMPO触媒酸化を用いることにより、最も豊富なバイオマスであるセルロースから、幅約4ナノメートルと超極細で長さ数ミクロンの高結晶性ナノファイバーの調製に世界で初めて成功した。この新規ナノ素材は、光学特性、熱安定性、ガスバリア性等の機能が優れているだけでなく、資源・製造プロセス・廃棄の観点から環境適合性が高いのが特徴である。現在、循環型社会に対応した新しい文化・産業の創成を目指し、同氏の見出した新規ナノ素材を基盤部材とする各種共同研究が進められている。この間、マリー・キュリー奨学生に選ばれてフランス国立科学研究庁で共同研究を進めるなど、同氏の研究業績は国際的にも高く評価されている。

### 岡村 圭祐(理学系研究科博士課程3年)

全ての物質とその間の相互作用を統一的に取り扱う理論として超弦理論が有力視されている。その鍵となる概念が、一般相対論で記述される重力理論と量子色力学などで代表されるゲージ理論との間の「双対性」である。岡村氏は、両者の背後にあって双対性を保証していると予想される「可積分性」の概念の発展に、厳密解の発見、双対性に新しい検証舞台の提唱などを通じて目覚ましい貢献を果たした。一流専門誌に発表された一連の研究成果は国際的に高い評価を受けており、トップレベルの研究者として、国内はもとより英ケンブリッジ大学をはじめとした多くの海外の大学・研究所に招聘され、共同研究や講演、集中講義など精力的な活動を行った。





# NEWS

## 一般ニュース

### 部局長の交代

一般

平成20年4月1日付で、下記のとおり部局長の交代がありました。新部局長をご紹介しますとともに、退任された部局長のご挨拶を掲載します。

	新部局長	前部局長
大学院工学系研究科・工学部	保立 和夫	松本洋一郎
大学院薬学系研究科・薬学部	杉山 雄一	柴崎 正勝
大学院公共政策学連携研究部・教育部	金本 良嗣	森田 朗
宇宙線研究所	梶田 隆章	鈴木洋一郎
物性研究所	家 泰弘	上田 和夫

### 新部局長紹介

#### 大学院工学系研究科・工学部

##### 保立 和夫 教授

(任期：平成20年4月1日～平成22年3月31日)



1974年3月 工学部 卒業  
 1979年3月 大学院工学系研究科 電子工学専攻博士課程修了工学博士  
 1993年6月 教授(先端科学技術研究センター)  
 1997年4月 教授(大学院工学系

研究科)

所属：電気系工学専攻・フォトリソグラフィ先端フォトリソグラフィ領域

専門分野：システムフォトリソグラフィ

研究内容(代表的な著書や論文)：

K.-Y. Song and K. Hotate: "Distributed fiber strain sensor at 1 kHz sampling rate based on Brillouin optical correlation domain analysis," IEEE Photonics Technology Letters, 19 (23), pp.1928-1930, 2007.

K.-Y. Song, Z. He and K. Hotate: "Effects of intensity modulation of light source on Brillouin optical correlation domain analysis," J. of Lightwave Technology, 25 (5), pp.1238-1246, 2007.

K. Hotate and Z. He, "Synthesis of optical coherence function and its applications in distributed and multiplexed optical sensing," IEEE J. of Lightwave Technol., 24 (7), pp.2541-2557, 2006, <Invited>.

K. Hotate: "Fiber Optic Gyro, (A chapter in "Trends in Optical Nondestructive Testing and Inspection")," Elsevier Science, pp.487-502, 2000.

T. Saida and K. Hotate: "General formula describing drift of interferometer fiber-optic gyro due to Faraday effect: Reduction of the drift in twin-depo-I-FOG," IEEE Jour. of Lightwave Technology, 17 (2), pp.222-228, 1999.

#### 大学院薬学系研究科・薬学部

##### 杉山 雄一 教授

(任期：平成20年4月1日～平成22年3月31日)



昭和46年6月 薬学部卒業  
 平成3年10月 教授  
 所属：生命薬学専攻医療薬学講座分子薬物動態学分野  
 専門分野：薬物動態学、肝臓生理学、薬物トランスポーター、ファーマコキネティクス(薬物間相互作用、遺伝子多型)、ドラッグデリバリー

研究内容(代表的な著書や論文等)：

1. Hayashi H. and Sugiyama Y. 4-phenylbutyrate enhances the cell surface expression and the transport capacity of wild-type and mutated bile salt export pumps. Hepatology. 45: 1506-1516 (2007) .
2. Mita S, Suzuki H, Akita H, Hayashi H, Onuki R, Hofmann AF and Sugiyama Y Vectorial transport of unconjugated and conjugated bile salts by monolayers of LLC-PK1 cells doubly transfected with human NTCP and BSEP or with rat Ntcp and Bsep. Am J Physiol Gastrointest Liver Physiol 290: G550-556 (2006) .
3. Giacomini KM and Sugiyama Y (2005) Membrane transporters and drug response, Chapter 2, in

Goodman & Gilman's The Pharmacological Basis of Therapeutics (Brunton LL, Lazo JS and Parker KL eds) pp 41-70, McGraw-Hill Companies, New York, New York, USA.

4. Iwai M, Suzuki H, Ieiri I, Otsubo K and Sugiyama Y Functional analysis of single nucleotide polymorphisms of hepatic organic anion transporter OATP1B1 (OATP-C) . Pharmacogenetics 14:749-757 (2004)

5. Sasaki M, Suzuki H, Ito K, Abe T and Sugiyama Y Transcellular transport of organic anions across a double-transfected Madin-Darby canine kidney II cell monolayer expressing both human organic anion-transporting polypeptide (OATP2/SLC21A6) and Multidrug resistance-associated protein 2 (MRP2/ABCC2) . J Biol Chem 277:6497-6503 (2002) .

### 大学院公共政策学連携研究部・教育部

#### 金本 良嗣 教授

(任期：平成 20 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日)



昭和 47 年 3 月

経済学部経済学科卒業

昭和 48 年 3 月

経済学部経営学科卒業

昭和 52 年 3 月

大学院経済学研究科修士課程中退

昭和 52 年 6 月

コーネル大学大学院地域科学博士課程修了

昭和 52 年 8 月 Ph.D. (コーネル大学)

昭和 63 年 10 月 経済学部助教授

平成 4 年 8 月 同 教授

平成 8 年 4 月 同 大学院経済学研究科教授

平成 16 年 4 月 同 大学院公共政策学連携研究部教授  
(大学院経済学研究科教授兼務)

平成 20 年 4 月 同 大学院公共政策学連携研究部長

所属：公共政策学専攻

専門分野：都市経済学 公共経済学 交通経済学

研究内容 (代表的な著書や論文)：

金本良嗣・蓮池勝人・藤原徹 『政策評価ミクロモデル』東洋経済新報社, (2006).

"The Ratchet Effect and the Market for Second-Hand Workers," Journal of Labor Economics, 10 (1) , 1992

"Hedonic Prices and the Benefits of Public Projects," Econometrica, 56, 1988

"Pricing and Investment Policies in the System of Competitive Commuter Railways," Review of Economic Studies, 51, 1984

Theories of Urban Externalities, North-Holland, 1980.

### 宇宙線研究所

#### 梶田 隆章 教授

(任期：平成 20 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日)



昭和 56 年 3 月

埼玉大学理学部卒業

昭和 61 年 3 月

東京大学大学院理学系研究科博士課程修了

平成 11 年 9 月

教授 (東京大学宇宙線研究所)

所属：宇宙ニュートリノ観測情報融合センター

専門分野：ニュートリノ物理学

研究内容 (代表的な著書や論文)：

1. Y.Ashie et al. (Super-Kamiokande collaboration) , "Evidence for Oscillatory Signature in Atmospheric Neutrino Oscillation" , Phys. Rev. Lett. 93, 101801 (2004) .

2. S. Fukuda et al. (Super-Kamiokande collaboration) , "Tau neutrino favored over sterile neutrinos in atmospheric muon-neutrino oscillations" , Phys. Rev. Lett. 85, 3999 (2000) .

3. Y.Fukuda et al. (Super-Kamiokande collaboration) , "Evidence for oscillation of atmospheric neutrinos" , Phys. Rev. Lett. 81, 1562 (1998) .

4. Y.Fukuda et al. (Kamiokande collaboration) , "Atmosphreic  $\nu\mu/\nu e$  ratio in the multi-GeV energy range" , Phys. Lett. B 335, 237 (1994) .

5. K. Hirata et al. (Kamiokande collaboration) , "Observation of a neutrino burst from the Supernovba 1987a" Phys. Rev. Lett. 58, 1490 (1987) .

### 物性研究所

#### 家 泰弘 教授

(任期：平成 20 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日)



昭和 49 年 3 月 理学部卒業

昭和 54 年 3 月 大学院理学系研究科物理学専攻博士課程修了

平成 6 年 4 月

物性研究所教授

所属：ナノスケール物性研究部門

専門分野：低温物性, 量子輸送

研究内容 (代表的な著書や論文)：

「物性物理」(産業図書, 1997 年)

「量子輸送現象」(岩波書店, 2002 年)

「超伝導」(朝倉書店, 2005 年)

"Transport Properties of High Tc Cuprates": Y.Iye, in "Physical Properties of High Temperature Superconductors", ed. D.M.Ginsberg, (World Sci.

Pub., Singapore, 1992) , pp.285-361.

Hofstadter Butterflies in Modulated Magnetic Field  
-- Superconducting Wire Network with Magnetic  
Decoration: Y.Iye, E.Kuramochi, M.Hara, A.Endo and  
S.Katsumoto, Phys. Rev. B70 (2004) 144524-1-9.

## 部局長退任の挨拶

### 工学知を構造化し、社会と連携する

#### 工学部を目指して 前大学院工学系研究科長・工学部長 松本 洋一郎

平成18年度から2年間、工学系研究科長・工学部長を務めて参りました。本学における最大部局として、持続的発展の基盤を整え、教育研究活動を発展させ、世界的な知の拠点として責務を果たすべく、組織・財政基盤の強化、大学院教育の継続的改革、次世代を担う若手層の充実、社会連携と国際化の推進を図って来ました。特に、継続的な事務組織改革、時代に即した大学院教育を実現するための組織再編・統合・増強、スーパー准教授の任用、社会連携講座の設置・運用、研究科フェロー制度の制定・活用に尽力致しました。その結果、多くの寄付講座、社会連携講座がこの2年間で新設され、工学教育研究の発展を支えることとなり、平成20年度からは新しく、電気系工学専攻、システム創成学専攻、エネルギー・資源フロンティアセンターが発足することになりました。こうした施策が行えたのも、偏に副研究科長はじめ構成員各位のご協力の賜物と御礼申し上げ、退任の挨拶と致します。

### 退任にあたって

#### 前大学院薬学系研究科長・薬学部長 柴崎 正勝

3月31日で私の二年間の薬学系研究科長・薬学部長職が無事終了いたしました。その間数多くの教職員の方々に御支援、御協力頂き厚く御礼申し上げます。日本の薬学部は4年制と6年制の問題でいまだに混沌とした状況にあります。昨年秋に薬学部に進学した学生の一割が6年制コースを選択する事が予定されております。その時の学部長職を偶然私が仰せつかりました。感慨無量です。過去二年間で最も残念だった事は、グローバルCOEに失敗したことであります。現在の混沌とした薬学の状況を克服すべく、ほぼ薬学単独で申請した事が失敗の原因と思われませんが、いまだに残念な気持ちが残っております。一方、最も嬉しかった事は、薬学部の建築関係がすべて終了したことと、第四の専攻として統合薬学専攻の設置が認められた事でありました。4月1日からは杉山新研究科長・薬学部長のリーダーシップのもと、我々の部局も最大限の努力を致します。今後とも御支援の程よろしく御礼申し上げます。

### 創設以来の4年を振り返って

#### 前大学院公共政策学連携研究部・教育部長 森田 朗

創設以来2期4年にわたって努めてまいりました公共政策大学院の院長職（連携研究部長・教育部長）職を、3月末で退任いたしました。東京大学では、法科大学院とともに、初めて設置された専門職学位課程の大学院であり、かつ法人化と同時に、予算もスペースもない状態でスタートしたために、創業者の苦労を味わいましたが、学内外のご支援と学生諸君および教職員の努力で、応募者は定員の3倍を上回るとともに、最近では社会的にも認知されるようになりました。運営に当たっては、学生の学習環境の改善と教員の事務的負担の軽減に留意してきました。その結果、海外の大学院との二重学位制の実現をめざした国際化および具体的な政策課題への取組を中心とする社会連携等が大いに進み、小さいながらも、東京大学としてはユニークな大学院を作ることができたと思っております。課題はまだ多々ありますが、これからも発展を続けていってほしいと思っています。

### 退任にあたって

#### 前宇宙線研究所長 鈴木 洋一郎

神岡のタコ壺から抜け出し、法人化元年から所長として激動期を4年間過ごし、2度と得られぬ貴重な経験をさせていただきました。この間、多様な考え方をもつ方々と知り合いになれた事は貴重な財産です。皆様、素晴らしい方々でした。

法人化は余りにも急速にすすめられた為、研究所の仕組みは置き去られたままのスタートでした。最初は、少し努力をすれば、宇宙線研究所にとって必須の大型研究も推進できると思っておりましたが、法人化の実態が分かってくるにつれ、研究所では大型研究どころか教員も増やせないことが分かってきました。

最近ようやく、新たな仕組み作りの議論が進み、次期中期計画にむけ、何らかの形ができてくると思われまます。これが研究所にとって良い方向であることを願いたいと思います。

総長はじめ、理事・副学長、本部事務職員の方には、御迷惑もおかけしましたが、大変お世話になりました。また、柏事務部の方々はとても有能で、私は事務職員には恵まれたと思います。

これからは、神岡で研究に専念し、特に昨年からの建設が始まった宇宙暗黒物質の探索実験を推進してゆきたいと思っています。数年後に発見の報を発することができれば、研究者冥利につきまます。

前物性研究所長  
上田 和夫

再任をはさんで5年間の所長任期を終え、多少肩の荷が下りた気がしています。この間2004年4月には大学の法人化がスタートしました。佐々木前総長のもとでの法人化への準備と移行、小宮山総長の指導で進められたいくつかの新しい試みは、時代の変化に即応できる東京大学の柔軟性が発揮された一例であったと思います。広範な学問領域にわたる多様な研究科、研究所の存在がこの柔軟性の源泉であることを強く感じました。

物性研究所は昨年創立50周年を迎えました。設立以来、日本の物質科学の中核的研究所として歩んできた半世紀でした。全国共同利用研究所から国際共同利用研究所への脱皮を遂げつつあるのが現時点の姿と言うこととなります。所長在任期間中の物性研究所教職員の真摯な努力、東大全学のご支援、そして全国の物性コミュニティのご協力に感謝いたします。どうもありがとうございました。

環境安全本部



「環境報告書2007」が第11回環境コミュニケーション大賞「優秀賞（環境配慮促進法特定事業者賞）」を受賞

「東京大学環境報告書2007」が、第11回環境コミュニケーション大賞の「優秀賞（環境配慮促進法特定事業者賞）」を受賞しました。

「環境コミュニケーション大賞」は環境省が後援している事業で、企業の環境情報の開示と環境コミュニケーションを進めることを目的としており、今回は、「環境報告書部門」317件、「環境活動レポート部門」60件、「テレビ環境CM部門」33件の計410件の応募作品について審査され、「環境報告書部門」では本学の他、信州大学等合わせて4大学・1独立行政法人が表彰されました。

表彰式は平成20年3月6日（木）13時より東京・千代田区の日経ホールで開催されました。



「優秀賞（環境配慮促進法特定事業者賞）」の賞状を受け取る  
中西友子本部長（環境安全本部）



■「東京大学環境報告書2007」講評

データの記載が豊富である。環境負荷の多くをキャンパスごとに集計しており、イメージしやすい。面積原単位など、独自のデータを使ってわかりやすく記載している。報告書アンケートのフィードバックや知の創造に関しても豊富な記載がある。

目標管理について、アクションプランをもっと詳細に具体的に開示するなど工夫の余地がある。全体像の把握（マテリアルフロー）も大雑把であり、地域住民などとの協力や、取引先など外部のステークホルダーとの取組の記載がなく記載対象が大学単体に留まっているのは今後の課題といえよう。

環境安全本部



韓国の大学安全関係者が本学を視察

3月12日（水）、韓国の大学の安全管理担当教職員を中心とした韓国教育部教育施設災難共済会の一行26名が、本学における安全管理について視察に訪れた。韓国の大学で実験中に2名の死亡事故が発生したことなどにより、日本の大学における実験室安全管理の状況について調査するため視察団が派遣されたとのことである。

一行は、赤門から構内を徒歩で移動し、工学部五号館に向かった。環境安全本部の中西本部長の挨拶のあと、小山副本部長が本学の安全管理について説明をおこなった。中でも小宮山総長が先頭に立って安全パトロールを行う写真には興味を持って見入っていた。今回見学した他の大学と比べて、本学の安全管理はレベルが高いとの光栄なご意見をいただいた。さらに、工学系研究科土橋教授より日本の大学での安全関係の法令適用とその遵守状況についての説明、また、工学系等安全衛生管理室の活動紹介が中尾室長よりあった（写真）。この間、安全管理の法令や制度等について多くの質疑応答がなされた。



工学系等の安全管理体制を説明する中尾教授

その後、実験室等の見学へ向かった。工学部五号館の化学実験室では、化学薬品の管理状況や局所排気装置（ドラフトチャンバー）の設置状況などについて熱心な質問があった。また、トイレに設置されている緊急シャワーにも関心が高いようであった。続いて工学部八号館の機械工作室を視察した。安全靴や保護眼鏡などの保護具について、また、この工作室で独自に取り付けた旋盤の安全装置について熱心に見学した。意見交換の中で、事故後に制定された韓国の実験室安全環境法という法律に基づいた韓国の大学における安全管理、特に安全教育や保険、安全点検について説明いただいた。

最後は全員で記念撮影し（写真）、お互いに有意義な情報・意見交換をおこなうことができた。



訪問団一行と記念撮影

#### 本部学生支援グループ



UtoI（東京大学アウトリーチイニシアティブ）第1回研究会開催される

3月12日（水）に、創立130周年記念事業「学生企画コンテスト」で優秀賞企画となったUtoI（東京大学アウトリーチイニシアティブ）の第1回研究会が開催され、本学におけるアウトリーチ活動およびその振興に関心のある24名（11部局）の教職員・学生が参加した。近年、各部局では組織的なアウトリーチ活動を展開するようになったが、組織間の協力体制の構築やアウトリー

チ活動の手法の改善が課題となっており、本学学生である企画者3名（総合文化研究科博士課程3年林洋平さん、理学系研究科博士課程2年加村啓一郎さん、総合文化研究科修士課程2年住田朋久さん）により、①東京大学で行われるアウトリーチ活動の広報（webページ、ネットワーク作り）②同活動の受付、窓口業務（受け入れ審査、調整）③同活動の実行支援（スタッフの派遣、ノウハウの蓄積、改善）の取り組みを全学的に実現するための研究会を開催した。

横山広美准教授（理学系研究科広報室）及び辻宏道准教授（地震研究所広報室）からの事例紹介ののち、「本学におけるアウトリーチ活動の現状と課題」及び「UtoIに望むこととその実施」についての討論を行った。



理学系研究科における  
アウトリーチ活動紹介  
（横山広美准教授）



地震研究所における  
アウトリーチ活動紹介  
（辻宏道准教授）

二つの事例紹介に加え、参加者からも本学におけるアウトリーチ活動の実績が紹介され、現状における課題が示され、これからのUtoIの具体的な方針を決める上で有意義な研究会となった。



UtoI 第1回研究会

UtoIの取り組みについての問い合わせ先：本部学生支援グループ（内線22513）担当：岡田、渡邊、中世古

## 東大一イェール・イニシアティブ

日本資料研究ワークショップ、イェール大学内で開催される！

一般

3月26日(水)10時から17時にかけて、米国のイェール大学内で、東大一イェール・イニシアティブとイェール大学のカウンシル・オン・イースト・エイジアン・スタディーズの共催で、日本資料研究ワークショップが開催された。本ワークショップは昨年9月にイェール大学内に設置された全学の海外拠点の1つ、東大一イェール・イニシアティブがその目標として掲げる、イェール大学を基点とした日本研究の活性化、日本研究に携わる国際舞台で活躍できる若手研究者の育成という2つの事項を達成するための具体的な活動の端緒となるものであった。

ワークショップは、石上英一教授(史料編纂所・東大一イェール・イニシアティブ委員会副委員長)の挨拶からはじまり、イェール大学のエドワード・ケームズ教授によるイェール大学の日本研究の概要をテーマとした基調講演、続いてエレン・ハモンドイェール大学東アジア図書館長、中村治子同図書館司書、本学の近藤成一教授(史料編纂所)、エイイチ・イトウ米国議会図書館司書、本学の大学院生(及び日本学術振興会特別研究員)5名と合わせて計9名の発表が英語で行われた。会場には発表者のほか、本学とイェール大学の学生・教職員合わせて約40名の参加があり、盛況であった。

今回発表した学生にとっては海外で、日本研究資料を英語で発表するというのが実質初めてである者もあり、今回の経験は貴重な機会となったことだろう。今後彼らが今回の経験を生かし、国際舞台で日本研究の成果を発信していくことが期待される。

なお、本ワークショップは独立行政法人日本学術振興会の若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム(ITP)の経費支援を受けて実現したものである。

参考：東大一イェール・イニシアティブのホームページ  
[http://www.yale.edu/tyi/index\\_jp.html](http://www.yale.edu/tyi/index_jp.html)



ワークショップの様子：石上教授の挨拶

## 男女共同参画室・オフィス

国際シンポジウム「世界のスーパー女性研究者が語る—アカデミアの男女共同参画と学術の発展」を開催

一般

本シンポは3月28日(金)、文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業ならびに本学創立130周年記念事業として一条ホールで開催された。その趣旨は、欧米およびアジアの優れた女性研究者を招聘し、女性を中心に学生・若手研究者に対して学術の魅力と女性研究者の可能性を伝え、科学の裾野の拡大に資すること、また女性研究者支援および男女共同参画を推進する国内の大学・研究機関の参加をえて、日本の現状を整理し課題を明らかにすることである。

基調講演には、香港科学技術大学のナンシー・イップ教授(神経科学)、マサチューセッツ工科大学のハイディ・ネップ教授(流体力学)、デュースブルグ・エッセン大学のカレン・シャリア教授(比較社会学)、本学総合文化研究科の黒田玲子教授(生物物理化学)が登壇した。また、本学男女共同参画オフィスの都河明子教授、東北大学医学系研究科の大隅典子教授、産業技術総合研究所男女共同参画室総括主幹の川崎一則氏、名古屋大学工学研究科の美宅成樹教授から課題提起が行われた。



発表に耳を傾ける基調講演者

来賓に森山眞弓衆議院議員、文科省科学技術・学術政策局長の森口泰孝氏、内閣府男女共同参画局長の板東久美子氏を迎え、学内外から55人の学生院生を含む220人が参加した。小宮山宏総長は、本学が「世界の知の頂点」を目指す上で多様性が不可欠であり、男女共同参画はその鍵であると挨拶した。基調講演では、ロールモデルやメンター(相談し助言を得られる先輩)の重要性、師弟や先輩以上にピア(同輩)のネットワークを大切にする必要性などが指摘された。講演者および板東局長によるパネルディスカッションを通じて、本来女性に向く／向かないという学問分野はなく、好きなことに打ち込むことを職業にできるのが研究者であるなど、学術の発展を展望するメッセージが発信された。



パネル・ディスカッションの様子

### 海洋アライアンス

総合海洋基盤（日本財団）プログラムが発足！

一般

本学は、日本財団からの支援を受け、わが国が世界をリードし、真の海洋国家に歩み出すための総合海洋基盤（日本財団）プログラムを発足させた。

同プログラムは全学機構組織・海洋アライアンス（浦環機構長）の中に置かれるもので、海洋に関する国内最大規模の教育プログラムになる。このなかで分野横断型の教育や融合的政策の研究をはじめ、シンポジウムやセミナーを開催し、海洋基本法を支える研究基盤の構築とその理念の具現化を担う人材の育成をめざす。

4月2日（水）に、小宮山宏総長と日本財団笹川陽平会長は、本学が日本財団からの支援を得て同プログラムを展開していく合意書を取り交わした。調印式の後に行われた記者会見には一般紙や業界紙が集まり熱心な質問が相次ぎ、本学の新しい取組みへの関心の高さをうかがわせた。



共同展開に合意した小宮山総長と笹川会長



熱心な質問の相次いだ記者会見場



記者会見終了後にも記者の質問に答える浦機構長

### 本部研究推進グループ

独立行政法人日本原子力研究開発機構（JAEA）と連携協力の推進に係る協定書調印式が行われる

一般

4月8日（火）13時から本郷キャンパス本部棟中会議室において、本学と独立行政法人日本原子力研究開発機構（JAEA）との間で、連携協力の推進に係る協定書調印式が行われた。

本学からは小宮山総長ほか平尾副学長、保立工学系研究科長、家物性研究所長が、日本原子力研究開発機構（JAEA）からは岡崎理事長ほか中島理事、安濃田産学連携推進部長、杉本原子力研修センター長らが出席し、調印式に臨んだ。

既に、両機関の間では、実質的に多くの教育人材の交流、大学共同利用の他、共同研究、受託研究が行われているが、この度の連携協力協定の締結に基づき、これらも包括した研究施設、研究成果、人材等の連携活用によって、広範な原子力分野における教育者、技術者、行政官のトップリーダーを養成することが期待される。



署名した協定書を提示する小宮山総長（左）と日本原子力研究開発機構（JAEA）岡崎理事長（右）

## 特集の記事を執筆してみませんか？

学内広報では巻頭特集の記事テーマとその執筆部署を募集しています。皆さんの部署でも、ぜひ特集の記事を執筆してみませんか？

### 1. 制作方法

#### ① テーマの選定

全学の教職員を読者対象とするテーマを選定。まずは、本部広報グループに気軽にご相談ください。

#### ② 内容・構成の決定

執筆部署と学内広報編集スタッフ（以下、編集スタッフ）の打ち合わせでページ内容を決定します。

#### ③ 原稿の執筆

決定した構成に合わせて執筆部署に原稿を書いていただきます。字数等は編集スタッフが提示します。

#### ④ ビジュアル要素の提供

写真・図・イラストを提供していただきます。

#### ⑤ デザイン

執筆部署または編集スタッフがページデザインを作ります。

#### ⑥ 校正

文字校正を行なっていただきます。

#### ⑦ 完成

刷り上がった学内広報は執筆部署に多めに配布します。

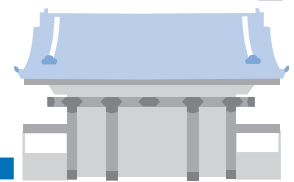
### 2. 締切日

期日を申しますので、ご協力をお願いします。

### 3. 問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム  
TEL：03-3811-3393 内線22031  
E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

## 部局 ニュース



大学院情報学環・学際情報学府

情報学環に総合防災情報研究センター（CIDIR）を設置

平成20年度、情報学環附属総合防災情報研究センターが発足した。本センターは、情報学環、地震研究所、生産研究所の三部局が連携する文理融合型の総合的な防災研究機関で、「情報」の概念を核とし、本学内外の防災関係機関とも連携を図り、防災に関する知の結節点として機能する新たな研究機関を目指している。日本列島は地震学的な活動期に入り、地球温暖化の影響により巨大台風が増加すると言われている。このような大規模な自然災害の対策として災害危険度の判定や周知、事前の予測、災害からの避難、復旧復興の体制作りなど「情報」のもつ役割は重要である。「情報」を核に「減災」をめざす、これが総合防災情報研究センターのミッション。災害情報学の第一人者であった故廣井脩教授は、生前、総合的な防災研究の必要性を強く訴えておられた。その思いや業績も引き継いでいきたい。場所は廣井研があった情報学環の10F。

また、3月12日（水）に、生産技術研究所コンベンションホールにおいて、センターの設立準備シンポジウムが開催された。冒頭、吉見俊哉情報学環長、大久保修平地震研究所長、前田正史生産技術研究所長からの挨拶、前半の講演会では京都大学防災研究所の河田恵昭教授、センター長の田中淳教授から防災研究の今後の展望などについて講演が行われた。後半のパネルディスカッションでは、NHK解説委員の山崎登さんを座長に、内閣府の池内幸司参事官、地震研の額額一起教授、生研の目黒公郎教授、センターの鷹野澄教授、河田恵昭教授、田中淳教授をパネリストに、首都直下地震に備えた災害情報のあり方やセンターへの期待などについて、会場とのやりとりも交えた熱心な議論がなされた。定員200名の会場がほぼ満員になる盛況で、センターに対する熱い期待を感じた。



吉見学環長 開会挨拶





パネルディスカッション  
「首都直下地震に備えた災害情報のあり方」会場との質疑応答



ほぼ満員の会場

**大学院総合文化研究科・教養学部**  
**国際シンポジウム「初年次教育の可能性」開催される**

3月12日（水）、文部科学省平成19年度「大学教育の国際化推進プログラム（海外先進教育実践支援）」の取組みの一環として、国際シンポジウム「初年次教育の可能性」が本学駒場キャンパス学際交流ホールで開催された。

本学の初年次教育に対する取組みは、「大学教育の国際化推進プログラム」に、18年度に続いて2年連続で採択されている。19年度は、前年度に行われた教職員による海外研修の成果を受け、それをいかに本学にふさわしい形で導入するかということに重点を置いた取組みを行ってきた。今回のシンポジウムは、その成果を報告し、学内外の関係者との議論を深める目的で開催された。

シンポジウムでは、カリフォルニア大学ロサンゼルス校名誉教授、アレキサンダー・アスティン氏によって「よりよい初年次教育実現のために」と題する基調講演が行われた。この講演では、米国で行われている様々な調査研究の結果をふまえた初年次教育の充実化について、議論が展開された。



アレキサンダー・アスティン UCLA 名誉教授

この講演を受け、初年次教育のプログラムに教職員がいかなる役割を果たすべきかについて、教養教育開発機構の山本泰教授をモデレーターとしてパネルディスカッションが行われた。パネリストとして、アスティン教授および大学院総合文化研究科副研究科長・教養学部副学部長の長谷川寿一教授、教養学部等事務部の新妻智子教務課長、教養学部広域科学科4年の八木宏晃氏のほか、学外からのゲストとして足立寛 立教大学総長室調査役を迎え、活発な議論が行われた。

マイクをフロアに開放しての質疑応答も途切れることなく、非常に盛況な会となった。



パネルディスカッションの様子

**教養学部・情報学環・大学総合教育研究センター**  
**現代GP国際シンポジウム開催される**

教養学部、情報学環、大学総合教育研究センターは、文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）の取組みの一つとして、3月17日（月）に本学駒場キャンパス18号館ホールにて、国際シンポジウム「ICTを活用したアクティブラーニング」を開催した。

現代GPでは、ICTを活用したアクティブラーニングによる新たな教養教育の授業モデルを構築している。

今回のシンポジウムは、どのような教育環境（特に

ICT (Information and Communication Technology) 技術の利用によって実現される) によって、学生の能動的な学習 (アクティブラーニング) を活性化することができるのが議論された。



パネルディスカッションの様子

まず、事例報告として、Peter Dourmashkin シニアレクチャー (マサチューセッツ工科大学) はマサチューセッツ工科大学の学部学生向けの物理の教育のための教室である TEAL (Technology Enabled Active Learning) を紹介しながら、一斉講義とアクティブラーニングの質的な違いを語った。Daniel Gilbert アカデミックテクノロジスペシャリスト (スタンフォード大学) はスタンフォード大学の Wallenberg Hall を紹介し、学生が集まり議論する場の重要性を指摘した。そして美馬のゆり教授 (公立はこだて未来大学) は公立はこだて未来大学の事例とともに江戸時代以来続く日本の文化について紹介し、その国の文化に特化した学習環境をデザインしていく必要性を説いた。

続いて、本学の事例が報告された。まず教養教育開発機構の Tom Gally 特任准教授が KALS (駒場アクティブラーニングスタジオ) で行っている Critical Writing Program の実践について報告し、大学院情報学環の山内祐平准教授が本郷キャンパス赤門横に完成した情報学環・福武ホールの学習空間について解説した。最後に、アクティブラーニングを支援するためのソフトウェアとしてマイクロソフト先進教育環境寄付研究部門で開発された MEET Video Explorer と eJournal Plus について大学総合教育研究センターの望月俊男客員准教授が紹介した。

その後、総合文化研究科の永田敬教授の司会のもとでパネルディスカッションが行われた。始めに「アクティブラーニングにおいて ICT は必要なのか?」という問いに対して、ICT が先に来るのではなく、教育を改善したいという思いが先にあるべきもので、ICT は手段の一つであるというような議論がされた。次に「FD (ファカルティ・デベロップメント) をどのようにすべきか?」という問いに対して、FD というような受け身のものではなく、先生が教育について話し合う機会 (フォーマルなものだけでなくインフォーマルなものも含めて) を作る


工夫が大切であるというような議論がされた。

本シンポジウムには 183 名の参加がありほぼ満席であった。質疑も活発であり、パネルディスカッションでの議題を募集したところ、議論しきれないほどの議題が集まり、関心の高さが感じられた。また、シンポジウム後の KALS の見学会の eJournal Plus や PRS (Personal Response System) のデモにも多数の参加があった。このように有意義なシンポジウムを開催できたことを、参加された方および協力いただいた方々に感謝したい。

なお、本シンポジウムの講演の映像は東大 TV にて配信する予定である。また、現代 GP では、2008 年夏にサマーインスティテュートを開催して、アクティブラーニングの授業モデルに触れて頂く機会を設ける予定である。詳細については現代 GP のホームページをご覧ください。

●現代 GP ホームページ

<http://www.komed.c.u-tokyo.ac.jp/gendai/>

 部局	<b>国際・産学共同研究センター</b> <b>CCR 最終シンポジウム「東京大学の産学連携と CCR の果たした役割」開催される</b>
---	--

3月17日(月)13時から駒場Ⅱキャンパス An 棟において、国際・産学共同研究センター (CCR) 廃止に伴う最終シンポジウムが開催された。

CCR は 1996 年に設立され、本学研究者データベース構築、産学連携人材を育成する研修制度、外国人教員を含む企業との産学連携に従事するプロジェクトの展開など、ユニークかつ先進的な取り組みを通じて多くの企業との連携を強化し、地域の産学連携人材の育成に貢献してきた。このことは学内外から高く評価されてきた。

この間、政府においては大学の教育、研究に続く第三の責務として産学連携が位置づけられ、本学においても産学連携の全学的取組みを進めるため、2004 年 4 月に産学連携本部が設置された。これを受けて、CCR が従来実施してきたデータベース事業や研修制度などは本部に移管し、プロジェクト運営等は引き続き駒場キャンパスにおける連携組織で運営することが適切と判断し、これに伴い CCR は廃止することとしたものである。



小宮山総長による特別講演

最終シンポジウム当日の参加者は、一般の聴講者 140 名を含めた約 230 名という盛況の中、渡部俊也センター長の挨拶に始まり、小宮山宏総長による特別講演『「課題先進国」日本』のほか、CCR の活動報告、藤田隆史産学連携本部長による事業承継と本学の産学連携推進体制の説明、CCR 関係者 6 名によるパネルディスカッション、前田正史・生産技術研究所長と宮野健次郎先端科学技術研究センター所長の挨拶が行われた。特に産学官のパネルによるディスカッション「CCR の果たした役割とその DNA」は、「CCR の残した DNA」をキーワードとした白熱の議論が展開され、参加者にも好評であった。出席者には「何を得たか、何を手渡せるか。CCR12 年の軌跡」の記念本も配布された。



CCR の DNA を議論するパネルディスカッション

シンポジウムに引き続き、約 150 名の出席者を得て「これからの東京大学の産学連携を考える」懇談会が開催され、西尾茂文理事・副学長、安井至初代センター長からの挨拶が行われた。懇談会の最後には、CCR が連携した企業や、地域自治体から派遣された研修生、企業からの客員教授、外国人客員研究員の各代表者に対して、渡部センター長から一人ずつ感謝状が贈呈され、本学の産学連携について議論した CCR の熱い最終シンポジウムは閉会を迎えた。



盛会の懇談会でのひとコマ



3月28日(金)13時より、入学予定者160人余を迎えて、本学部附属教養教育開発機構主催の新生歓迎イベント「FRESH START@駒場」が駒場キャンパスで開催された。

昨年に続いて2年目を迎える本イベントは、新入生が高校から大学への移行をよりスムーズに行えるようにと企画されたオリエンテーションであると同時に、教職員と在学生が協力し合って企画・実施を行うものであることから、教職員と学生の連携の新たなモデルとしても意義深いものであると言える。

イベントの第一部は、本学部18号館ホールで行われた。小宮山宏総長からのビデオメッセージ、小島憲道教養学部長からの歓迎のことばの後、浅島誠理事・副学長によって「学びのすすめ」と題する特別講演が行われた。ご自身の専門分野にひきつけて具体的な例を示しながら、「大学で学ぶ」ということはいかなることであるかを説く講演は、新入生にとって大きな刺激となったようである。



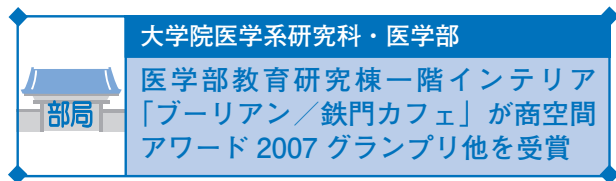
浅島誠理事・副学長による特別講演

第二部では、入学予定者を10名前後ずつ16のグループに分け、それぞれのグループに本学部教職員と各学部から参加した学生が加わり、グループごとに趣向を凝らしたミニイベントを行った。駒場キャンパス内外のツアーや研究室訪問、ゼミを意識したディスカッションなどを通じて、教職員や先輩たちと交流を深めることができた。参加した入学予定者たちからは、不安を期待に変えることができたなどの声が寄せられた。



グループでのディスカッションの様子

最後はふたたび18号館ホールに集合し、運動会応援部による力強い応援パフォーマンスでイベントは締めくくられた。



本学大学院医学系研究科・医学部（清水孝雄研究科長・学部長）では、医学部教育研究棟（2005年竣工）の1階エントランス改修・カフェ新営工事を、同窓会組織＝鉄門倶楽部の援助を得て進めてまいりましたが、このたび医学系研究科内のエントランス制作委員会（宮下保司新棟建築委員長、田中庸介制作委員長）の監修により竣工したカフェインテリア「ブーリアン／鉄門カフェ」（設計＋施工監理＝トラフ建築設計事務所）が、社団法人日本商環境設計家協会（JCD）主催の2007年度JCDデザインアワード・金賞、ならびに、日経アーキテクチャー主催の商空間アワード2007・グランプリに輝きました。

医学部教育研究棟は本郷キャンパスの南端に位置する地上14階地下2階の建物であり、世界のバイオサイエンスをリードする本学医学部の英知を結集したリサーチセンターとして、トップクラスの研究グループ群により24時間体制で基礎医学の先端的研究が遂行されています。この知の興奮を象徴するエントランスの空間デザインは、本学医学部の新しい顔のひとつとなります。また「鉄門カフェ」では、オリジナル焙煎の「鉄門ブレンド」や手作りおにぎりを販売し、研究者・学生に憩いの場を提供しています。

ぜひご高覧を賜りますようご案内申し上げます。



医学部教育研究棟位置



医学部教育研究棟1階「ブーリアン／鉄門カフェ」  
（写真撮影：阿野太一）

## ニュースページ、 インフォメーションページ への記事提出要領

「学内広報」は皆さんから送っていただく記事で作られています。下記の提出要領により、積極的に学内の情報をお寄せください。

### 1. 提出方法

記事は、各部署の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとしてデータで送付すること。

### 2. 締切日

本学HPの右下にある「学内広報アイコン」をクリックして発行スケジュールをご確認ください。

### 3. 提出の際の留意事項

#### (1) 文字数

文字数は記事1件につき800字を目安とし、内容により増減は可とする。

#### (2) 写真

- ① 写真を掲載する場合はキャプション（説明文）を25文字以内で添えること。
- ② 写真を電子データで提出する場合、Wordファイルなどに貼り付けず、jpeg等の形式による元の画像ファイルを送付すること。
- ③ 写真は電子データがない場合、プリントのものも掲載可とする。

#### (3) 書式

- ① 原稿は1行25文字の書式で作成すること（ただし、大きな図表などが含まれる場合は、この限りではない）。
- ② 原稿のはじめに担当部署名と記事タイトルを記載すること。
- ③ 記事タイトルは極力簡潔でわかりやすいものとする。

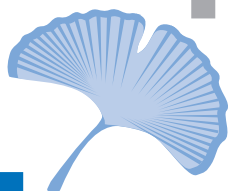
#### (4) 文章表現のきまり

- ① 句読点は「、」「。」を用いること（「，」「。」は用いない）。
- ② 時間は24時間表記とし、日付には括弧書きで曜日をつけること。
- ③ この他、特に表記する必要のない「平成●年」は削除する、特に支障がない限り「東京大学」は「本学」とする等、表記統一のための修正を編集段階で行う。

※編集スケジュールの都合上、原則として校正はできません。基本的にはいただいた原稿がそのまま掲載されますので、内容に間違いのないよう、十分ご注意ください。

### 4. 問い合わせ先・提出先

本部広報グループ 広報企画チーム  
TEL：03-3811-3393 内線22031  
E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



平成20年度本学入学者選抜の第2次学力試験（前期日程）の合格者3,000人の受験番号及び第2次学力試験（後期日程）の第1段階選抜合格者の大学入試センター試験試験場コード・受験番号が3月10日（月）12時30分頃、本郷構内で掲示により発表された。また、併せて、合格者の科類別成績（最高点・最低点・平均点）も発表された。なお、各科類の合格者数等は次のとおりである。

#### 平成20年度第2次学力試験（前期日程）合格者数等

科 類	募集人員	合格者数	最高点	最低点	平均点
文科一類	401	401	438.111	347.478	371.815
文科二類	353	354	418.678	341.156	361.096
文科三類	469	479	416.578	334.844	353.621
理科一類	1,108	1,129	426.456	314.589	343.287
理科二類	532	547	417.744	309.700	334.624
理科三類	90	90	466.844	377.856	398.699
合 計	2,953	3,000			

#### 平成20年度第2次学力試験（後期日程）第1段階選抜合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	倍 率	第1段階選抜			合格者成績			
				合格者数	不合格者数		最高点	最低点	平均点	
					本学前期日程合格による者	左記以外の者				計
全科類 (理科三類を除く)	100	3,485	34.9 (19.1)	513	1,579	1,393	2,972	790	721	735.69
合 計	100	3,485	34.9 (19.1)	513	1,579	1,393	2,972			

注：倍率欄の（ ）内は本学前期日程試験合格者を除いた倍率

**本部入試グループ**  
**第2次学力試験（後期日程）、外国学校卒業学生特別選考の合格者発表**

平成20年度本学入学者選抜の第2次学力試験（後期日程）の合格者100人及び外国学校卒業学生特別選考合

格者第1種（外国人であって日本国の永住許可を得ていない者）の合格者12人、第2種（日本人及び第1種以外の外国人）の合格者22人の受験番号が、3月22日（土）12時30分頃に、本郷構内で掲示により発表された。また、併せて、合格者の成績（最高点・最低点・平均点）も発表された。

なお、各入試の合格者数等は、次のとおりである。

**平成20年度第2次学力試験（前期日程）募集人員・合格者数等**

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	合格者科類別成績		
						最高点	最低点	平均点
文科一類	401	1,342	1,205	1,199	401	438.111	347.478	371.815
文科二類	353	1,320	1,074	1,071	354	418.678	341.156	361.096
文科三類	469	1,692	1,409	1,406	479	416.578	334.844	353.621
理科一類	1,108	3,045	2,772	2,763	1,129	426.456	314.589	343.287
理科二類	532	2,266	1,869	1,859	547	417.744	309.700	334.624
理科三類	90	418	360	355	90	466.844	377.856	398.699
合 計	2,953	10,083	8,689	8,653	3,000			

（注）外国学校卒業学生特別選考を除く。

**平成20年度第2次学力試験（後期日程）募集人員・合格者数等**

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	合格者成績		
						最高点	最低点	平均点
全科類 （理科三類除く）	100	3,485	513	413	100	220	180	192.24
合 計	100	3,485	513	413	100			

（注）外国学校卒業学生特別選考を除く。

**平成20年度外国学校卒業学生特別選考志願者数・合格者数等**

科 類	区分 種別	志願者数	第1次選考合格者数	第2次選考 受験者数	第2次選考 合格者数
	第2種	28	16	15	8
文科二類	第1種	30	8	8	4
	第2種	24	8	7	4
文科三類	第1種	12	4	3	1
	第2種	23	13	11	4
理科一類	第1種	25	10	9	4
	第2種	16	12	10	4
理科二類	第1種	15	5	4	3
	第2種	11	8	6	2
理科三類	第1種	1	0	0	0
	第2種	5	4	3	0
合 計	第1種	87	29	26	12
	第2種	107	61	52	22

なお、過去3年間の入学志願者数及び合格者数の推移、高校卒業年別の合格比率、出身校所在地別合格者数及び比率は次のとおりである。

**入学志願者数及び合格者数の推移**

	平成20年度						平成19年度						平成18年度					
	志願者		合格者		計		志願者		合格者		計		志願者		合格者		計	
	前期	後期	前期	後期			前期	後期	前期	後期			前期	後期	前期	後期		
文科一類	1,342		401		401	1,502	791	2,293	373	42	415	1,549	923	2,472	373	43	416	
文科二類	1,320		354		354	1,065	666	1,731	328	38	366	1,099	672	1,771	328	38	366	
文科三類	1,692		479		479	1,597	1,064	2,661	434	54	488	1,521	981	2,502	435	54	489	
理科一類	3,045		1,129		1,129	3,012	2,341	5,353	1,045	125	1,170	2,705	2,084	4,789	1,045	125	1,170	
理科二類	2,266		547		547	1,946	637	2,583	508	60	568	2,170	639	2,809	507	62	569	
理科三類	418		90		90	410	153	563	80	10	90	433	175	608	80	10	90	
全科類		3,485			100													
合 計	10,083	3,485	13,568	3,000	100	9,532	5,652	15,184	2,768	329	3,097	9,477	5,474	14,951	2,768	332	3,100	

（注）外国学校卒業学生特別選考を除く。

## 高校卒業年別の合格率

科 類	区 分	平 成 20 年 度			平 成 19 年 度			平 成 18 年 度		
		前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計
文科一類	現 役	68.3 %			65.7 %	59.5 %	65.0 %	69.4 %	48.8 %	67.3 %
	1 浪	28.9			31.9	38.0	32.5	27.3	32.6	27.9
	2 浪	2.0			1.6	2.4	1.7	2.4	9.3	3.1
	3浪以上等	0.8			0.8	0.1	0.8	0.9	9.3	1.7
文科二類	現 役	62.7			61.6	65.8	62.0	66.5	57.9	65.6
	1 浪	34.5			35.0	31.6	34.7	31.4	36.8	32.0
	2 浪	2.3			2.4	2.6	2.5	1.2	0.0	1.1
	3浪以上等	0.5			1.0	0.0	0.8	0.9	5.3	1.3
文科三類	現 役	58.9			65.9	61.1	65.3	65.3	74.1	66.3
	1 浪	37.4			29.3	25.9	28.9	31.5	11.1	29.2
	2 浪	3.1			3.2	5.5	3.5	1.8	1.9	1.8
	3浪以上等	0.6			1.6	7.5	2.3	1.4	12.9	2.7
理科一類	現 役	70.6			74.9	72.0	74.6	74.8	72.8	74.6
	1 浪	27.2			23.8	17.6	23.2	23.3	24.0	23.4
	2 浪	1.5			0.7	6.4	1.3	1.1	2.4	1.3
	3浪以上等	0.7			0.6	4.0	0.9	0.8	0.8	0.7
理科二類	現 役	55.8			57.9	53.3	57.4	67.5	54.8	66.1
	1 浪	37.5			37.6	35.0	37.3	27.6	27.4	27.6
	2 浪	4.2			2.6	6.7	3.0	2.2	4.8	2.5
	3浪以上等	2.5			1.9	5.0	2.3	2.7	13.0	3.8
理科三類	現 役	61.1			68.8	30.0	64.4	71.3	30.0	66.7
	1 浪	25.6			21.3	30.0	22.2	22.5	40.0	24.4
	2 浪	6.7			3.8	20.0	5.6	2.5	20.0	4.4
	3浪以上等	6.6			6.1	20.0	7.8	3.7	10.0	4.5
全 科 類	現 役		75.0		68.8	30.0	64.4	71.3	30.0	66.7
	1 浪		18.0		21.3	30.0	22.2	22.5	40.0	24.4
	2 浪		2.0		3.8	20.0	5.6	2.5	20.0	4.4
	3浪以上等		5.0		6.1	20.0	7.8	3.7	10.0	4.5
合 計	現 役	64.5	75.0	64.8	67.4	63.2	66.9	70.2	63.6	69.5
	1 浪	31.7	18.0	31.3	29.6	26.7	29.3	26.9	25.6	26.7
	2 浪	2.6	2.0	2.5	1.8	5.8	2.3	1.7	3.9	1.9
	3浪以上等	1.2	5.0	1.4	1.2	4.3	1.5	1.2	6.9	1.9

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

## 出身校所在地別合格者数及び比率

	平 成 20 年 度						平 成 19 年 度						平 成 18 年 度					
	前期		後期		計		前期		後期		計		前期		後期		計	
	合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %
東 京	889	29.6	34	34.0	923	29.8	926	33.5	115	35.0	1,041	33.6	847	30.6	130	39.2	977	31.5
北 海 道	58	1.9	4	4.0	62	2.0	42	1.5	8	2.4	50	1.6	38	1.4	6	1.8	44	1.4
東 北	91	3.0	3	3.0	94	3.0	90	3.2	11	3.3	101	3.3	83	3.0	12	3.6	95	3.1
関 東 東京を除く	554	18.5	13	13.0	567	18.3	501	18.1	64	19.5	565	18.2	464	16.7	75	22.6	539	17.4
北 陸	132	4.4	5	5.0	137	4.4	103	3.7	4	1.2	107	3.5	126	4.6	5	1.5	131	4.2
中 部	317	10.6	9	9.0	326	10.5	240	8.7	28	8.5	268	8.7	308	11.1	26	7.8	334	10.8
近 畿	441	14.7	21	21.0	462	14.9	398	14.4	52	15.8	450	14.5	384	13.9	41	12.3	425	13.7
中 国	150	5.0	5	5.0	155	5.0	120	4.3	11	3.3	131	4.2	158	5.7	10	3.0	168	5.4
四 国	95	3.2			95	3.1	85	3.1	12	3.7	97	3.1	80	2.9	3	0.9	83	2.7
九 州 沖縄を含む	265	8.8	6	6.0	271	8.7	255	9.2	22	6.7	277	9.0	272	9.8	17	5.2	289	9.3
検 定 その他	8	0.3			8	0.3	8	0.3	2	0.6	10	0.3	8	0.3	7	2.1	15	0.5
合 計	3,000	100.0	100	100.0	3,100	100.0	2,768	100.0	329	100.0	3,097	100.0	2,768	100.0	332	100.0	3,100	100.0

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

## INTERVIEW

東京大学総括プロジェクト機構  
ジェロントロジー寄付研究部門  
秋山 弘子 特任教授

## 総長室総括委員会とは？

総長室の下に設置された、室、本部、機構といった組織をまとめる、本部における教授会のような役割を担っています。  
総長室総括委員会HP：<http://cirp.u-tokyo.ac.jp>

今月ご紹介するのは、2006年4月に設置されました総括プロジェクト機構の寄付研究部門の1つ、「ジェロントロジー寄付研究部門」の秋山弘子先生です。ジェロントロジーとは、高齢者や高齢社会の諸問題を解決するために生まれた学際的学問です。2050年には1/3が65歳以上という超高齢社会を迎える日本において、ジェロントロジーはどの専門領域においても非常に有用な学問となっています。しかしその一方で、若い世代にはまだ馴染みが薄いかもかもしれません。そこで、本研究部門では、将来を担う若い世代に向けて、今年度より国内初の学部横断型教育プログラム「ジェロントロジー」を設置し、高齢者や高齢社会の諸問題に関する学際的な知識を有する学生の育成を開始します！

## Q. 発足の経緯と活動内容は？

**秋山** 現在の社会システムは人口がピラミッド型の時代につくられました。今や日本は世界の最長寿国となりましたが、なお急速に高齢化しており、超高齢社会に即した社会システムをつくるのが急務となっています。一方で、日本におけるジェロントロジーの学問分野は欧米に比べて非常に遅れています。その原因は、ジェロントロジーが、専門分化した単独分野の学問だけでは対応が難しい複雑な問題を扱うにもかかわらず、大学の構造や組織が部局の縦割りになっているところにありました。法人化後、大学に限定的な裁量権が認められ、総長室の下に分野横断的な研究分野を扱う総括プロジェクト機構が設置されました。そこに3つの企業から寄附を得て、ジェロントロジー寄付研究部門を立ち上げることができました。本学で高齢社会の課題を学際的に協力して研究することが可能となったわけです。



初年度はジェロントロジー・ライブラリーや高齢者の被験者プールをつくるなど、研究のインフラ整備に努力しました。同時に様々な学問分野における最先端の高齢者研究を紹介するセミナーを行ってきました。同じ分野にはない発想や貴重な意見が聞くことができますし、今後の研究において協力しておこなうきっかけの場となったり、とても有意義なセミナーとなっています。また、学内の若手研究者から高齢社会の課題研究を公募し、小額ですが研究費を助成しています。

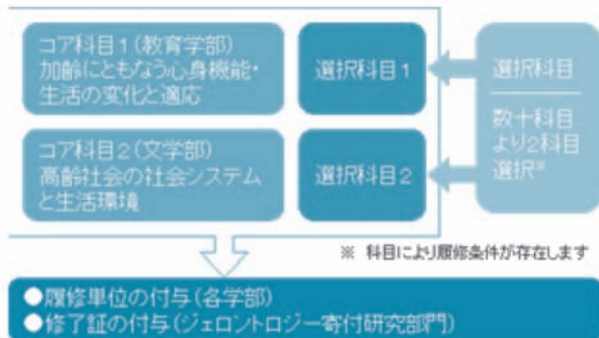
## Q. どのような学内のネットワークを形成？

**秋山** 初めは半年かけて学内のジェロントロジーに関連する先生方を発掘していきました。学内10学部のすべてにいらっしゃいました。学際的研究は方々で推奨されていますが、立ち上げるのは簡単ではありません。最初は、学問の見えない壁が立ちばかり、なかなか上手く連携が進みません。合宿をして忌憚なく意見を交換し、研究課題の設定をしました。まず地域都市の高齢化問題に取り組む比較的小規模なプロジェクトでスタートして、徐々に大学が一丸として取り組むような大きなプロジェクトに展開していこうとしています。最近では、本年4月に施行される後期高齢者医療制度に関わる学際的な研究を始めようとしています。この制度は社会システム自体を変えないと成功しません。医療費抑制の面ばかりが強調されていますが、高齢者のQOLの維持・向上の立場から科学的エビデンスに基づく提言ができればよいと考えています。本格的なジェロントロジー研究を進める体制ができあがってきたと思います。

## Q. 学部横断型教育プログラム「ジェロントロジー」とは？

**秋山** 本学の卒業生は官庁、産業界、学術分野の第一線で活躍します。現在、これらすべての職業分野において高齢社会への対応は重要課題であり、それを担う人材が求められています。そのような社会の強い要請に応え、このプログラムは考案されました。

学部横断型教育プログラム「ジェロントロジー」は、学内10学部すべての学生を対象としています。学部3～4年生（修士課程大学院生も一部履修可能）が対象で、参加者は2つのコア科目に加えて、学内全10学部に存在する約50の高齢者関連の選択科目から各自の専門領域に近い科目を最低2科目選択し履修します。計4科目（8単位分）の単位を取得した学生に対して、ジェロントロジー寄付研究部門より修了証を付与します。このプログラムを修了すると、工学や経済学などの学士に加え、ジェロントロジーの基礎知識を身につけて卒業することが可能になります。プログラムの参加方法等詳細につきましては、下記関連ホームページをご覧ください。また、教養学部1～2年生を対象に、全学自由研究ゼミナール（夏学期）も開講します。学生にとって高齢者の問題は、まだ先のことで切実ではないかもしれませんが、ジェロントロジーは将来どのような職業を選択しても役に立ちます。講義もいろいろな学部の先生が担当します。ぜひ大勢の学生さんに参加していただきたいと思います。



## Q. これからのジェロントロジーは？

**秋山** まずは、現在の一寄附研究部門から独立した機構などの組織にすることが当面の目標ですね。そして、将来的には全学的なセンターや研究所のようなものにしていきたいと考えています。高齢者研究教育を行うにあたって、一部局の中だけで行うのではなく、学際的な大きなプロジェクトの中で若い人々を養成していく、そうすると若い人々の間でもいろいろなネットワークが出来ますし、その際に異なる方法論や発想、理論について勉強する機会も生まれます。大学の中にそういう場を作っていきたい、と思っています。

また、学内に留まらず、外にも広く門戸を開き、他大学や研究機関、企業、行政、地域で活動している方々とも意見交換し、共に活動していきたいと考えています。さらに、国際的にも積極的にネットワークを築いて、グローバルな研究・教育活動を展開していくことを志しています。（インタビュー：手塚・山縣）

●関連ホームページ●  
ジェロントロジー寄付研究部門 <http://www.gerontology.jp>

問い合わせ先：本部研究機構等支援グループ（内線21387）





先月末で、2004年から行ってきた東大基金の創立130周年キャンペーンが終了いたしました。たくさんのご協力、ご支援をいただき誠にありがとうございました。右下の基金最新情報にもあるように、みなさまのお陰で無事目標額の130億円を達成することが出来ました！130周年キャンペーンが終了しても基金活動は今後も継続していきます！これからも、どうぞ末永くよろしく願いいたします。

今回は、キャンペーンを終えて新たな展開を迎える基金を、Q & A方式で分かりやすく解説していきたいと思います。

## 130億円から500億円基金へ

### Q. そもそも、130周年キャンペーンってどんなもの？

A. 130周年キャンペーンは、2004年～2007年度まで東大基金が行っていたキャンペーンです。東大基金は、いままでのような周年事業ではなく、運用益を出すための基金として設立されたのですが、130周年の2007年度末には130億円を積み上げる！というのがキャンペーンの目標でした。

例えば、100周年の周年事業の時には、いただいた寄附で御殿下グラウンドの整備や、山上会館の新築など、寄附を活用して記念事業を行いました。それに対して、今回の130周年キャンペーンは必要な所に戦略的に投資できる資金の確保を目的とした、運用益を出すための基金ですので、周年事業のようにみなさまからの寄附をすぐに使うという性質のものではありません。

### Q. 130周年キャンペーンが終了、ということは東大基金も終了？

A. いいえ、基金は今後も永く継続していきます！

みなさまのご協力のお陰で無事130億円が達成できました。今後はこの基金を運用して運用益を出しつつ、基金自体ももっと大きくしていき、より大きな基金、大きな運用益を目指します。

タイトルにもありますが、小宮山総長は任期中に500億円の基金を目指すとおっしゃっておられます。これは130億の東大基金の他に前回取り上げた信託基金なども含めた目標なのですが、今後はまずこの500億円の達成を目標に、基金は活動を続けて行きます。



### Q. 今までの収支や今後基金を何に使うのか知りたいんだけど？

A. 130周年キャンペーンを終え、現在具体的な数字などをまとめた報告書を作成しております。ご寄附いただいたみなさまには、7月頃お手元に報告書をお送りする予定ですので楽しみに！

また、5月21日(水)の夕方より、安田講堂にて教職員対象の基金報告会を行います。ご寄附いただいた方も、まだご寄附いただけていない方も、いらしていただければ、直接総長から基金について聞くことが出来ます！当日は他にも色々イベントを考えておりますので、また追って詳細をご案内させていただきます。

#### ○基金からのご案内○

兼ねてよりみなさまからのご要望が多かった、給与からの一部控除による寄附（給与天引き）の制度が6月より東大基金へ導入されます！

ご希望の方はお申込の際に選択いただけるように、寄附申込書やホームページのリニューアルも予定しております。

毎回みなさまにお伝えしてきた基金最新情報の教職員参加率も、来月の連載よりリニューアルの予定です。

130周年キャンペーンとしては、31.3%を達成いたしました！目標の参加率50%までは届きませんでしたが、思い起こせば連載第1回の数字は9.6%でした。この学内広報の連載が少しでもみなさまが基金に興味を持っていただくきっかけとなっていれば、幸いです。

来月号の連載の後は、7月、10月、1月と3ヵ月に1回の連載となる予定です。今後ともどうぞStep by Stepをよろしくお願いたします。（鈴木）

## 基金最新情報

7,635件 13,399,335,190円

(内教職員 2,282件)

(3月28日現在申込)

教職員参加率 31.3%

連絡先: 渉外本部 鈴木

電話: 内線21744(外線03-5841-1744)

HP: <http://utf.u-tokyo.ac.jp/index.html>

※「東京大学トップページ」上で「東京大学基金」をクリック

## 産学連携協議会平成19年度年次総会、アドバイザーリーボードミーティング開催

### 400名を超える参加者で盛況に終わる



氏家純一氏(野村ホールディングス㈱取締役会長)の講演を聞く参加者のみなさん(左)、懇親会で乾杯の挨拶をする西山 徹氏(味の素㈱技術特別顧問)(右)。

3月12日(水)15時半より、東京大学産学連携協議会平成19年度年次総会が経団連ホール(経団連会館14F)で開催されました。小宮山 宏総長の挨拶の後、榊原定征氏(社団法人日本経済団体連合会副会長)より来賓挨拶がありました。藤田隆史産学連携本部長から活動報告が行われた後、氏家純一氏(野村ホールディングス㈱取締役会長)より「産学連携への期待と金融教育研究センターの活動」をテーマに「産学連携と教育・産学連携と研究」の2点について産業界の立場から大学側に対する講演がありました。その後、坂村 健教授(大学院情報学環)からの「イノベーションとユビキタス」をテーマにした講演では、海外の事例をあげ、ユニバーサルデザインでのICTの基盤作りをする提案がありました。総会終了後に12Fダイヤモンドルームにて開催された懇親会では、多くの方が参加して盛況に終わりました。

### 産業界側より多数の意見が出る

3月12日(水)13時より、平成19年度第2回アドバイザーリーボードミーティング(ABM)が経団連会館8F富士の間で開催されました。ABMは、大学側の代表と産業界側の代表が産学連携について意見交換を行う場です。産業界側のアドバイザー(6名のうち4名出席)三木繁光氏(㈱三菱東京UFJ銀行取締役会長)、宮原賢次氏(住友商事㈱相談役)、和田紀夫氏(日本電信電話㈱取締役会長)、西山 徹氏(味の素㈱技術特別顧問)と、小宮山 宏総長以下、藤田隆史産学連携本部長を含む協議会理事8名で、活発な議論が行われました。

本学から提案したエグゼクティブ・スクールの計画案では、産業界側アドバイザーから多くの提案と要望が出され、議論が白熱しました。6名の産業界側アドバイザーは、今回で2年の任期が終了し、次回から新メンバーに交代します。



エグゼクティブ・スクールについての議論は白熱した。

## CCRの発展的解散に伴い、一部の事業が産学連携本部へ移行

### CCR最終シンポジウム開催される



左からコーディネータの妹尾堅一郎氏(CCR客員教授)、パネラーの藤田明博氏(文部科学省研究開発局長・教授)、塚本 修氏(経済産業省技術総括審議官・教授)、田中敏久氏(CCR客員教授)、安田 浩氏(CCR元センター長)、横井秀俊氏(CCR前センター長)。

3月17日(月)13時より駒場ⅡキャンパスAn棟2階コンベンションホールにて、東京大学国際・産学共同研究センター(CCR)最終シンポジウム「東京大学の産学連携とCCRの果たした役割」が開催されました。第1部ではCCRの活動報告として、渡部俊也CCRセンター長ほか5名より説明がありました。第2部ではCCRの果たした役割とそのDNAをテーマにパネルディスカッションが行われました。第3部では、「課題先進国日本」をテーマに小宮山 宏総長より講演がありました。第4部の懇親会では、多くの方が参加し、あちこちのテーブルでこれからの本学の産学連携について議論する姿が見られました。

CCRは12年の活動を終えて発展的解散することとなり、産学連携本部では、CCRが築いてきた事業の一部(テクノロジー・リエゾン・フェロー研修プログラム、CCR-DB<CCR-産学連携提案データベース>)を受け継ぐことになりました。

連絡先:産学連携本部(本部産学連携グループ) 電話:内線22857  
(外線03-5841-2857)ホームページ:<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索

**DUCR**  
Division of University Corporate Relations  
The University of Tokyo



## ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～ 第5回



### メルマガ会員1000人突破！



おかげさまで東大ナビは、この4月をもって隔週発行のメルマガジン登録者数が1000人を突破致しました！

今年度も教育イベント情報や、スタッフからのお勧めコンテンツ、メルマガ会員へのクーポンなど、より充実したサービスを提供して参ります。

今年度も東大ナビを、どうぞよろしくお願い致します！

東大ナビではこの春より「東大ナビ開花宣言！」キャンペーンを進めております。学内各所で新しいポスターなどご覧頂いたかもしれませんが、今後とも東大ナビの活動に、是非ご注目下さい！



### 春季キャンペーン開始！

東大ナビでは4月2日、3日と新入生を対象とした春季キャンペーンを行いました。大学生協様のご協力により、新入生が受け取る配布物や各種ビラを持ち運びやすい、大きなロゴ入りバッグを提供致しました。

加えて新入生限定として、バッグに同封のはがきサイズDMIに振られた番号より、東大ナビメルマガにご登録頂いた中から、抽選で200名様に、東京大学オリジナル・キャンパスバッグをプレゼント致します！（申し込み締め切り；4月30日まで）

抽選結果は5月より、東大ナビ携帯サイトにて発表致します。どうぞご期待下さい！



(写真左上) 配布物が入るロゴ入りのバッグ。中にはキャンパスバッグが当たる抽選くじを同封  
(写真上) 用意されたバッグの山。新入生全員分、3300セット。これでもごく一部  
(写真左) 配布物とともに、新入生一人一人に手渡しで配布



### 東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メルマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください！



### イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信！

- この記事のQRコードから
- mail@utnav.jp宛てにメール送信
- 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET!



### イベントを宣伝したい方

教育企画室TREEオフィスまで！

- 内線；27823（重田）
- メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
- オフィス；本郷キャンパス 第二本部棟401号室

## ワタシのオシゴト / 第26回

Rings around the UT

理学系研究科等 化学科事務室

原田 園子さん

## コミュニケーションセンターだより No.46

## ■卒業式出店大賑わいでした！！

## ■「卒業式特別テント出店」

毎年恒例の卒業式テント出店。

今年は24日(学位記授与式)が大雨でとても残念でしたが卒業のお祝いごと、お足元の悪い中沢山のお客様が来て下さいました！！

25日(学部卒業式)は打って変わって日本晴れ。

色とりどりの袴姿の卒業生に感動しながらの出店でした。

## ■「大人気！！御酒試飲」

卒業式とホームカミングデーのみのイベントである幻の泡盛「御酒」の試飲が今年も大人気でした！！かわいいUTマーク入りのおちょこ(非売品)がセットで一杯200円という特別価格！！

試飲されたお客様は口を揃えて「美味しい！！」とおっしゃっていました。一年に、たったの2回という貴重な機会ですので、次回のホームカミングデーでは是非皆さん、幻の味をご賞味下さい。



## ■「出店・店頭売上ランキング」

UTCCではどの商品が人気であるのか、また、店頭と出店では人気のある商品に違いがあるのか、販売個数ランキングを作成しました！！やはりお祝いボトルであったことで皆さんに喜んで頂けました。春限定桜ボトル。残りわずかですが是非皆さん、お祝いにお一つ、可愛らしい桜ボトルはいかがでしょうか。

## 出店販売ベスト3

- I 御酒ミニボトル
- II ナイロンバッグ
- III ビニールストラップ白

## 店頭販売ベスト3

- I 御酒ミニボトル
- II 御酒
- III チャーム付ストラップ黒

(担当：コミュニケーションセンター 山下)



東京大学コミュニケーションセンター  
The University of Tokyo  
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30

電話：03-5841-1039

http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp

## 化学科事務室より



学生対応中

化学科事務室に平成18年7月に着任しまして、1年9か月になります。仕事は教務関係全般です。学部・大学院生へ教務の様々な連絡をしたり、学科・専攻の教務関係の行事(ガイダンス・入試・論文審査会等)の事務、学科で作成している学生向けの印刷物の作成などを行っています。

教務の仕事は初めてでしたので、着任当初はわからないことが多かったのですが、先生方や理学部事務の方をはじめ、周りの方々に色々教えていただき、少しずつではありますが

徐々に仕事に慣れてきました。

専攻の教務の仕事は、先生や学生さんと直接接する機会が多く、とてもやりがいのある仕事をさせていただいていると感じています。

まだまだ勉強することが多いのですが、少しでも化学科・化学専攻の先生方や学生さんのお役に立てればと思っています。



雨に濡れる化学東館

得意ワザ：何も無い場所でもよく転び、階段からもよく落ちます。

自分でも不思議です。

自分の性格：のんびり屋

次回執筆者のご指名：渡来恵美さん

次回執筆者との関係：昨年まで同じ化学科の職員だった方です。

一言紹介：落ち着いていながらも、とても面白い人です。



## 教育学部附属中等教育学校『もっと明鏡』 で大賞受賞

第2回「もっと明鏡」大賞 みんなで作ろう国語辞典！（大修館書店主催）で、本校5年の渡邊萌さんが、大賞を受賞した。また、本校は、学校賞にも選ばれた。（参加学校全国382学校、作品数は4万4000件）

受賞した渡邊さんの作品は「むちゃぶり」という言葉で、「むちゃくちゃなぶり」の略語である。相手と話していて、その様子をみた第三者の人が使うことが多い。

受賞を知って「ちょっとびっくりした。副賞のニンテンドーのDSをもらえてすごく嬉しかった」と感想を述べ、また、「この機会に、日常使っていても、説明しにくく、なんとなくニュアンスで使っていることばの説明を辞書に載せるのは難しいことがわかった」とも語ってくれた。

日頃管弦楽部で活躍する渡邊さんの今後の活躍に期待したい。



受賞した渡邊萌さん

## 教育学部附属中等教育学校、東京都ロード レース大会入賞

1月27日（日）に東京晴海、夢の島運動公園において開催された第46回「東京都中学校ロードレース大会」において本校の5人の生徒が入賞した。

### 種目別の記録

2, 3年 男子	3 km	第1位	3年 高橋広夢	9分21秒
2, 3年 男子	3 km	第6位	3年 角 健士	10分15秒
2, 3年 女子	2 km	第5位	2年 金森知美	7分34秒
2, 3年 女子	2 km	第5位	2年 石川彩乃	7分33秒
1年 女子	2 km	第7位	1年 矢野沙織	7分28秒

以下は、5人のコメントである。

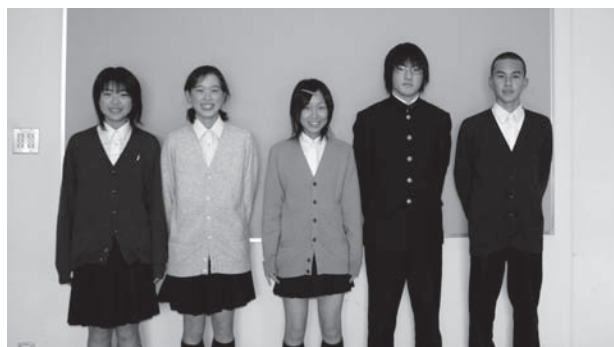
高橋くん「広島での全国駅伝で走ることができなかったが、そのとき東京代表で競った選手に勝てたのが良かった」

角くん「自分の専門種目ではなかったが、ギリギリ入賞できて良かった」

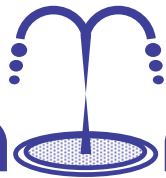
金森さん「入賞することができて本当によかった。次回はもっと上位を目指します」

石川さん「入賞は必ずしようと思っていた。さらに上位を目指してがんばる」

矢野さん「冬は大会がないので、ロードレースで入賞できて良かった」



左から矢野さん・金森さん・石川さん・角君・高橋君



噴水

## 教育学部附属中等教育学校で 「学びの共同体」研究会行われる

1月31日(木) 13:10～17:00まで教育学部附属中等教育学校、新教育棟の多目的室において、2007年度第4回目の「学びの共同体」研究会が行われた。

授業は、2年B組(40名)で、数学科「142857の不思議」(授業者、三橋俊夫副校長)であった。

導入では、生徒に142857にかける二桁の好きな数字をいわせて、それを即座に解答して、生徒にあっと思わせた。

つぎに、 $142857 \times 1$ 、 $142857 \times 2$ 、…… $142857 \times 35$ ……と書かれたプリントと、10のグループに各1台ずつ電卓が配布された。課題は、142857という6桁の数字に掛け算するとその答えにはある不思議(法則性)があり、それをみつけることである。生徒は集中して計算をこなして、積の答えの数字を必死に見比べていた。ときどき、法則発見に「ひらめき」が生じた生徒の声が響いて、グループでは、学び合いが行われていた。

最後に、法則の解き明かしがなされ、なるほどという表情を見せながら生徒は頷いていた。予定時間を越えた、75分間の授業であったが、生徒の集中力が際立っていた。

三橋副校長は「 $\times 1$ 、 $\times 2$ 、……と地道に順序よく調べ、その中から規則性を発見させたかった」と授業後の感想を述べた。

埼玉大学と都留文科大学の教員も参加し、埼玉大学の七木田文彦氏は、「以前から比べて子どもたちが成長していること、わからないとき『わからない』といえる関係があること」を指摘した。

明石書店の三輪ほう子さんは「授業検討会で、教師同士が学んでいる姿が感じられ、それが豊かなものになっている」と感想を述べた。

指導助言者の大学院教育学研究科の佐藤学教授は「本当にいい授業であった。みていて惚れ込んだ」「子どもが夢中になって取り組んでいた」と感想を述べた。また、オーセンティック(真正)な学びに子どもたちが出会った時間であったことを指摘した。また、午前中に全クラスを参観した感想は、「これだけの学び合いができるのはハイレベルにきたことであり、東大附

属学校の学びの質を、自信をもって提示できる」「子どもたちの求めるものが高まっており、教師がプロ意識をもち、教師としての関わり、構えをしっかりとっていくこと」についても言及した。

子どもたちの表情がやわらかく、授業者である三橋副校長との日常の関係の良さが感じられた授業であった。





## 教育学部附属中等教育学校で卒業式行われる

3月7日（金）、教育学部附属中等教育学校で第8回の卒業式が行われた。朝からよく晴れ渡り、ハレの日にふさわしい天気となった。在校生全員で卒業生104名を迎え、厳粛な雰囲気の中、衛藤隆校長から卒業証書が一人ひとりに手渡された。担任の先生に名前を呼ばれた生徒たちは、ハイという返事の中に、今までの様々な思いを込めて、壇上に登り、6年間の集大成ともいえる証書を受け取った。中には思い余って目を潤ませながら、それでもしっかりと礼をして歩みを進めた生徒もいた。そんな卒業生に対して、衛藤隆校長は将来「何物にもかえがたい全身全霊をかけてぶつかっていく何か」を探してほしいという旅立ちにふさわしい祝辞を述べられた。

来賓には、平尾公彦副学長、金子元久教育学部長をはじめとして、多くの方が列席された。平尾副学長は、2年前にこの学校で授業をした時のことに触れられ、附属の生徒の理解力の高さへの感嘆と称賛を含む祝辞をくださった。金子教育学部長からは、東大附属というこの特色ある学校で学んだことを生かして羽ばたいて欲しいとお言葉をいただいた。最後は卒業生の歌で締めくくられた後、卒業生たちは蛍の光の奏楽裡に涙をふきつつ、しゃくりあげながらの退場であった。



## 教育学部附属中等教育学校で2年総合学習発表会開催

3月11日（火）10時～12時30分まで、附属中等教育学校の体育館と新教育棟多目的室において、2年総合学習発表会「身体・表現」が開催された。60数名の保護者の方も参観した。2年生全員が、「和太鼓」「新体操」「演劇」のうちの一つを選択して行う発表会である。

体育館において、まず、今回太鼓1台と太鼓台3台を寄贈して下さった伝統工芸車師の峰さんご夫妻をお招きし、太鼓へ「魂入れ」をするセレモニーが、体育科教諭浅川俊彦、本校4年生の「日本の民俗芸能を学ぶ」の受講生によって行われた。

その後、「和太鼓」の演奏が行われた。三浦半島に伝わる「ぶち合わせ太鼓」の白熱した演技を「華・波・星」の3組が行った。指導6年目となる藤本厳さんは、「毎年教えているが、今年の2年生は、初回から声が出て、素晴らしかった」とおっしゃっていた。

つぎに、「新体操」（4年目）が行われた。ボール・リボン・フラフープ・ゴースを用いて、華麗な動きで観衆を魅了した。ラストでは、大きな布の中から、きらきら光る細かいものを散らすなど、工夫が見られた。新体操の指導者の木皿久美子さん（オリンピックの強化コーチでもある）は「演技時間は10数分と短く、打ち上げ花火のようなものであるが、そこに至るまで、何時間もかけて演技をつくっていくことの難しさを経験してくれた」と講評なさっていた。

最後に「演劇」は、「俺たちの甲子園」（作：石原哲也）で、甲子園を目指す高校生の物語である。演者は先生役や保護者役もそつなくこなしていた。指導した英語科葛城忠彦教諭（演劇部顧問）は、「今年の特徴は、スタッフが作った大道具の良さであり、そこには、美術科の小澤功教諭の支えがあった」と指摘していた。

個々のグループに分かれて3ヶ月でつくったそれぞれの「身体・表現」、子どもたちは、それぞれ輝いた自分を出していた。



演劇発表の様子



## 教育学部附属中等教育学校で「一日研究会」開催

3月18日(火)9時30分から16時30分まで、教育学部附属中等教育学校で、一日研究会が開かれた。毎年、年度末に行われ、今後の学校運営に生かされる様々なテーマを設定して一日かけて議論している。

午前中「東大附属に関わって…」というテーマで、①東大附属の中にいて見えたこと、②東大附属を離れて見えたこと、③東大附属の将来は、の3点についてシンポジストの先生方から報告があった。

シンポジストには、2名の本校元校長、帝京大学教授浦野東洋一氏(1992～1994年度、2000年度校長)と白梅大学学長汐見稔幸氏(2004～2005年度校長)、現校長衛藤隆氏、本校元教諭山岡寛人氏(1982～2004年度在職)を迎えた。

汐見氏は「教育学部との関係を密にすること。附属の教員が在外研究にいける環境を整えること。家庭で悩む親のサポート」などを述べた。

浦野氏は「点数競争に巻き込まれている現状から、正しい競争“切磋琢磨”(同じ志をもった者が高め合う)していくような環境の大切さと、附属の目指す人間像を明確にして打ち出す必要性」を強調した。

衛藤氏は「中教審の委員という立場からも、基礎学力の低下にどう対応するかを念頭に、財政の厳しい中で保護者の支援を仰ぐ体制を重視していくこと」などを述べた。

山岡氏は「附属には『附属論集』(研究紀要)という発表の場があること。中等教育学校の先がけとして①研究実験学校のエリート②教員免許制、教師教育のフィールド③学部・大学院を中野の南台へ、そこにインテリジェントビルをつくる④附属から客員教授を出す⑤開かれた学校(保護者との連携)」を提言とした。

午後は、4つの分化会に分かれ午前中のシンポジウムでの提言を受け、本校の将来をさまざまな角度から、具体的に議論した。以下は、全体会で集約された議論の内容である。

「授業を教員同士で見合うようになったのはすごいこと」「奈良女子大学附属・名古屋大学附属との人事交流の検討」「後期課程で留学生を受け入れ国際交流を図る」「海外に姉妹校をつくる」「“学びの共同体”での成果を教材化し、教科ごとに出版する」「30名学級4クラスの実現」「思春期の6年間をどう育てていくか、その際心をどのように育てていくか」などが述べられた。

附属学校の今後の方策となる貴重な話が共有された研究会であった。

## 教育学部附属中等教育学校で入学式おこなわれる

4月7日(月)、教育学部附属中等教育学校において、平成20年度入学式がおこなわれた。第63回生120名が新たな気持ちを胸に、やや緊張した面持ちで式に臨んだ。来賓には、金子元久教育学部長をはじめ、同窓会・PTAなど学校を支えてくださる方々が多数お見えになった。管弦楽部の先輩たちは快い演奏で新入生を迎えた。

南風原朝和学校長は、この学校ののびのびとした自由な環境に触れ、「他人の自由を奪ったり傷つけたりしない」「周りの人への配慮」「心配りを忘れない努力」が大切であると述べられた。

金子元久教育学部長は、「日本の社会が大きく変わる中で、中等教育段階において自分が何をしたいのか、はっきり考えておくことが必要であり、そのためには本校において、自分が何をしたいのかを見つけることが大切である。」と述べられた。

在校生からは生徒会長の赤迫君が先輩として新入生に対して3つのアドバイスを話し、新入生の李君がこれからの抱負述べた。新入生のこれからの6年間での成長を期待したい。



式辞を述べる南風原朝和学校長





## 教育学部附属中等教育学校、全日本シンクロナイズドスケATING大会入賞

12月28日(金)に開催された第14回全日本シンクロナイズドスケATING選手権大会種目シニアで、本校3年の須藤ゆうさんが第2位に入賞した。須藤さんは、4歳からシンクロナイズドスケATINGをはじめ、現在は明治神宮外苑の神宮Ice Messengersに所属して週5日の練習を行っている。

シニアは、16人で行う競技で、チームの年齢構成は、24歳～15歳で、須藤さんは最年少の選手である。

ショートプログラムでは、映画「アルマゲドン」のテーマ曲(演奏:エアロスミス)で、「好きな人を思って」演技したという。また、フリープログラムでは映画「どろろ」のテーマ曲(「フェイク」演奏:Mr.Children)で、演技中にらみを効かしたり、やさしい表情をしたり、ストーリー性を伝えるように滑ったそうである。

大会後の感想として「負けたのが悔しかった。全日本で勝って、世界選手権に出場したい」という抱負を述べてくれた。

今後の、須藤さんの活躍に期待したい。



16人の演技の様子



演技する須藤ゆうさん(左から2人目)

# INFORMATION

## お知らせ

### お知らせ

ナノバイオ・インテグレーション研究拠点

### 若手奨励研究者の公募について

#### 募集の趣旨

ナノバイオ・インテグレーション研究拠点では、将来のナノバイオ研究を担う若手研究者の育成を目的として、研究費補助金制度を設けています。

募集は、2008年4月1日に37歳以下(研究者としての経験年数は問わない)の将来の発展が期待できる優れた着想を持つ研究者が、一人で行う研究を対象とします。研究期間は2年とし、申請額は上限200万円/年、総額400万円以下とします。(1年の研究期間は認められません)。

申請に当たっては、次の諸点に十分留意して下さい。

#### 1. 応募資格

- 本学に所属し、研究活動を行うことを職務に含む者であり、ナノバイオ・インテグレーション研究拠点の課題研究代表者・分担者・共同研究者以外であること。なお、学生からの応募は認めない。
- 応募者は、研究計画の遂行(研究成果の取りまとめを含む)に関してすべての責任を持つこと。
- 外国出張その他の理由により、長期にわたって研究の責任を果たせなくなる場合には、応募できない。

#### 2. 研究組織

原則研究者が一人で行う。

#### 3. 研究分野と採択件数

以下3テーマのナノバイオ研究領域から2件程度を採択する。

(詳細は、ホームページにて <http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/CNBI/rd/index.html>)

#### 4. 研究目的・研究計画

次の点が明確に示されていること。

- (1)特色ある研究であること。
- (2)研究目的は、焦点の絞られた具体的なものであること。
- (3)独創的な研究内容をもっていること。
- (4)研究の進め方が着実で、研究経費の算出が合理的であること。
- (5)研究成果の当該学問分野及び関連学問分野への高い貢献度が期待できること。

**\*研究経費の年次計画について**

研究の実態に即したものにすること。例えば、初年度は準備的経費にとどめ、実質的な研究費を次年度以降に執行することが適当な研究については、そのような計画で申請すること。また、所定期間に研究を一応終了し、研究成果を取りまとめ、かつ、発表が行えるような具体的な年次計画を立てること。

注意) 次の研究計画は対象とならない。

- 単に既製の研究機器の購入を目的とする研究計画
- 他の経費で措置されるのがふさわしい大型研究装置等の製作を目的とする研究計画
- 商品・役務の開発・販売等を直接の目的とする研究計画 (商品・役務の開発・販売等に係る市場動向調査を含む。)
- 業として行う受託研究
- 研究期間のいずれかの年度における研究経費の額が10万円未満の研究計画

**5. 審査の方法**

ナノバイオ・インテグレーション研究拠点の研究代表者で構成される委員会にて、研究計画調書により審査を行う。採択研究課題の決定に当たっては、各テーマ間の採択件数のバランスに配慮する。

**6. 申請の方法**

ナノバイオ・インテグレーション研究拠点 (CNBI) のホームページ (<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/CNBI/integration/index.html>) より、申請書 (word ファイル) をダウンロードすることができます。必要事項を記入の上、電子メールに添付し、下記宛先に送付して下さい。なお、件名に CNBI 若手研究申請書 (応募者氏名) と記述して下さい。

**送付先**

東京大学ナノバイオ・インテグレーション研究拠点  
事務局 記村  
E-mail : kimura@cnbi.t.u-tokyo.ac.jp

**必要書類 :**

申請書 (pdf ファイルに変換し、送付して下さい)

**応募期間**

3月17日 (月) ~ 4月25日 (金) (厳守)  
尚、補助金の交付決定は、5月中旬となります。

**問合せ先**

東京大学ナノバイオ・インテグレーション研究拠点  
事務局 記村

TEL : 03-5841-1656 FAX : 03-5841-1510

E-mail: kimura@cnbi.t.u-tokyo.ac.jp

〒113-8656 文京区本郷7-3-1 工学部3号館251A号室

**お知らせ**

**本部学生支援グループ**

**なんでも相談コーナー開設**

学生を多面的に支援するために全学の相談施設が連携を緊密にすべく4月1日に「学生相談ネットワーク本部 (以下「本部」)」と「本部」が運営する「なんでも相談コーナー」が本郷キャンパス安田講堂2階に開設されました。

教務・学生系業務の経験を持つ大学職員3名が、学生が抱える悩みや問題に合った相談施設を案内すると共に、教職員からの相談や問い合わせ等にも応じています。

**開室日時 :**

月~金 (休日を除く) 9時30分~17時30分

**連絡先 :**

03-5841-7867 または 03-5841-0786

なんでも相談コーナー



(左から、中丸相談員、浅島理事・副学長、古田本部長、加藤相談員、平井相談員)

**お知らせ**

**附属図書館**

**イエール大学の図書館利用について**

附属図書館では、「東京大学とイエール大学との間における図書館訪問利用の試行に関する協定」を締結しました。

この協定は、本学とイエール大学の教員 (常勤)、大学院生等が相手大学を訪問した際、所属大学の図書館が発行する紹介状及び所属大学の身分証明書を持参することにより、資料の閲覧と貸出のサービスを受けることができるというものです。

平成 20 年 9 月までを試行期間とし、平成 20 年 10 月に双方で評価の後、10 月以降の本格実施について協議する予定です。

紹介状の発行は、総合図書館・駒場図書館・柏図書館で行いますので、ご利用の際は、各図書館までご連絡ください。

本試行の参加館は、本学の 22 図書館・室、イェール大学は以下の 23 館です。

Art & Architecture Library  
Bass Library  
Beinecke Rare Book and Manuscript Library  
Chemistry Library  
Classics Library  
Divinity School Library  
Drama Library  
Engineering & Applied Science Library  
Epidemiology & Public Health Library  
Forestry & Environmental Studies Library  
Geology Library  
Kline Science Library  
Law Library  
Lewis Walpole Library  
Library Shelving Facility  
Mathematics Library  
Medical Library [Harvey Cushing/John Hay Whitney Medical Library]  
Mudd Library [Seeley G. Mudd Library]  
Music Library [Irving S. Gilmore Music Library]  
Nursing Library & Information Resources  
Social Sciences Libraries & Information Services  
Sterling Memorial Library  
Statistics Library

#### 問い合わせ先

附属図書館情報サービス課相互利用係 内線 22644  
sogoriyo@lib.u-tokyo.ac.jp

#### お知らせ

附属図書館・情報基盤センター

#### 写真帖『東京帝国大学』電子版の公開について

総合図書館所蔵の写真帖『東京帝国大学』は、東京大学創立 130 周年記念事業の一環として電子化され、事業の様々な場面で活用されました。

附属図書館と情報基盤センターで電子化されたデータを基に、Web 上で閲覧できるようにしました。

#### ○写真帖『東京帝国大学』電子版

明治 30 年代の東京帝国大学を撮影した大判横長の写真帖。明治 33 (1900) 年のものは、フランス・パリの

万国博覧会、明治 37 (1904) 年のものは、米国・セントルイスの万国博覧会に出品するために製作された。歴代総長のほか、当時の部局長、教授たちの肖像と校舎設備の状況を撮影した写真を収録し、序文や見出しなどには英文が併記されている。明治 37 年版では、明治 33 年版に比べて、新築校舎や新任教員の肖像写真を加えるなどの増補がなされている。

URL:<http://rarebook.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/shashincho/index.html>

なお、附属図書館 HP (<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/>) 「電子化コレクション」からもリンクしています。

#### お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

#### 「教養学部報」第 510 (4 月 2 日) 号の発行 ——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15 号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

第 510 号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

小宮山宏：新入生に贈る言葉～先頭に立つ勇氣  
小島憲道：学際性と国際性に満ちた教養学部を目指して  
神野志隆光：糞土の墻は朽るべからざる也  
下井 守：十八才は大人か  
石橋 純：チャベスの挫折と「学生運動」  
～ベネズエラの路上から  
清水 剛：アンチ・ユートピアの組織論序説  
～「恩人」と「ビッグ・ブラザー」の境界  
田尻芳樹：ノーベル賞作家 J・M・クッツェー氏朗読会  
安達裕之：一高生から東大総長へ  
～「平賀譲とその時代」展  
石垣琢磨・松島公望：駒場には「よろず相談所」があります～その場所は、学生相談所です  
里見大作：進学情報センター  
宮内由美子：留学生相談室より  
能登路雅子：アメリカ太平洋地域研究センター紹介  
～開かれた研究と出会いの場  
山口和紀：情報教育棟  
石井洋二郎：駒場図書館案内  
事務部 教員組織・事務部等  
池田信雄：駒場美術博物館案内  
田中真理子：保健センター駒場支所  
齊藤宣一：〈時に沿って〉数値解析と十三年前の私  
和仁健太郎：〈時に沿って〉駒場での研究生活を振り返って～研究の大変さと面白さ  
児玉大樹：〈時に沿って〉駒場の気質

松島公望：〈時に沿って〉学生相談所のスタッフとして

〈辞典案内〉

アルヴィ宮本なほ子：英語

鍛治哲郎：ドイツ語

坂原 茂：フランス語

安岡治子：ロシア語

西中村浩：ポーランド語

村松真理子：イタリア語

竹村文彦：スペイン語

木村秀雄：ポルトガル語

大貫 隆：古典語～ギリシア語・ラテン語

吉川雅之：現代中国語

品田悦一：国語辞典

齋藤希史：漢和辞典

生越直樹：韓国朝鮮語

杉田英明：アラビア語

藤田 毅：ヒンディー語

高松洋一：トルコ語

中井和夫：ウクライナ語

柴 宜弘：セルビア・クロアチア語

岩月純一：ベトナム語

上村 静：ヘブライ語

前田君江：ペルシア語

王 嵐：台湾語

木村理子：モンゴル語

吉川雅之：広東語

楊 凱榮：上海語

高橋英海：シリア語～シリア・アラム語

## お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

教養学部進学情報センター主催シンポジウム  
「私はどのようにして専門分野を決めたか」

開催日時：4月24日（木）、  
25日（金）18時～20時

会場：教養学部18号館1階ホール

各学部の先生を講師にお招きし、先生方がどのようにして現在の専門分野を決められたか、また、その選択にどのような自分の夢を託されたか、などを自由にお話ししていただきます。4月という時期、「専門分野の決定」がもっとも関心が高いであろうという判断から、このシンポジウムを企画しました。皆さんにとって、大学で学ぶことの意味を問い直し、より広い視野のなかで進学を考える機会となってくれることを願っています。今年は、開始を18時からとし、二日に分けて行うことにしました。

先生方との質疑応答の時間も予定しています。ぜひ参加してください。講師の先生方の所属、氏名（専門分野）、

演題は以下の通りです。

4月24日（木）

法学部 原田 央 准教授（国際私法）

「国際社会における日本の“法”と“法学”」

医学部 岡部 繁男 教授（解剖学・細胞生物学）

「かたちを学ぶ」

工学部 片岡 一則 教授（バイオマテリアル工学）

「バイオマテリアルにかけた夢」

文学部 吉澤 誠一郎 准教授（中国史学）

「歴史のなかの現代－現代のなかの歴史」

薬学部 佐藤 能雅 教授（蛋白質構造生物学）

「X線解析でタンパク質を観る」

4月25日（金）

理学部 田近 英一 准教授（地球惑星システム科学）

「地球を“惑星”として理解する」

農学部 経塚 淳子 准教授（植物形態形成学）

「生きものの力を活用したい」

経済学部 松井 彰彦 教授（経済理論）

「天から地へ モノからヒトへ」

教養学部 黒田 玲子 教授（生物物理化学）

「右と左の不思議に魅せられて－物理化学から、分子生物学、発生・細胞生物学まで」

教育学部 本田 由紀 准教授（教育社会学）

「憤りをバネに」

\*シンポジウム終了後、進学振分けの説明会を行います。

問い合わせ先 教養学部進学情報センター

里見大作教授（内線 46187）

## お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

第3回教養学部選抜学生コンサート

日時 4月23日（水）開演18時（開場17時30分）

場所 駒場キャンパス コミュニケーション・プラザ  
北館2階 音楽実習室

入場無料

駒場コミュニケーション・プラザ北館2階の音楽実習室には、スタインウェイのグランドピアノがあります。学生の皆さんのために使用することを目的に購入されました。ピアノ委員会では、毎年4月と11月、教養学部選抜学生コンサートを開催します。今回は、オーディション通過者5人によるピアノ独奏のプログラムです。音楽への若い情熱ほとばしる演奏に耳をかたむけに、ぜひお誘い合わせの上、ご来場ください。

（主催：ピアノ委員会）

## プログラム

ピアノ独奏：山崎 翔（理科一類）  
F. F. ショパン  
バラード第3番 変イ長調

ピアノ独奏：松原 薫（文科三類）  
L. v. ベートーヴェン  
創作主題による32の変奏曲 ハ短調

ピアノ独奏：中川 航（大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻）  
F. F. ショパン  
舟歌 嬰へ長調、夜想曲第18番 ホ長調

ピアノ独奏：松本 雄也（大学院数理科学研究科）  
M. ラヴェル  
道化師の朝の歌（組曲「鏡」第4曲より）

ピアノ独奏：世古 隆蔵（文科一類）  
F. F. ショパン  
バラード第4番 ヘ短調

## お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

### 第113回教養学部オルガン演奏会

駒場キャンパス恒例のオルガン演奏会、今回はオルガンと邦楽器のコラボレーションです。

**日時** 4月24日（木）18時30分（開場18時）  
**場所** 東京大学教養学部900番教室（講堂）  
入場無料（先着500名）

## 演奏

オルガン 武久源造  
箏 衣袋 聖志  
三味線 箕田弘大  
尺八 中村仁樹

## プログラム

スウェーリンク 半音階的ファンタジー  
バッハ（武久編曲）コンチェルト イ長調  
オルガンと邦楽器の共演による即興演奏 ほか  
（主催：オルガン委員会）

## お知らせ

情報基盤センター

### “情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

5月は、定期的実施しているテーマ別ガイダンス各種コースに加えて、「入門コース」を開催します。図書や雑誌論文の探し方をコンパクトに解説するコースです。ぜひご参加ください。

本学にご所属であればどなたでも参加できます。

#### ●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー  
（定員12名 予約不要です。直接ご来場ください。）

#### ●コース概要：

##### <テーマ別ガイダンス>

1つのテーマに沿って、検索実習を交えながら解説します。

同じ内容で各2回開催します。

#### ■入門コース（60分）

基本的なデータベースを使った図書や雑誌論文の探し方を解説します。東京大学OPACの使い方、電子ジャーナルの探し方、文献の検索方法などを、コンパクトに説明します。

#### ■日本の論文を探すには？（60分）

CiNii（サイニイ）の使い方を中心に、日本の論文・雑誌記事を検索できるデータベースを紹介します。

#### ■電子ジャーナルを利用するには？（60分）

電子ジャーナルにアクセスする方法や、代表的な出版社の電子ジャーナルサイトを例にとって実際の利用方法を解説します。“東京大学学術論文横断検索（UT Article Search）”や“UT Article Link”を使って、データベース検索結果から電子ジャーナルへアクセスする方法も紹介します。

#### ■自宅から検索するには？（60分）

学内・学外を問わず利用できる無料公開のデータベース・電子ジャーナルなどを紹介します。また、通常は学内からのみ利用可能なデータベース・電子ジャーナルでも、手続きをして学外から利用できるものがありますので、その方法を解説します。今年度より新たに学外から利用できるようになったデータベースや電子ジャーナルも紹介します。

## < Database User Training (English Session) >

### ■ Electronic Journals Course (60 minutes)

5/26 (Mon.) 15:00-16:00

This course covers the fundamental aspects involved when consulting electronic journals.

You will also learn how to access e-journals directly from the search results by using the "UT Article Search" and "UT Article Link" functions.

No advance reservation is required.

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/e/training-e.html>

### ●スケジュール：

月	火	水	木	金
5/5	5/6	5/7	5/8 15:00-16:00 入門コース	5/9 11:00-12:00 入門コース
5/12	5/13	5/14 13:30-14:30 日本の論文を探すには？	5/15 11:00-12:00 電子ジャーナルを利用するには？	5/16
5/19	5/20 13:30-14:30 自宅から検索するには？	5/21 15:00-16:00 電子ジャーナルを利用するには？	5/22	5/23
5/26 15:00-16:00 Electronic Journals Course <English Session>	5/27 15:00-16:00 日本の論文を探すには？	5/28	5/29	5/30 11:00-12:00 自宅から検索するには？

### ●問い合わせ：

学術情報リテラシー係

03-5841-2649 (内線：22649)

[literacy@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:literacy@lib.u-tokyo.ac.jp)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

### お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

### 第13回理学部公開講演会

「理学研究のフロンティア」

理学部では自然現象の真理を探究するためにさまざまな研究を行っています。壮大な宇宙から、私たちの住む地球、より身近な生命にいたるまで、あらゆるものが研究の対象であり、そのための研究手法も多種多様です。

そうした研究の最先端から選りすぐりのトピックスを、各分野で活躍する研究者がわかりやすく解説します。

日時： 5月10日(土) 14:00～16:30 (13:00開場)

会場： 駒場キャンパス 教養学部 900番教室

入場： 無料 事前申し込み不要

定員： 500名

\*終了後、17:30まで講演者、大学院生との歓談の時間を予定しております。

### 講演内容：

猫を恐がらないマウスが教える心の仕組み

小早川 高(理学系研究科 生物化学専攻 特任助教)

見えない宇宙をみる - 宇宙の組成とダークエネルギー -

須藤 靖(理学系研究科 物理学専攻 教授)

地震を支配する法則の探求

井出 哲(理学系研究科 地球惑星科学専攻 講師)

中継： インターネット配信を予定

(下記 URL をご参照ください。)

問い合わせ先：理学部広報室

電話 03-5841-7585 (内線 7585)

e-mail [kouhou@adm.s.u-tokyo.ac.jp](mailto:kouhou@adm.s.u-tokyo.ac.jp)

URL <http://www.s.u-tokyo.ac.jp/PL13>

### お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

### 第114回教養学部オルガン演奏会

駒場キャンパス恒例のオルガン演奏会、アメリカ出身で国際的にますます活躍をつづけるダゴスティーノ氏を再びお迎えします。今回は、管楽器・弦楽器との共演もたのしみです。

日時 5月14日(水) 18時30分(開場18時)

場所 本学教養学部 900番教室(講堂)

入場無料(先着500名)

### 演奏

オルガン グレゴリー・ダゴスティーノ

フルート 安西信一

オーボエ 本多啓佑

ヴィオラ 小倉 萌子

チェロ 磯野太祐

### プログラム

J. W. ハーデル

パルティータ第1番 ハ長調  
F・J・ハイドン  
からくり時計のための4つの小曲  
W・A・モーツァルト  
ソナチネ第2番ロ長調  
J・S・バッハ  
『十八のコラール集』より「着飾りなさい, おお愛する  
魂よ」変ホ長調 BWV 654  
プレリュードとフーガ 変ホ長調 BWV552 ほか  
(主催:オルガン委員会)

## お知らせ

低温センター

### 平成20年度保安教育『低温講習会』のお知らせ

液体窒素・液体ヘリウム利用者を対象にした講習会を下記の要領にて開催いたします。この講習会は高压ガス保安法で義務づけられている保安教育の一環として行うものです。

対象者は、主として今年度入学の修士課程一年生等新たに寒剤を利用し始める学生及び教職員です。研究室の該当者は必ず出席するようお願いいたします。

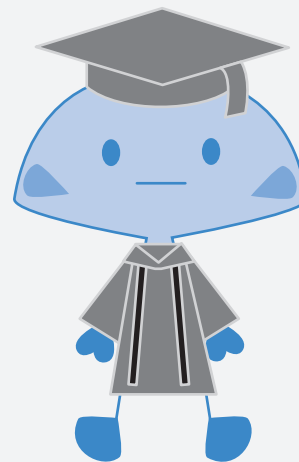
なお、申し込み等の詳細については低温センターホームページ《低温講習会について》をご覧ください。

日 時： 5月16日(金) 15:00～17:00

場 所： 武田先端知ビル5階 武田ホール

- 講習内容：
- 低温センターの紹介
  - 高压ガス保安法の概要
  - 高压ガス容器の取り扱い方
  - 液体窒素・液体ヘリウムの特性と取り扱い方
  - 実際の利用手続き、事故例の紹介
  - 共同利用装置について

問い合わせ先：低温センター 業務 佐藤・早坂  
(内線 22862)



## 広報委員長の交代

平成 20 年 4 月 1 日付で、広報委員長が交代しました。下記にそれをお知らせし、新委員長より、ご挨拶いたします。

【前】石見 徹（大学院経済学研究科・経済学部 教授）

【新】武田洋幸（大学院理学系研究科・理学部 教授）

## 広報委員長就任の挨拶

## 「広報委員長をお引き受けして」

広報委員長 武田洋幸

本年 4 月 1 日より、石見徹先生より広報委員長の職を引き継ぎました。昨年の 3 月に家族で奈良を訪れている時に、突然広報を担当されています濱田純一理事・副学長からメールをいただき、広報副委員長をお引き受けしたのが始まりでした。副委員長とは名ばかりで、昨年は石見前委員長のピンチヒッターとして記者会見の司会をやった程度でした。理学系研究科生物科学専攻に所属する私がこのような大学本部の仕事に関わりを持つことになりましたのは、一昨年の総長補佐がきっかけでした。全く異なる分野の方々と共に仕事をさせていただいた経験から、所属する部局の利害を越えて大学全体を考える視点を持つことができるようになった気がいたします。そして、広報委員長という職はさらに広い立場で大学の利益と社会との接点を考えることが必要になると覚悟しております。ここで大学の広報について、情報発信者と受信者という両極の立場から、私が日頃感じていることを申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。

私が理系の研究者であるせいかもしれませんが、このところ研究成果公開を非常に意識する（おそらく「させられる」）ようになってきております。研究成果を社会へ発信する際に、現場の研究者は分かりやすく解説することの難しさを感じ、かなりの労力をはらうこととなります。私自身何度か記者会見の経験がありますが、その度に我々が考えるわかりやすさと記者や一般の方のそれとは大きなギャップがあるのだと痛感しました。どちらの側も、自分が見たい、知りたい事実だけしか最初は見えない、という人間としての特性がつい現れてしまいます。両者のギャップをストレスなく埋めるためにも、いろいろな段階でインタープリターのな方や現場研究者を指導できる専門のスタッフの存在が不可欠です。既に理系の部局の中には専門の教員を配置しているところもありますが、これは文理を問わず多くの部局で是非実現して、部局からの成果発信を活性化してもらいたいと思っています。広報委員会としても何らかのお手伝いできればと思っています。

一方情報を受ける側に立つと、大学からの情報発信の量が飛躍的に増えた昨今、何が本当に大切であるかの判断が難しい場合があると想像しております。4 月 1 日より、私の部屋のファックスは急に忙しくなっています。それは本部広報グループから記者クラブ等に発信する情報に私宛の CC：が付いているためですが、情報量は確実に増えています。大学の運営については良いこと悪いことすべてを公開するのが原則です。そして専門性のある研究成果の発信に際しても同様です。さらに研究成果の発信については、量だけでなく、大学の見識を示すような時流に流されない質の高い情報発信のあり方が問われていると思います。

どちらも一筋縄ではいかない問題です。幸い、渉外本部や本部広報グループを中心に作成しました「東京大学アクションプラン・ガイドブック 2008（講談社発行）」や「東京大学アカデミックグループ（本学発行・東大出版会発売）」をお手伝いする機会があり、本学では多様で個性豊かな教員の方々が多数活躍されていることを知りました。このような方々のお知恵をお借りし、また広報室の皆様のご指導を頂きながら、今後 1 年間勤めて参りたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。



人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

	氏名	異動内容 (退 職)	旧（現）職等
20.3.5	蒲島 郁夫	辞 職	大学院法学政治学研究科教授
20.3.15	千葉 滋	辞 職（筑波大学大学院人間総合科学研究科教授）	医学部准教授
20.3.31	加藤 朗	辞 職	情報基盤センター准教授
20.3.31	遠藤 昌宏	辞 職	気候システム研究センター教授
20.3.31	碓井 光明	辞 職	大学院法学政治学研究科教授
20.3.31	中山 信弘	辞 職	大学院法学政治学研究科附属 ビジネスロー・比較法政研究センター教授
20.3.31	西田 典之	辞 職	大学院法学政治学研究科教授
20.3.31	能見 善久	辞 職	大学院法学政治学研究科教授
20.3.31	上西 紀夫	辞 職	大学院医学系研究科教授
20.3.31	堤 治	辞 職	大学院医学系研究科教授
20.3.31	川原 信隆	辞 職	大学院医学系研究科准教授
20.3.31	細井 義夫	辞 職（新潟大学教育研究院医歯学系教授）	大学院医学系研究科附属 疾患生命工学センター准教授
20.3.31	荒巻 俊也	辞 職	大学院工学系研究科准教授
20.3.31	石川 顕一	辞 職（理化学研究所上級研究員）	大学院工学系研究科准教授
20.3.31	水流 聡子	辞 職（大学院工学系研究科特任教授）	大学院工学系研究科准教授
20.3.31	野村 貴美	辞 職（大学院工学系研究科特任准教授）	大学院工学系研究科准教授
20.3.31	張 啓雄	辞 職	大学院人文社会系研究科教授
20.3.31	吉田 光男	辞 職	大学院人文社会系研究科教授
20.3.31	野本 憲一	辞 職（数物連携宇宙研究機構特任教授）	大学院理学系研究科教授
20.3.31	近藤 寛	辞 職	大学院理学系研究科附属 スペクトル化学研究センター准教授
20.3.31	草場 信	辞 職（広島大学大学院理学研究科教授）	大学院農学生命科学研究科准教授
20.3.31	甚野 尚志	辞 職	大学院総合文化研究科教授
20.3.31	恒川 恵市	辞 職（政策研究大学院大学教授）	大学院総合文化研究科教授
20.3.31	上村 慎治	辞 職	大学院総合文化研究科准教授
20.3.31	鈴木 眞理	辞 職	大学院教育学研究科准教授
20.3.31	TRIBELSKIY Mikhail	辞 職	大学院数理科学研究科教授
20.3.31	高木 利久	辞 職（情報・システム研究機構ライフサイエンス統合データベースセンター教授）	大学院新領域創成科学研究科教授
20.3.31	上條 肇	辞 職（特許庁経済産業技官）	大学院新領域創成科学研究科准教授
20.3.31	胡 振江	辞 職（情報・システム研究機構国立情報学研究所教授）	大学院情報理工学系研究科准教授
20.3.31	原田 純孝	辞 職	社会科学研究所教授
20.3.31	松井 博	辞 職	社会科学研究所附属 日本社会研究情報センター准教授
20.3.31	吉田 敏	辞 職	生産技術研究所准教授
20.3.31	田中 寛	辞 職（千葉大学大学院園芸学研究科教授）	分子細胞生物学研究所准教授
20.3.31	廣田 和馬	辞 職（大阪大学大学院理学研究科教授）	物性研究所附属中性子科学研究施設准教授
20.3.31	北村 唯一	任期満了	大学院医学系研究科教授
20.3.31	飯塚 悦功	任期満了（大学院工学系研究科特任教授）	大学院工学系研究科教授
20.3.31	越 光男	任期満了（大学院工学系研究科特任教授）	大学院工学系研究科教授
20.3.31	亀口 憲治	任期満了（学生相談ネットワーク本部特任教授）	大学院教育学研究科教授
20.3.31	小川 正人	任期満了	大学院教育学研究科教授
20.3.31	柴若 光昭	任期満了	大学院教育学研究科准教授
20.3.31	小西 敦	任期満了（総務省）	大学院公共政策学連携研究部教授
20.3.31	清水 哲男	任期満了	医科学研究所附属先端医療研究センター教授
(採 用)			
20.3.16	前 真之	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科寄付講座教員
20.4.1	秋光 信佳	アイソトープ総合センター准教授	産業技術総合研究所生物機能工学研究部門機能性核酸研究グループ研究員
20.4.1	柴山 悦哉	情報基盤センター教授	東京工業大学大学院情報理工学研究科教授

20.4.1	河上 正二	大学院法学政治学研究科教授	東北大学大学院法学研究科教授
20.4.1	中田 裕康	大学院法学政治学研究科教授	一橋大学大学院法学研究科教授
20.4.1	本間 之夫	大学院医学系研究科教授	
20.4.1	橋本 浩一	大学院医学系研究科准教授	大阪大学大学院医学系研究科助教
20.4.1	笠原 直人	大学院工学系研究科教授	日本原子力研究開発機構次世代原子力システム研究開発部門構造信頼性グループリーダー
20.4.1	野坂 正隆	大学院工学系研究科教授	宇宙航空研究開発機構システムズエンジニアリング推進室チーフテクノロジスト
20.4.1	有田 亮太郎	大学院工学系研究科准教授	理化学研究所専任研究員
20.4.1	大月 敏雄	大学院工学系研究科准教授	
20.4.1	菊地 隆司	大学院工学系研究科准教授	京都大学大学院工学研究科准教授
20.4.1	窪田 垂矢	大学院工学系研究科准教授	
20.4.1	八井 崇	大学院工学系研究科准教授	科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業継続研究課題ナノフォトニクスチーム研究員
20.4.1	野谷 文昭	大学院人文社会系研究科教授	
20.4.1	樋口 秀男	大学院理学系研究科教授	東北大学先進医工学研究機構教授
20.4.1	畑中 耕治	大学院理学系研究科附属 超高速強光子場科学研究センター准教授	北海道大学電子科学研究所特任教員
20.4.1	GALLY Thomas Kilburne	教養学部附属教養教育開発機構准教授	教養学部附属教養教育開発機構特別教育研究 教員
20.4.1	TABLERO VALLAS FRANCISCO JAVIER	教養学部附属教養教育開発機構准教授	
20.4.1	石井 剛	大学院総合文化研究科准教授	
20.4.1	石原 孝二	大学院総合文化研究科准教授	北海道大学大学院文学研究科准教授
20.4.1	澤井 哲	大学院総合文化研究科准教授	科学技術振興機構 ERATO 複雑系生命プロジェクトグループリーダー
20.4.1	松田 恭幸	大学院総合文化研究科准教授	理化学研究所中央研究所 岩崎先端中間子研究室前任研究員
20.4.1	道上 達男	大学院総合文化研究科准教授	産業技術総合研究所 器官発生工学研究ラボ主任研究員
20.4.1	若本 祐一	大学院総合文化研究科准教授	
20.4.1	橋川 健竜	大学院総合文化研究科附属 アメリカ太平洋地域研究センター准教授	千葉大学文学部准教授
20.4.1	牧野 篤	大学院教育学研究科教授	名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授
20.4.1	遠藤 利彦	大学院教育学研究科准教授	京都大学大学院教育学研究科准教授
20.4.1	小玉 重夫	大学院教育学研究科准教授	お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科教授
20.4.1	井 通暁	大学院新領域創成科学研究科准教授	大阪大学大学院工学研究科講師
20.4.1	小松 幸生	大学院新領域創成科学研究科准教授	水産総合研究センター中央水産研究所 海洋データ解析センター 海洋モデル研究グループ長
20.4.1	田中 耕一郎	大学院新領域創成科学研究科准教授	特許庁特許審査第三部審査官
20.4.1	横山 英明	大学院新領域創成科学研究科准教授	産業技術総合研究所 ナノテクノロジー研究部門 ナノ構造制御マテリアルグループ主任研究員
20.4.1	田中 淳	大学院情報学環附属 総合防災情報研究センター教授	
20.4.1	丹羽 美之	大学院情報学環准教授	
20.4.1	徳永 崇	大学院公共政策学連携研究部教授（出向）	警察庁刑事局刑事企画課情報分析支援室長
20.4.1	濡木 理	医科学研究所教授	東京工業大学大学院生命理工学研究科教授
20.4.1	山梨 裕司	医科学研究所教授	東京医科歯科大学難治疾患研究所教授
20.4.1	伊藤 彰彦	医科学研究所准教授	神戸大学大学院医学系研究科准教授
20.4.1	醍醐 弥太郎	医科学研究所附属 ヒトゲノム解析センター准教授	医科学研究所研究拠点形成特任教員
20.4.1	古井 龍介	東洋文化研究所准教授	
20.4.1	松田 康博	東洋文化研究所准教授	防衛省防衛研究所研究部 第6研究室主任研究官
20.4.1	石川 博康	社会科学研究所准教授	
20.4.1	中林 真幸	社会科学研究所准教授	大阪大学大学院経済学研究科准教授

20.4.1	村上 あかね	社会科学研究所附属 日本社会研究情報センター准教授	
20.4.1	沢田 治雄	生産技術研究所附属 都市基盤安全工学国際研究センター教授	森林総合研究所研究コーディネータ (国際研究担当)
20.4.1	永田 俊	海洋研究所教授	京都大学生態学研究センター教授
20.4.1	岡田 至崇	先端科学技術研究センター准教授	筑波大学大学院数理物質科学研究科准教授
20.4.1	南 正輝	先端科学技術研究センター准教授 (出向)	
(昇任)			
20.3.16	朝蔭 孝宏	大学院医学系研究科准教授	医学部講師
20.3.16	伊山 潤	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科講師
20.3.16	古村 孝志	地震研究所教授	地震研究所准教授
20.4.1	石原 孟	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科附属総合研究機構准教授
20.4.1	藤井 康正	大学院工学系研究科教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
20.4.1	酒井 幹夫	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科助教
20.4.1	下嶋 敦	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科助教
20.4.1	竹中 充	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科講師
20.4.1	松下 範久	大学院農学生命科学研究科准教授	大学院農学生命科学研究科講師
20.4.1	加藤 光裕	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
20.4.1	深代 千之	大学院総合文化研究科教授	大学院情報学環准教授
20.4.1	鷹野 澄	大学院情報学環附属 総合防災情報研究センター教授	地震研究所附属地震予知情報センター准教授
20.4.1	溝口 勝	大学院情報学環教授	大学院農学生命科学研究科准教授
20.4.1	松村 敏弘	社会科学研究所教授	社会科学研究所准教授
20.4.1	立間 徹	生産技術研究所教授	生産技術研究所附属 計測技術開発センター准教授
20.4.1	村松 伸	生産技術研究所教授	生産技術研究所准教授
20.4.1	佐藤 文俊	生産技術研究所附属 革新的シミュレーション研究センター教授	情報基盤センター准教授
20.4.1	大原 美保	生産技術研究所附属 都市基盤安全工学国際研究センター准教授	生産技術研究所附属 都市基盤安全工学国際研究センター助教
(配置後)			
20.4.1	大久保 靖司	環境安全本部准教授	保健センター准教授
20.4.1	倉光 修	学生相談ネットワーク本部教授	大学院教育学研究科教授
20.4.1	佐々木 司	学生相談ネットワーク本部准教授	保健センター准教授
20.4.1	相田 仁	大学院工学系研究科教授	大学院新領域創成科学研究科教授
20.4.1	伊庭 斉志	大学院工学系研究科教授	大学院新領域創成科学研究科教授
20.4.1	大西 隆	大学院工学系研究科教授	先端科学技術研究センター教授
20.4.1	菊池 和朗	大学院工学系研究科教授	大学院新領域創成科学研究科教授
20.4.1	柴田 直	大学院工学系研究科教授	大学院新領域創成科学研究科教授
20.4.1	近山 隆	大学院工学系研究科教授	大学院新領域創成科学研究科教授
20.4.1	門 信一郎	大学院工学系研究科准教授	高温プラズマ研究センター准教授
20.4.1	杉本 雅則	大学院工学系研究科准教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
20.4.1	竹内 健	大学院工学系研究科准教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
20.4.1	藤島 実	大学院工学系研究科准教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
20.4.1	峯松 信明	大学院工学系研究科准教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
20.4.1	佐藤 光三	大学院工学系研究科附属エネルギー・ 資源フロンティアセンター教授	大学院工学系研究科教授
20.4.1	玉木 賢策	大学院工学系研究科附属エネルギー・ 資源フロンティアセンター教授	大学院工学系研究科教授
20.4.1	増田 昌敬	大学院工学系研究科附属エネルギー・ 資源フロンティアセンター准教授	大学院工学系研究科准教授
20.4.1	松島 潤	大学院工学系研究科附属エネルギー・ 資源フロンティアセンター准教授	大学院工学系研究科准教授
20.4.1	松村 一登	大学院人文社会系研究科附属 次世代人文学開発センター教授	大学院人文社会系研究科教授
20.4.1	小川 雄一	大学院新領域創成科学研究科教授	高温プラズマ研究センター教授
20.4.1	鈴木 英之	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院工学系研究科教授
20.4.1	堀 洋一	大学院新領域創成科学研究科教授	生産技術研究所教授
20.4.1	山口 一	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院工学系研究科教授
20.4.1	横山 明彦	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院工学系研究科教授
20.4.1	小野 亮	大学院新領域創成科学研究科准教授	高温プラズマ研究センター准教授

20.4.1	馬場 旬平	大学院新領域創成科学研究科准教授	大学院工学系研究科准教授
20.4.1	堀田 昌英	大学院新領域創成科学研究科准教授	大学院工学系研究科准教授
20.4.1	早稲田 卓爾	大学院新領域創成科学研究科准教授	大学院工学系研究科准教授
20.4.1	中村 宏	大学院情報理工学系研究科准教授	先端科学技術研究センター准教授
20.4.1	石上 英一	大学院情報学環教授	史料編纂所附属画像史料解析センター教授
20.4.1	真鍋 祐子	大学院情報学環准教授	東洋文化研究所准教授
20.4.1	柳原 大	大学院情報学環准教授	大学院総合文化研究科准教授
20.4.1	古村 孝志	大学院情報学環附属 総合防災情報研究センター教授	地震研究所教授
20.4.1	中内 啓光	医科学研究所附属 幹細胞治療研究センター教授	医科学研究所附属 ヒト疾患モデル研究センター教授
20.4.1	永ノ尾 信悟	東洋文化研究所教授	大学院情報学環教授
20.4.1	桑原 雅夫	生産技術研究所教授	国際・産学共同研究センター教授
20.4.1	櫻井 貴康	生産技術研究所教授	国際・産学共同研究センター教授
20.4.1	須田 義大	生産技術研究所教授	国際・産学共同研究センター教授
20.4.1	畑中 研一	生産技術研究所教授	国際・産学共同研究センター教授
20.4.1	横井 秀俊	生産技術研究所教授	国際・産学共同研究センター教授
20.4.1	大岡 龍三	生産技術研究所准教授	生産技術研究所附属 都市基盤安全工学国際研究センター准教授
20.4.1	腰原 幹雄	生産技術研究所附属 都市基盤安全工学国際研究センター准教授	生産技術研究所准教授
20.4.1	火原 彰秀	生産技術研究所附属 計測技術開発センター准教授	生産技術研究所准教授
20.4.1	本郷 和人	史料編纂所准教授	大学院情報学環准教授
20.4.1	香川 豊	先端科学技術研究センター教授	国際・産学共同研究センター教授
20.4.1	西村 幸夫	先端科学技術研究センター教授	大学院工学系研究科教授
20.4.1	森川 博之	先端科学技術研究センター教授	国際・産学共同研究センター教授
20.4.1	渡部 俊也	先端科学技術研究センター教授	国際・産学共同研究センター教授
(出 向)			
20.4.1	加藤 孝久	出 向 (科学技術振興機構)	大学院工学系研究科教授
(兼 務 命)			
20.4.1	坂野 仁	留学生センター長	大学院理学系研究科教授
20.4.1	影山 和郎	人工物工学研究センター長	大学院工学系研究科教授
20.4.1	五十嵐 泰夫	生物生産工学研究センター長	大学院農学生命科学研究科教授
20.4.1	岡本 和夫	大学総合教育研究センター長	大学院数理科学研究科教授
20.4.1	宮野 健次郎	駒場オープンラボラトリー長	先端科学技術研究センター教授
20.4.1	柴崎 亮介	空間情報科学研究センター長	空間情報科学研究センター教授
20.4.1	米澤 明憲	情報基盤センター長	大学院情報理工学系研究科教授
20.4.1	駒宮 幸男	素粒子物理国際研究センター長	大学院理学系研究科教授
20.4.1	浅田 邦博	大規模集積システム設計教育研究センター長	大規模集積システム設計教育研究センター 教授
20.4.1	清水 孝雄	大学院医学系研究科長 医学部長	大学院医学系研究科教授
20.4.1	武谷 雄二	医学部附属病院長	大学院医学系研究科教授
20.4.1	保立 和夫	大学院工学系研究科長 工学部長 インテリジェント・モデリング・ラボラトリー 長	大学院工学系研究科教授
20.4.1	金子 元久	大学院教育学研究科長 教育学部長	大学院教育学研究科教授
20.4.1	南風原 朝和	教育学部附属中等教育学校長	大学院教育学研究科教授
20.4.1	杉山 雄一	大学院薬学系研究科長 薬学部長	大学院薬学系研究科教授
20.4.1	桂 利行	大学院数理科学研究科長	大学院数理科学研究科教授
20.4.1	金本 良嗣	大学院公共政策学連携研究部長 大学院公共政策学教育部長	大学院公共政策学連携研究部教授
20.4.1	山下 直秀	医科学研究所附属病院長	医科学研究所附属病院教授
20.4.1	梶田 隆章	宇宙線研究所長	宇宙線研究所附属宇宙ニュートリノ観測情報 融合センター教授
20.4.1	家 泰弘	物性研究所長	物性研究所教授

(兼務・終了)

20.4.1	黒田 真也	遺伝子実験施設長	大学院理学系研究科教授
20.4.1	渡部 俊也	国際・産学共同研究センター長	先端科学技術研究センター教授
20.4.1	小川 雄一	高温プラズマ研究センター長	大学院新領域創成科学研究科教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

# 平成20年度 学内広報 発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日	配布
1373	4月 28日(月)	5月 16日(金)	5月 22日(木)
1374	5月 28日(水)	6月 13日(木)	6月 19日(木)
1375	7月 2日(水)	7月 18日(金)	7月 25日(金)
1376	7月 31日(木)	8月 21日(木)	8月 27日(水)
1377	9月 3日(水)	9月 22日(月)	9月 29日(月)
1378	10月 1日(水)	10月 20日(月)	10月 24日(金)
1379	10月 29日(水)	11月 14日(金)	11月 20日(木)
1380	学生生活実態調査号		
1381	11月 26日(水)	12月 12日(金)	12月 18日(木)
1382	1月 7日(水)	1月 26日(月)	1月 30日(金)
1383	1月 29日(木)	2月 16日(月)	2月 20日(金)
1384	2月 25日(水)	3月 13日(金)	3月 19日(木)

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。

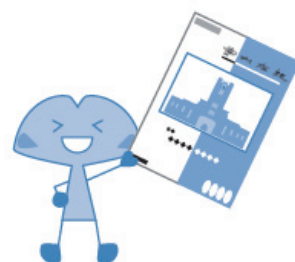
[http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html)

【東京大学ホームページ】→【右下の学内広報アイコンをクリック】

問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム

TEL:03-3811-3393 内線22031 E-mail:kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



# Contents

## 特集

- 02 平成 20 年度役員の紹介
- 04 平成 19 年度卒業式
- 09 平成 19 年度学位記授与式
- 14 平成 20 年度入学式・大学院入学式
- 30 平成 19 年度第 3 回「総長賞」授与式

## NEWS

### 一般ニュース

- 33 部局長の交代
- 36 **環境安全本部**  
『環境報告書 2007』が第 11 回環境コミュニケーション大賞「優秀賞（環境配慮促進法特定事業者賞）」を受賞
- 36 **環境安全本部**  
韓国の大学安全関係者が東京大学を視察
- 37 **本部学生支援グループ**  
Utol（東京大学アウトリーチイニシアティブ）第 1 回研究会開催される
- 38 **東大・イェールイニシアティブ**  
日本資料研究ワークショップ、イェール大学内で開催される！
- 38 **男女共同参画室・オフィス**  
国際シンポジウム「世界のスーパー女性研究者が語る—アカデミアの男女共同参画と学術の発展」を開催
- 39 **海洋アライアンス**  
総合海洋基盤（日本財団）プログラムが発足！
- 39 **本部研究推進グループ**  
独立行政法人日本原子力研究開発機構（JAEA）と連携協力の推進に係る協定書調印式が行われる。

### 部局ニュース

- 40 **大学院情報学環・学際情報学府**  
情報学環に総合防災情報研究センター（CIDIR）を設置
- 41 **大学院総合文化研究科・教養学部**  
国際シンポジウム「初年次教育の可能性」開催される
- 41 **教養学部・情報学環・大学総合教育研究センター**  
現代 GP 国際シンポジウム 開催される
- 42 **国際・産学共同研究センター**  
CCR 最終シンポジウム「東京大学の産学連携とCCRの果たした役割」開催される
- 43 **大学院総合文化研究科・教養学部**  
FRESH START@ 駒場、開催される
- 44 **大学院医学系研究科・医学部**  
医学部教育研究棟一階インテリア「ブーリアン／鉄門カフェ」が商空間アワード 2007 グランプリ他を受賞

### キャンパスニュース

- 45 **本部入試グループ**  
第 2 次学力試験（前期日程）の合格者、同（後期日程）第 1 段階選抜結果の発表
- 46 **本部入試グループ**  
第 2 次学力試験（後期日程）、外国学校卒業学生特別選考の合格者発表

## コラム

- 48 発掘！総長室総括委員会 第 5 回 最終
- 49 Step by Step 東大基金通信 第 12 回
- 50 Crossroad 産学連携本部だより vol.29
- 51 ケータイからみた東大～東大ナビ通信～第 5 回
- 52 コミュニケーションセンターだより No.46

- 52 Relay Column 「ワタシのオシゴト」 第 26 回
- 53 噴水 「教育学部附属中等教育学校『もっと明鏡』で大賞受賞」
- 53 噴水 「教育学部附属中等教育学校 東京都ロードレース大会入賞」
- 54 噴水 「学びの共同体」研究会行われる
- 55 噴水 教育学部附属中等教育学校で卒業式行われる
- 55 噴水 2 年総合学習発表会開催
- 56 噴水 「一日研究会」開催
- 56 噴水 教育学部附属中等教育学校で入学式おこなわれる
- 57 噴水 「教育学部附属中等教育学校 全日本シンクロナイズドスケート大会入賞」

## INFORMATION

### お知らせ

- 57 **東京大学ナノバイオ・インテグレーション研究拠点**  
若手奨励研究者の公募について
- 58 **本部学生支援グループ**  
なんでも相談コーナー開設
- 58 **附属図書館**  
イェール大学の図書館利用について
- 59 **附属図書館・情報基盤センター**  
写真帖『東京帝国大学』電子版の公開について
- 59 **大学院総合文化研究科・教養学部**  
「教養学部報」第 510(4 月 2 日)号の発行——教員による、学生のための学内新聞——
- 60 **大学院総合文化研究科・教養学部**  
教養学部進学情報センター主催シンポジウム「私はどのようにして専門分野を決めたか」
- 60 **大学院総合文化研究科・教養学部**  
第 3 回教養学部選抜学生コンサート
- 61 **大学院総合文化研究科・教養学部**  
第 113 回教養学部オルガン演奏会
- 61 **情報基盤センター**  
“情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ
- 62 **大学院理学系研究科・理学部**  
第 13 回理学部公開講演会
- 62 **大学院総合文化研究科・教養学部**  
第 114 回教養学部オルガン演奏会
- 63 **低温センター**  
平成 20 年度保安教育『低温講習会』のお知らせ
- 64 広報委員長の交代

## 事務連絡

- 65 教員異動
- 70 平成 20 年度学内広報発行スケジュール

## 淡青評論

- 72 コピー & ペースト

### ◆ 表紙写真 ◆

平成 20 年度入学式会場（日本武道館）  
（2 ページに関連記事）



七徳堂鬼瓦

## コピー&ペースト

近年、学生にレポート作成の課題を出すと、同じような答えが書かれて提出されてくる。どうもそれらの多くは、課題のキーワードをインターネットで検索して、関係する部分をコピー&ペーストして作成されたものようである。先日、知人の教員から、変な話を聞いた。良くできたレポートを選び、それを Web で見本として公開しようとしたところ、かなりの部分がインターネットからのコピー&ペーストで作成されていることがわかり、取りやめになったという話である。私が学生の時には、わからない点は教員に聞いたり図書館などで調べものをしたりして、何とか期

日までにレポートを書き上げていた記憶がある。PC などはまだ使える状況にはなかったため、レポートは当然手書きであった。自分で調べものをしたとはいえ、参考書などに書かれていることをレポートに書くわけで、この作業もまた一種のコピー&ペーストのようなものであるともいえる。しかし、参考書に書かれてある膨大な量を手で書き写すのが大変なこともあり、そのエッセンスを抜き出して書く必要がある。その抜き出し方が各人で異なり、結果的にレポートの個人差、個性にもなる。また、この作業は書かれている内容を理解する必要があり、必然的に教育的な効果ももたらされていたと思う。インターネットの情報については、簡単に見られるという気軽さが背景にあるからか、あまりに気楽に“自分のもの”にしてしまいがちである。また、こういった public ソースにでているものには正しいことが書かれていると信じきっており、この本質を理解しないままに大量の文章をそのままコピー&ペーストしてしまい、見かけ上、立派なレポートを作ってしまうこともある。PC を使って、簡単にレポートが作成できるような便利な世の中になったとつくづく感じさせられる一方、こういった便利な環境要因によって生じる新しい問題に対処する必要が出てきているようである。レポートなどを書く際に、参考とした資料について、その出典を明らかにするよう指導を強化する必要があるだろうし、大学でも著作権に関する講義をしっかりとしないと、厄介な問題に遭遇することがあるのかもしれない。

西山 真 (生物生産工学研究センター)

(淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No. 1372 2008年4月18日

東京大学広報委員会

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報グループ

TEL : 03-3811-3393

e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

<http://www.u-tokyo.ac.jp>